

(公財)東洋文庫社会經濟史班研究成果

『新刻天下四民便覽三台万用正宗』卷之三十八(上層)

農桑門訳注稿

(試行本 Ver.1)

2023年12月

公益財団法人 東洋文庫研究員

大澤 正昭

『新刻天下四民便覧三台萬用正宗』卷之三十八(上層)農桑門訳注稿

凡例

* 本稿は余象斗撰『新刻天下四民便覧三台萬用正宗』(萬曆二七(1599)年刊) 卷之三十八(上層)農桑門の訳注稿である。(公財)東洋文庫の社会経済史班(斯波義信班長)では明代日用類書の研究を進めているが、本稿は2022年3月から検討を始め、2023年5月の研究会で一応完了した。その後、全体の体裁を整えるなど、若干の補訂をおこなった。

* 体裁は条文の大きなまとまりごとに番号を振り、【原文】【出典および参考史料】【訓読】【現代語訳】をつけている。【原文】では【出典および参考史料】によって文字の校訂をおこない、あるいは脱字の場合は補足している。また文字に疑念がある場合も訂正案を提示している。

* 原文には独特の異体字が用いられているが、通行の文字と判読できたものはそれを使うこととした。

* 同時に原文では俗字や略字(現代の簡体字と共通するものもある)が使われているが、すべて現代日本の常用漢字に直す。たとえば次のような文字がある。

ヒ=直前の文字と同字を示す記号、爰→愛、叭→以、过→過、隹→佳、解→解、实→實、處→處、微→微、羨→美、离→離、廬→廬、簍→簍、劳→勞、趋→趨

* 【原文】で『三台万用』のテキストを訂正・補足する場合は〔 〕を用いる。たとえば訂正の場合は字数に限らず「〇〔訂正した文字〕」と下線を引いて訂正し、文字を補足する場合はただ補足すべき文字を〔 〕に入れる。【訓読】では訂正あるいは補足した【原文】を使う。また Word にない文字は〔 〕を用いて、文字を構成する成分を示す。たとえば〔●+○-△〕のように表記する。影印が不鮮明で判読困難な文字は〔 〕を付し、〔●?〕のように表記する。

* 【現代語訳】で訳文を補う場合は〔 〕に入れる。意味を解説する場合は〔=〇〇〕とする。

* 【出典および参考史料】で主に使用する農書の略称および使用テキストは次の通りである。

『要術』=北魏・賈思勰撰『齊民要術』、繆啓愉校釈『齊民要術校釈』(農業出版社、1982年)。

『陳勇』=南宋・陳勇撰『農書』、大澤訳注『陳勇農書の研究』(農山漁村文化協会、1993年)。

『輯要』=元・大司農司(至元十(1273)年刊)『農桑輯要』、繆啓愉校釈『元刻農桑輯要校釈』(農業出版社、1988年)。

同上引用書:『務本新書』『務本直言』王毓瑚説:佟(脩)廷益撰。元代前期に流布。

宮紀子説:東平の脩端撰、1238年以降の成立。『新書』の増改訂本が『直言』。

『士農必用』宮紀子説:左轄公姚枢撰、憲宗の元年(1251年)から三年後のあたりに編纂。

繆啓愉説:金滅亡(1234年)の数年後から1273年までの間に成立。

『農桑直説』未詳。

『王禎』=元・王禎撰(1313年成立)『農書』、王毓瑚校『王禎農書』(農業出版社、1981年)。

繆『王氏訳注』=繆啓愉・繆桂龍訳注『東魯王氏農書訳注』(上海古籍出版社、2008年)。

なお②種栽花法以下の項目では主たる典拠が未詳である。同様な記事がいくつかの史料に見出されるものの、余象斗が主に何に依拠したのか限定できない。そこで【参考史料】として関連する史料を列挙することとした。書

名は各項に掲げるが、書誌データおよび使用テキスト(()内)はここにまとめて掲げておきたい。

『分門瑣碎録』:南宋初期、温革撰・陳擘増補。(化振紅『《分門瑣碎録》校注』(巴蜀書社、2009年))

『種藝必用』:南宋末期、吳懌撰、元・張福補遺。(胡道静校注本(農業出版社、1963年))

『事林広記』の三種の刻本:南宋理宗朝、陳元靚編。

『新編纂図増類群書類要事林広記』(元・至順刊本、中文出版社、1988年影印版)

『纂図増新群書類要事林広記』(元・後至元刊本、中華書局、1999年影印版)

『新編群書類要事林広記』(和刻本、同前)。

『農桑衣食撮要』:元、魯明善撰。(王毓瑚校注版(農業出版社、1962年))

『山居四要』:元、汪如懋撰。(至正二十(1360)年)

『種樹書』:元末明初期、兪宗本撰。(康成懿校注・辛樹幟校閲版(農業出版社、1962年))

『便民圖纂』:明、鄭璠撰。(石聲漢・康成懿校注版(農業出版社、1959年))

『遵生八箋』:明、高濂撰。(万曆十九(1591)年序刊本)

『二如亭群芳譜』:明、王象晋(万曆三二(1604)年進士)撰。(天啓元(1621)年序刊本、早稲田大学 web 公開版)

『居家必用事類全集』:明、不著撰人。(嘉靖三十九(1560)年序刊本)

『増補山林經濟』:朝鮮・洪萬選(1643~1715年)撰、柳重臨増補。

*原稿の点検には杉浦廣子氏のご援助をいただいた。ここに感謝の意を表します。

*本稿に取り上げた原文は誤字・脱字も多く、解釈ができない箇所があった。また研究が不十分で誤解している箇所もあるかもしれない。読者諸賢の率直なご批判をお待ちしている。

2023年12月 大澤正昭 記す

「農桑便覧」

(1)「木刻耕夫織婦贊」

【原文】

《木刻耕夫・織婦贊(一)》

叙曰 神農氏斲木爲耜、揉木爲耒、耒耨^①之利、以教天下、蓋取諸益(二)。黃帝垂衣裳、而天下治、蓋取諸乾坤(三)。是知千乘之城、非粟無以守(四)。七十^②非帛無以煖^③(五)。故后稷配天^④社之享(六)、蠶室有后妃之制(七)。則耕桑爲當世之先務。何可廢也。耕於歷山(八)者、所以顯重華之德、庄^⑤於岐伯^⑥(九)者、所以表太王^⑦之美。千畝不敢廢三推之耕^⑧(十)也、郊廟^⑨不容廢^⑩織室之政(十一)也。凡此者皆以開衣食之原^⑪、備祀禮之具^⑫。若夫列五鼎(十二)者、食旣馬以紅粟^⑬(十三)、不知稼穡之艱。庇萬間^⑭者、被厦^⑮屋以紋繡、不念蠶織^⑯之苦。奚^⑰足語力本之道、以^⑱成三代皇治之美^⑲哉。我皇家洪遇〔邁〕、哲王勃興^⑳、文德誕敷(十四)、武功昭著。風雨調^㉑而五穀登、教化行而兆民泰。聖皇聽政之暇^㉒、端居穆清、閱宮中之暇^㉓、立當代之制^㉔。晶熒五色、黃屋非^㉕帝堯之心(十五)、播殖^㉖五穀、躬耕是禹稷之事。所以身率藉田、化民成俗、農桑是攷^㉗。乃命有司、刻木爲耕夫・耨^㉘人、又爲織婦・蠶女之像、置之於紫宸^㉙殿。大矣哉、聖人勸農・務本之意歟。語不云乎、上有好者^㉚、下必有^㉛甚焉者^㉜。風行草偃(十六)、疾如健^㉝頤^㉞(十七)。將見豳風復盛、同穎入蠶之端^㉟(十八)、可翹首以待也。臣近^㊱因召對、獲蒙宣示、特命臨^㊲觀、拜首^㊳●●^㊴賀。職●●^㊵言、敢揚^㊶君美^㊷。銅雀^㊸(十九)應侯、將觀^㊹南畝之嘉祥(二十)、蒼^㊺龍●●^㊻、願紀東郊之盛禮(二十一)。跪述贊曰、

良匠度木(二十二) 物無遁形^㊼(二十三) 匠出心計 形逐意生 力爭^㊽造化 色奪丹雘^㊾ 像披^㊿綠襖^㊿ 列於彫^㊿庭 仙蠶扶桑 徒有虞名 寒耕暑耨 上感皇情 帝語影轉 遲遲^㊿欲行 ●●^㊿風度 禮禮^㊿有聲 吾皇親

之 信可經營 且理⁵⁴是念 侈心不萌 乾行(二十四)日⁵⁵健 日昭⁵⁶爲明 其道罔息 其德彌馨 神農帝舜
我后連衡⁵⁷ 直書史策 敢告後⁵⁸昆⁵⁹

【校注】

①「耨」 a 作「耜」。 ②「七十」 a/b 作「民之五十」四字。 ③「煖」 a/b 作「暖」。 ④「天」 a/b「廟」。 ⑤「庄」 a/b 作「遷」。當從之。 ⑥「伯」 a/b 作「陽」。 ⑦「王」 a/b 作「姒」。 ⑧「耕」 a/b 作「恭」。 ⑨「郊廟」 a/b 作「北郊」。 ⑩「廢」 a/b 作「罷」。 ⑪「原」 a/b 作「源」。 ⑫「備祀禮之具」 a/b 作「興禮節之風耳」六字。 ⑬「食廐馬以紅粟」 a/b 作「棄良種以紅腐」。 ⑭「庇萬間」 a/b 作「誇盛飾」。 ⑮「厦」 a/b 作「牆」。 ⑯「蠶織」 a/b 作「織耕」。 ⑰「奚」 a/b 作「豈」。 ⑱a/b 此間有「栽」一字。 ⑲「皇治之美」 a/b 作「風俗之變」。 ⑳「皇家洪遇哲王勃興」 a 作「國家撫安疆土」、b 作「皇家撫安疆土」六字。 ㉑「調」 a/b 作「時」。 ㉒「暇」 a/b 作「殿」。 ㉓「暇」 a/b 作「儀」。當從之。 ㉔「立當代之制」 a 作「思達三代之好」、b 作「恩達三代之好」六字。 ㉕「非」 a/b 作「乃」。 ㉖「殖」 a 作「植」。 ㉗「是攷」 a 作「之務」、b 作「之政」。 ㉘「耕夫耨」 a 作「耦」、b 作「偶」一字。 ㉙「宸」 a/b 作「薇」。 ㉚「好者」 a/b 作「所好」。 ㉛「有」 a/b 此字缺。 ㉜「者」 a/b 此字缺。 ㉝「健甌」 a/b 作「建瓴」。當從之。 ㉞「入蠶之端」 a 作「九穗之瑞」、b 作「九穗之端」。當從 a。 ㉟「近」 b 作「遞」。 ㊱「特命臨」 a/b 作「拭目竊」。 ㊲「●」 a/b 作「稱」。當從之。 ㊳「●●」 a 作「預司」、b 作「在司」。兩者當從之。 ㊴「揚」 a/b 作「蔽」。 ㊵「美」 a/b 作「善」。 ㊶「雀」 a/b 作「爵」。 ㊷「觀」 b 作「見」。 ㊸「蒼」 a/b 作「仙」。 ㊹「●●」 a/b 作「載降」。當從之。 ㊺「形」 a/b 作「情」。 ㊻「力爭」 a 作「功爭」、b 作「功事」。 ㊼「責」 a/b 作「青」。當從之。 ㊽「披」 a/b 作「彼」。 ㊾「襖」 a/b 作「野」。 ㊿「彫」 a/b 作「彤」。 ①「遲遲」 a/b 作「條條」。 ②「●●」 a/b 作「宮簾」。當從之。 ③「禮禮」 a/b 作「札札」。當從之。 ④「且理」 a/b 作「井田」。 ⑤「行日」 b 作「日行」。 ⑥「日昭」 a/b 作「離照」。 ⑦「連衡」 a/b 作「遵從」。 ⑧「後」 a/b 作「寰」。 ⑨「昆」 b 作「瑩」。

【出典および参考史料】

(一)「木刻耕夫・織婦贊」 この文章については次のような関連記事がある。

A 『資治通鑑』卷二九四後周顯德五年十月「庚子、……帝留心農事、刻木爲耕夫、蠶婦、置之殿庭」。

B 『宋史』卷二六九陶穀伝 「(後周)顯德三年、遷兵部侍郎、加承旨。世宗留心稼穡、命工刻木爲耕夫、織婦、蠶女之狀、置於禁中、思廣勸課之道。穀爲贊辭以進」。

C 『冊府元龜』卷七〇帝王部・務農「少帝開運二年十二月、中書舍人陶穀奏、竊以稼穡爲生民之天、機杼乃豐財之本。是以耕根在御、王者用三推之耕、鞠衣載陳、后妃有躬桑之禮。則知自天子至于庶人、不可斯須忽於農桑也。又司馬遷著書曰、齊魯之間、千畝桑、安邑千樹棗、其人與千戶侯等。伏見近年已來、所在百姓、皆伐桑爲柴、忘終歲之遠圖、趨一日之小利。既所司不禁、乃積習生。……」

AとBによればこの文章は五代後周の陶穀が書いたものと思われる。またCを読むと本文と共通する語彙が使われており、陶穀の作であることを裏付けてくれる。

しかし、この文章の典拠が見つからなかった。そこで(公財)東洋文庫のアルバイト、杉浦廣子さんに調査していただいたところ、明・喻本元、喻本亨撰『重編校正元亨療馬牛駝經全集』(農業出版社、1963年)「牛經」に、標点を付して収載されていることがわかった。この本は東洋文庫にも所蔵されており、底本は明の万曆戊申(1608年)刊である。また、同書は国立公文書館にも喻仁本元編、喻傑本亨集『元亨療馬集』として収蔵され、デジタルアーカイブとして公開されていた。その序には康熙庚申(1680年)の序文がついており、標点本の底本よりも新しい版本である。問題の文章は「新刻蘇板元亨療牛集」上巻に掲載されていた。他方、本書については王毓瑚『中国農学書録』および天野元之助『中国古農書考』(合編本は龍溪書舎、1975年)

に取り上げられ、解題がなされていた。それによれば書名は『元亨療馬集』あるいは『療馬集』で、著者は明の愈仁(字本元)・愈傑(字本亨)兄弟とする(愈は喩の誤りであろう)。版本として比較的早いものは丁賓の序がある万暦三六(1608)年版であるという。これは標点本の底本と同じものとみられる。『三台万用』が万暦二七年刊であるから、ほぼ同時期の本である。

以上の二種のほかには関連する史料が見つかっておらず、本稿ではこれらに拠って文字の校注を付けることとした。aが標点本で、bが国立公文書館所蔵本の文字である。

- (二)「神農氏斲木爲耜、揉木爲耒、耒耨之利、以教天下、蓋取諸益」 『易経』繫辞下「神農氏作、斲木爲耜、揉木爲耒、耒耨之利、以教天下、蓋取諸益」。
- (三)「黄帝垂衣裳、而天下治、蓋取諸乾坤」 同前「黄帝堯舜垂衣裳、而天下治、蓋取諸乾坤」。
- (四)「千乘之城、非粟無以守」 未詳。「金湯之固、非粟不守」という諺があるという。
- (五)「七十非帛無以煖」 『礼記』内則「凡養老、……而后制五十始衰、六十非肉不飽、七十非帛無以煖、八十非人不煖、九十雖得人不煖矣」。
- (六)「后稷配天社之享」 『詩経』周頌・清廟之什「思文后稷、克配彼天」。
- (七)「蠶室有后妃之制」 『礼記』祭義「古者天子・諸侯、必有公桑・蠶室。近川而爲之、築宮仞有三尺、棘牆而外閉之」。『王禎』農器図譜集之十六「周制(前記の引用)。后妃齋戒、享先蠶而躬桑、以勸蠶事」。
- (八)「耕於歷山」 『史記』五帝本紀「舜耕歷山、歷山之人皆讓畔。漁雷澤、雷澤上人皆讓居。陶河濱、河濱器皆不苦窳。一年而所居成聚、二年成邑、三年成都」。
- (九)「庄於岐伯」 「遷」であれば『史記』周本紀「古公亶父……乃與私屬遂去豳、度漆、沮、逾梁山、止於岐下。豳人舉國扶老携弱、盡復歸古公於岐下。及他旁國聞古公仁、亦多歸之」。
- (十)「千畝不敢廢三推之耕」 『詩経』周頌・載芟「春籍田而祈社稷也。鄭玄箋、籍田、甸師氏所掌、王載耒耜、所耕之田。天子千畝、諸侯百畝。『礼記』月令・孟春之月「帥三公、九卿、諸侯、大夫、躬耕帝藉、天子三推、三公五推、卿諸侯九推」。
- (十一)「郊廟不容廢織室之政」 『漢書』卷八「……詔曰:「乃者、東織室令史張赦(應劭曰、舊時有東西織室、織作文繡・郊廟之服)、使魏郡豪李竟報冠陽侯霍雲謀爲大逆」。
- (十二)「五鼎」 用例:『史記』平津侯列伝「且丈夫生不五鼎食、死即五鼎烹耳」。
- (十三)「紅粟」 用例:『漢書』卷六四下・賈捐之伝「至孝武皇帝元狩六年、太倉之粟、紅腐而不可食、都内之錢貫、朽而不可校」。
- (十四)「文德誕敷」 『書経』大禹謨「帝乃誕敷文德、舞干羽于兩階」。
- (十五)「黄屋非帝堯之心」 用例:陳子昂「感偶詩三十八首」の十九「聖人不利己、憂濟在元元。黄屋非堯意、瑤台安可論」。
- (十六)「上有好者、下必有甚焉者。風行草偃」 『孟子』滕文公章句「上有好者、下必有甚焉者矣。君子之德風也、小人之德草也、草尚之風必偃」。『論語』顔淵「君子之德風也、小人之德草也、草上之風必偃」。
- (十七)「建瓴」 『史記』高祖本紀「譬猶居高屋之上、建瓴水也」。
- (十八)「同穎入蠶之瑞」 未詳。a「九穗之瑞」であれば、『東觀漢記』卷一光武帝紀に「光武帝諱秀、高帝九世孫也。……建平元年十二月甲子夜、上生時、有赤光、室中盡明、皇考異之……是歲、有嘉禾生、一莖九穗、長大於凡禾、縣界大豐熟、因名上曰秀」とあり、文意が通じる。
- (十九)「銅雀」 『三輔黄圖』建章宮「古歌云、長安城西有双闕、上有双銅雀、一鳴五穀成、再鳴五穀熟」。
- (二十)「南畝之嘉祥」 「南畝」は『詩経』小雅の「甫田」「大田」などにみえる日当たりの良い畑。農耕儀礼を詠つ

ている。

(二十一)「蒼龍……」 用例: 皇甫冉「東郊迎春」「曉見蒼龍駕、東郊春已迎」

(二十二)「良匠度木」 用例: 梁、劉勰『文心雕龍』事類「夫山木爲良匠所度、經書爲良士所擇。」

(二十三)「物無遁形」 用例: 晋、陸機「漢高祖功臣頌」、「鬼無隱謨、物無遁形」。

(二十四)「乾行日健」 『易經』同人「同人于野、亨、利涉大川、乾行也。文明以健、中正而應、君子正也。」

【訓読】

《木刻耕夫・織婦贊》

叙に曰く 神農氏、木を斲りて耜を爲り、木を揉めて耒を爲り、耒耨の利、以て天下に教へしは、蓋し諸を益に取るなり。黄帝、衣裳を垂れ、而して天下治まるは、蓋し諸を乾坤に取るなり。是に知る、千乗の城、粟に非ざれば以て守る無く、七十、帛に非ざれば以て煖むること無し、と。故に后稷は天社の享に配し、蠶室は后妃の制有り。則ち耕と桑とは當世の先務と爲す。何ぞ廢す可けんや。歴山に耕すとは、重華の徳を顯す所以にして、岐伯に遷るとは、太王の美を表す所以なり。千畝は敢て三推の耕を廢さず、郊廟は織室の政を廢するを容さざるなり。凡そこれらは皆な以て衣食の原を開き、祀禮の具を備ふ。夫の五鼎を列ぬる者の若きは、厩馬に食らはすに紅粟を以てし、稼穡の艱しみを知らず。盛飾を誇る者は、厦屋を被ふに紋繡を以てし、蠶織の苦しみを念はず。奚くんぞ本に力むるの道を語り、以て三代皇治の美を成すに足らんや。我が皇家洪邁し、哲王勃興し、文徳もて誕敷し、武功は昭らかに著はる。風雨調ひて五穀登り、教化行なはれて兆民泰らかなり。聖皇、聴政の暇[㊟]、穆清に端居し、宮中の儀を閲し、當代の制を立つ。五色に晶熒し、黄屋は帝堯の心に非ず、五穀を播殖し、躬ら耕すは是れ禹稷の事なり。所以に身ら率ゐて藉田し、民を化して俗を成し、農桑是れ攷ふ。乃ち有司に命じて、木を刻みて耕夫・耨人を爲らしめ、又た織婦・蠶女の像を爲らしめ、之を紫宸殿に置かしむ。大いなるかな、聖人の勸農・務本の意ならん歟。語に云はざるか、上に好む者有れば、下に必ず焉より甚しき者有り。風行れば草は偃せ、疾きこと建瓴の如し。將に豳風の復た盛んなるを見んとし、同穎に九穗の瑞を、翹首して以て待つ可きなり。臣、近ごろ召對に因りて、宣示を蒙るを獲、特に臨觀を命ぜられ、拝首して稱賀す。職は司言に預(あるいは在)り、敢えて君の美を揚(あらわ)す。銅雀は侯に應じ、將に南畝の嘉祥を觀せんとし、蒼龍は載ち降り、東郊の盛禮を紀さんことを願ふ。跪きて贊を述べて曰く、

良匠、木ヲ度(ハカ)レバ、物ハ形ヲ遁(カク)ス無ク 匠、心計ヲ出セバ、形、意ヲ逐ヒテ生ズ カモテ造化ヲ争ヘバ、色ハ丹青ヲ奪フ 像ハ緑襖ヲ披(キ)テ、彤庭ニ列ス 仙蠶・扶桑、徒ニ虞名有り 寒耕・暑耨、上、皇情ニ感ズ 帝ノ語ハ影轉シテ、遲遲トシテ行(メグ)ラント欲ス 宮簾ノ風度ハ、札札トシテ聲有り 吾ガ皇之ヲ觀(ミ)、信(マコト)ニ經營ス可シ 且ツ理ハ是レ念ヒ、侈心萌(キサ)サズ 乾ノ行ハ日ビニ健ク、日ハ昭ラカニシテ明ト爲ス 其ノ道ハ息ム罔(ナ)ク、其ノ徳ハ彌イヨ馨ル 神農・帝舜ハ、我ガ后連衡ス 直ダチニ史策ニ書キ、敢ヘテ後昆ニ告グ

【現代語訳】

《木彫耕夫・織婦像の贊》

叙曰 『易經』に「神農氏は木を削って耜を作り、木をたわめて耒を作り、耒や耨の利を天下に教えたが、これは易の益の卦から得た」「黄帝は衣裳を行きわたらせて天下が治まったが、これは乾・坤の卦から得た」という。ここから「千乗の国は粟がなければ守れない」ことがわかる。『礼記』に「七十歳になれば絹物がないと暖を取ることができない」という。故に后稷を天の神とあわせ祀り、蚕室は后妃がこれを祀るきまりがある。そうであるから耕(=農業)と桑(=養蚕・絹織)は今の世の優先すべき本務であり、決しておろそかにすべきではない。「歴山ニ耕ス」というのは、舜が文徳の輝きを重ねた徳を顕彰するのであり、「岐伯ニ遷ル」(1)というのは、太王(=古公亶父)のすばらしさを表している。千畝の農地では天子が藉田を「三推(=三度往復する)」して耕す儀礼をあえて廢止せず、郊廟の

[祭祀用の服を織る]織室の法制は廃止することを許さなかった。およそこれらのことはみな衣食の起源を示し、祭祀・儀礼を漏れなく具備しているということである。かの「五鼎ヲ並ベル」の如きは、「厩馬に紅粟を食わせる」ものであり、稼穡の艱難を理解していない。「盛んな装飾を誇る者」(2)の如きは、大きな家屋を美しい絹物で覆っており、養蚕・機織の苦労を思っていない。どうして本業に勤しむ方法を語り尽くし、夏・殷・周三代の皇帝の美德を見習って完成させることなどできようか。我が皇家は統治に邁進され(3)、聖王が出現され、文徳が行き渡り、武功は輝いている。風雨は順調で五穀が実り、教化が進み人民は豊かである。聖皇が政務を執行する宮殿(4)はおだやかで清らかな日常であり、宮中の儀礼を検討して、現在の法制を作られた。五色にきらめく天子の車は帝堯の心意ではなく、五穀を栽培してみずから耕すのは禹と后稷の事業である。それゆえみずから藉田を耕し、人民を感化し、農と桑を考えたのである。そこで担当機関に命じ、木を彫って耕夫・耨人の像を作らせ、さらに織婦・蚕女の像を作らせ、これを紫宸殿に置かせた。大いなるかな、聖人の勸農・務本の意たるや。『孟子』に言うではないか。「上ニ好ム者有レバ、下必ズコレヨリ甚シキ者アリ」と。風が吹けば草は倒れ伏し、その素早さは「屋根の上から水をぶちまける」(5)がごとくである。『詩経』「豳風」の盛世が復興し、一本の茎に九本の穂先がつくような瑞祥(6)を、頭を上げて待ち望んでいる。臣は近頃天子の召對によって宣示をいただき、特に[木像の]拝観を命じられ、拝礼して祝賀した。私の職は王言を掌る中書舎人(7)であり、敢えて君主の美を高めるものである。[豊年を告げる]銅雀が鳴いて、「南畝」の吉祥をあらわし、蒼龍がここに降り、東郊の盛禮を記すことを願っている。跪いて贊を述べる。

良匠、木ヲ度(ハカ)レバ、物ハ形ヲ遁(カク)ス無ク 匠、心計ヲ出セバ、形、意ヲ逐ヒテ生ズ カモテ造化ヲ争ヘバ、色ハ丹青ヲ奪フ 像ハ緑襖ヲ披(キ)テ、彤庭(8)ニ列ス 仙蠶・扶桑、徒ニ虚名有リ 寒耕・暑耨、上、皇情ニ感ズ 帝ノ語ハ影轉(9)シテ、遲遲トシテ行(メ)ラント欲ス 宮簾ノ風度ハ、札札トシテ(10)聲有リ 吾ガ皇之ヲ觀(ミ)、信(マコト)ニ經營(11)ス可シ 且ツ理ハ是レ念ヒ、侈心萌(キザ)サズ 乾ノ行ハ日ビニ健ク(12)、日ハ昭ラカニシテ明ト爲ス 其ノ道ハ息ム罔(ナ)ク、其ノ徳ハ彌イヨ馨ル 神農・帝舜ハ、我ガ后連衡ス 直ダチニ史策ニ書キ、敢ヘテ後昆(=子孫、後世)ニ告グ

【注】

- (1)「庄」 意味が通らないので a/b の「遷」に従う。
- (2)「庇萬間」 a/b の「誇盛飾」の方が理解しやすいのでこれに従う。
- (3)「洪遇」 意味が通らないので「遇」は「邁」の誤りと考える。
- (4)「暇」 意味が通らないので a/b の「殿」に従う。
- (5)「健甌」 出典から考えれば「建瓴」の誤りであろう。a/b に従う。
- (6)「入蠶之端」 意味が通らないので a の「九穂之瑞」に従う。
- (7)「司言」 龔延明『中国歴代職官別名大辞典』(増訂本、中華書局、2021 年)では唐代の中書舎人の別名とする。前掲史料Bの『宋史』陶穀伝によれば、陶穀は後漢の時期に中書舎人になっていた。
- (8)「彤庭」 朱漆で装飾した漢代の宮廷。原文の「彫庭」は誤り。
- (9)「影轉」 未詳。
- (10)「禮禮」 意味が通らないので a/b の「札札」に従う。「札」を「禮」の古字「礼」と混同したのでであろう。擬音語か。
- (11)「經營」 『詩経』小雅・北山「旅力方剛 經營四方」白川静氏『詩経雅頌』(東洋文庫、1998 年)の解釈:「奔走して治める」
- (12)「乾行日健」 高田真治・後藤基巳訳『易経』(岩波文庫)では「大川ヲ渉ルニ利ロシトハ、乾ノ行ナリ。文明ニシテ以テ、中正ニシテ應ズ。君子ノ正ナリ」と読む。公明正大であれば、大事を決行してもよい、という意。

(2) 蚕事源流

本条はすべて『王禎』農桑通訣集之一「蚕事起本」に拠っている。【原文】の〔 〕内は『王禎』の文字を示す。

【原文】

蠶事起本 黄帝、少昊〔典〕之子、姓公孫、名軒轅。生而神靈、弱而能言、幼而徇齊、長而聰明。神農氏衰、諸侯相侵伐。神農氏弗能征。於是軒轅乃習用干戈、以征不享。諸侯皆來賓從、而蚩尤爲最暴。乃徵師殺蚩尤(一)。垂衣裳而天下治(二)。易係〔繫〕曰、神農氏沒、黄帝・堯・舜氏作。通其變、使民不倦、垂衣裳而天下治、蓋取諸乾坤(三)。按黄帝元妃西陵氏、始勤〔勸〕蚕事。月大火而浴種(四)。夫人副禕而躬桑、乃獻繭稱絲。織紉之功因之廣、織以供郊廟之服(五)、所謂黄帝垂衣裳、而天下治、蓋由此也。然黄帝始置宮室、乃得育蚕、是爲起本。

西陵氏曰儻〔女+纍〕祖、爲黄帝元妃。淮南王蚕經云、西陵氏觀〔勸〕蚕稼、親蚕始此。皇圖要覽云、伏羲化蚕、西陵氏養蚕。礼記月令、季春后妃齋戒。享先蚕而躬桑、以勸蚕事(六)。周礼天官内宰、中春詔后帥内外命婦、始祭蚕於北郊(原注:蚕於北郊、以純陰也)(七)、上古有蚕叢帝(八)、無文可考。蓋古者祭蚕無主名、至後周壇祭先蚕、以黄帝元妃西陵氏爲始(九)。是爲先蚕、歷代因之。嘗謂天駟爲蚕精。元妃西陵氏始蚕、實爲要典。若夫漢祭宛〔苑〕窳婦人、寓氏公主(十)、蜀有蚕女馬頭娘(十一)、又有謂三姑爲蚕母者、此皆後世之溢典也。然古今所傳、立像而祭、不可遺闕。故併附之。夫蚕之有効於人、萬世永賴、注於祀典、以示報本。後之蒙衣被之德者、其可不知所本耶。嘗撰蚕者祭文二篇(十二)、以爲祈報之禮(十三)。

【出典および参考史料】

- (一)「黄帝、少昊之子……」 『史記』五帝本紀「黄帝者、少昊之子、姓公孫、名曰軒轅。生而神靈、弱而能言、幼而徇齊、長而敦敏、成而聰明。軒轅之時、神農氏世衰。諸侯相侵伐、暴虐百姓、而神農氏弗能征。於是軒轅乃習用干戈、以征不享。諸侯咸來賓從。而蚩尤最爲暴、……於是黄帝乃徵師諸侯。」
- (二)「垂衣裳、而天下治」 前掲①注(三) 『易經』繫辭下
- (三)「易係曰……」 前掲①注(二) 『易經』繫辭下
- (四)「大火而浴種」 『周禮』夏官・馬質「禁原蠶者〔鄭玄注:蠶書、蠶爲龍精、月值大火、則浴其種〕」
- (五)「夫人副禕而躬桑、乃獻繭稱絲」 『禮記』祭儀「世婦卒蠶、奉繭以示于君、遂獻繭夫人、……遂副禕而受之」。
- (六)「禮記月令……」 『禮記』月令「季春之月、……后妃齋戒、親東鄉躬桑。禁婦女毋觀、省婦使以勸蠶事、蠶事既登、分繭稱絲効功、以共郊廟之服、無有敢惰」。
- (七)「周禮天官内宰……」 「中春詔后、帥内外命婦、始蠶于北郊(鄭注、蠶于北郊、婦人以純陰爲尊)、以爲祭服」。
- (八)「蠶叢帝」 『太平御覽』卷一六六州郡部・益州「揚雄蜀王本紀曰、蜀之先稱王者、有蠶叢」。
- (九)「至後周壇祭先蠶、以黄帝元妃西陵氏爲始」 『隋書』卷七 禮儀志「周禮王后蠶於北郊、……後周制、皇后乘翠輅、……以一太牢親祭、進奠先蠶西陵氏神。……」。
- (十)「漢祭宛〔苑〕窳婦人、寓氏公主」 『後漢書』禮儀志・上「祀先蠶」注所引『漢舊儀』「春桑生而皇后(親)桑於苑中。蠶室養蠶千薄以上。祀以中牢羊豕、(祭)蠶神苑窳婦人、寓氏公主、凡二神。」
- (十一)「馬頭娘」 『太平廣記』卷四七九所引『原化傳拾遺』「蠶女」「蠶女者、當高辛帝時、蜀地未立君長、無所統攝。……每歲祈蠶者、四方雲集、皆獲靈應。宮觀諸化、塑女子之像、披馬皮、謂之馬頭娘、以祈蠶桑焉。」

(十二)「嘗撰蠶者祭文二篇」『王禎』農器図譜集之十六、蠶繅門「先蠶壇」の「贊曰、有星天駟、……」および同「蠶室」の「銘曰、世業農桑、……」を指すか。

(十三)『王禎』農桑通訣集之一「蚕事起本」末尾には「其文見農器譜」の六字がある。

【訓読】

蠶事起本 黄帝、少昊〔典〕の子、姓は公孫、名は軒轅なり。生れながらにして神靈、弱にして能く言ひ、幼にして徇(あまね)く齊(そ)ひ、長じて聡明なり。神農氏衰へ、諸侯相ひ侵伐す。神農氏能く征するあたわず。是こに於いて軒轅乃ち干戈に習用し、以て享らざるを征す。諸侯皆に來たりて賓從するも、而れども蚩尤最も暴爲り。乃ち師を徴して蚩尤を殺す。衣裳を垂れて天下治まる。易の係〔繫〕に曰く、神農氏没し、黄帝・堯・舜氏作(おこ)る。其の變に通じ、民をして倦まざらしむ。衣裳を垂れて天下治まるとは、蓋し諸を乾・坤に取るなり、と。按ずるに黄帝の元妃西陵氏、始めて蚕事を勤〔勸〕む。月は大火にして種を浴す。夫人は副幃して躬ら桑つみ、乃ち繭を獻じて絲を稱(は)かる。織紵の功は之に因りて廣まり、織りて以て郊廟の服を供し、所謂黄帝の衣裳を垂れて天下治まるとは、蓋し此れに由るなり。然して黄帝始めて宮室を置き、乃ち蚕を育つるを得。是れ起本爲り。

西陵氏は儻〔女＋纍〕祖と曰ひ、黄帝の元妃爲り。淮南王蚕經に云ふ、西陵氏蚕稼を勧め、親蚕は此こに始まる、と。皇圖要覽に云ふ、伏羲は蚕に化し、西陵氏は蚕を養ふ、と。礼記月令に、季春、后妃齋戒す、とあり。先蚕を享り而して躬ら桑つみ、以て蚕事を勸む。周礼天官内宰に、中春、后に詔して内外の命婦を帥め、始めて蚕を北郊に祭る(原注:北郊に蚕すとは、純陰なるを以てなり)、とあり。上古蚕叢帝有るも、文の考ふ可き無し。蓋し古者蚕を祭るに主名無く、後周に至りて先蚕を壇もて祭り、黄帝元妃西陵氏を以て始めと爲す。是れ先蚕爲りて、歴代之に因る。嘗て天駟を謂ひて蚕精と爲す。元妃西陵氏始めて蚕するは、實に要典爲り。夫の漢に宛〔苑〕窳婦人、寓氏公主を祭るが若きは、蜀に蚕女馬頭娘有り、又た三姑を謂ひて蚕母と爲す者有り、此れ皆後世の溢典なり。然れば古今傳ふる所の、像を立てて祭るは、遺闕す可からず。故に併せて之に附す。夫れ蚕の効を人に有し、萬世永く頼れば、祀典に注して、以て報の本を示す。後の衣被の徳を蒙る者は、其れ本づく所を知らざる可けんや。嘗て蚕者祭文二篇を撰し、以て祈報の禮と爲す。

【現代語訳】

蠶事起本 黄帝は少昊〔典〕の子で、姓は公孫、名は軒轅である。生まれながらにして不思議な知恵を持っており、幼くして言葉話し、才知にあふれ、長じては聡明であった。神農氏が衰えると、諸侯がたがいに攻撃し合い、神農氏はこれを収められなかった。そこで軒轅は武器の使い方を習得し、まつろわない者を懲らしめた。諸侯はみな黄帝に服従した。しかし蚩尤はもともと暴虐であったので、軍を招集して蚩尤を殺した。黄帝は「衣裳を行きわたらせて天下が治まった」のである。『易経』繫辭にいう。「神農氏が没して、黄帝・堯・舜氏が起こった。彼らは物事に変化を与えて人々が倦怠感を持たないようにし、衣裳を行きわたらせて天下が治まった。これは『易経』の乾・坤の卦から思いついたのである」と。按ずるに、黄帝の皇后西陵氏が始めて蚕事を人々に勧めた。大火の月〔=二月〕に蚕の種紙を水に浸す。夫人は正装して自ら桑を摘み、はじめて繭を献上し、生糸の出来高を量った。機織の仕事はこれによって広まり、郊廟の祭に着る正装用の服を織って供した。いわゆる「黄帝は衣裳を行きわたらせて天下が治まった」とはこのことである。そうして黄帝は始めて宮室を設置し、蚕を育てることができた。これが蚕事の始まりである。

西陵氏は儻〔女＋纍〕祖といい、黄帝の皇后である。『淮南王蚕經』(1)に云う。「西陵氏は蚕事を勧め、自ら蚕を飼うのはここから始まる」と。『皇圖要覽』(2)に云う。「伏羲が蚕に化し、西陵氏は蚕を育てた」と。『禮記』月令には「季春に后妃は齋戒し、先蠶(民に養蚕を教えた神)を祀って自ら桑を摘み、蚕事を勧めた」という。『周禮』天官・内宰には「中春、后に詔し内外の命婦を帥い、始めて蚕を北郊に祭る(鄭注:蚕を北郊に祭るのは、〔婦人〕純粹の

陰〔を尊ぶ〕からである)』という。上古には蠶叢帝がいたというが、考証すべき史料がない。思うに古には蚕を祀ったが神の名はなかった。北周になって祭壇をつくって先蚕を祀り、黄帝の皇后である西陵氏を始祖とした。これが先蚕であり、歴代これによっている。かつては天駟〔=さそり座〕を蚕の精としており、皇后の西陵氏が始めて蚕事をおこなったが、これはまことに重要な典拠である。かの、漢が宛〔菴〕蕪婦人、寓氏公主を祀り、蜀には蠶女馬頭娘がおり、また三姑を蠶母と謂うものもあるといった話は、みな後世に付加された典拠である。しかし古今の所伝では像を立てて祭っており、忘れるべきではない。併せて記しておく。そもそも蚕は人に役立ち、とこしえに頼るものであるので、祭祀の書に解き明かし、祈報の本元が示されている。後世の衣服の恵みを受けている者はその根源を知っておくべきである。かつて私〔=王禎〕は「蠶者祭文」二篇を書き、祈報の礼とした。

【注】

(1)『淮南王蚕経』 『淮南子』の著者である前漢の劉安に仮託した書であろうが、散逸していて不詳。

(2)『皇圖要覽』 佚書で、著者などすべて不詳。

(3)蚕繅捷要

本条はすべて『王禎』農桑通訣集之六 蚕繅篇よりの引用である。【原文】の〔 〕内は『王禎』の文字を示す。

【原文の一】

淮南王蚕経云、黄帝元妃西陵氏始蚕。蓋黄帝制作衣裳、因此始也。其後禹平水土、禹貢所謂〔爲〕桑土既蚕、其利漸廣。礼〔記〕月令曰、古者天子諸侯、必有公桑蠶室。季春之月、具曲植籩筐、后妃齋戒、親東郷〔音向〕躬桑。禁婦女毋觀〔去聲〕、省婦使、以勸蚕事、蚕事既登、分繭稱絲効功、以共〔供〕郊廟之服、無有敢惰〔一〕。及攷〔考〕之歷代、皇后與諸侯夫人親蠶之事、昭然可見。況庶人之婦、可不務乎。

【出典および参考史料】『王禎』蚕繅篇以外の史料を掲げる。

(一)「礼月令曰……」 『禮記』祭義「古者、天子諸侯、必有公桑蠶室」。同、月令「是月也、命野虞毋伐桑柘。

鳴鳩拂其羽、戴勝降於桑。具曲植籩筐。后妃齋戒、親東郷躬桑。禁婦女毋觀、省婦使、以勸蠶事。蠶事既登、分繭稱絲効功、以共郊廟之服、無有敢惰」。

【訓読】

淮南王蚕経に云く、黄帝の元妃西陵氏始めて蚕す、と。蓋し黄帝衣裳を制作するは此れ因り始むるなり。其の後、禹、水土を平らげ、禹貢の所謂「桑土既に蚕す」にして、其の利漸く廣まる。礼記月令に曰く、古者天子・諸侯、必ず公桑・蚕室有り。季春の月、曲植・籩・筐を具へ、后妃齋戒し、親ら東郷に躬桑す。婦女に禁じて觀する毋く、婦使を省き、以て蚕事を勸む。蚕事既に登〔なり〕りて、繭を分ちら絲を稱りて功を効〔あきらか〕にし、以て郊廟の服を供すれば、敢えて惰するもの有ること無し。之を歷代に攷ふるに及んで、皇后と諸侯夫人の親蚕の事、昭然として見る可し。況や庶人の婦、務めざる可けんや。

【現代語訳】(これ以下の現代語訳は繆『王氏訳注』を参考にしている。)

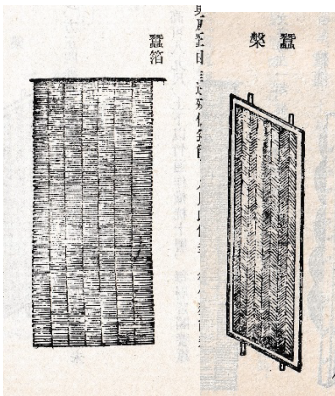
『淮南王蚕経』に云う、「黄帝の皇后西陵氏は始めて蚕事をおこなった」と。思うに、黄帝が衣裳を制定したのはここから始まる。その後、禹は山河を治め整えたが、これは『書経』禹貢にいわゆる「桑を栽培する土地では既に養蚕している」ということであり、その利益は次第に広がった。『礼記』月令に曰う、「古え、天子・諸侯は必ず公桑・蚕室を持っていた。季春の月、養蚕の道具である曲植(1)・籩(2)を揃え、后妃は齋戒して、自ら東郷にて桑の葉を摘んだ。世婦〔=女官〕と諸侯の夫人(3)に着飾ることを禁じ、彼女らの仕事(4)を減らして蚕事をおこなうよう勧めた。蚕事が既に成ったところで、繭を分ちら生糸を計って成果を評価し、郊廟の服を作るのに提供させた。怠ける者はいなかった」と。このように歴代のあり方考えてくると、皇后と諸侯夫人の親蠶の儀礼をはっきりと諒解することが

できる。況や庶民の婦女は蚕事に努めずにおられようか。

【注】

- (1)「曲植」『王禎』農器圖譜集之十六「蠶箔」に「禮、具曲植。曲卽箔也」とあり(下図左)、同「蠶槌」に「禮、季春之月、具曲植。植卽槌也」とある。
- (2)「筐」『王禎』農器圖譜集之十六「蠶槃」に「盛蠶器也。秦觀蠶書云、……竹長七尺、廣五尺、以爲筐。……凡槌十懸、以居食蠶。今呼筐爲槃」とある(下図右)。
- (3)『礼記』鄭氏注「婦謂世婦及諸臣之妻也」。
- (4)「毋觀」「婦使」『礼記』当該条の鄭注にそれぞれ「去容飾」「縫線組紉之事」とある。

下図 左:蠶箔 右:蠶槃(筐)



【原文の二】

夫育蚕之法、始於擇種、收種。繭種、取簇之中、向陽明淨厚實者。蛾出、第一日者、名苗蛾、末後出者、名末蛾。皆不可用。次日以後出者取之、鋪連於槌〔槌〕箔(原注:蚕連(一)、蚕槌〔槌〕(二)、見農器譜)、雄雌相配。至暮、拋去雄蛾、將母蛾於連上勻布。所生子、環堆者皆不用。生子數足、更就連上令覆養三五日(三)。掛時、須蚕子向外、恐有風磨損其子(四)。

【出典および参考史料】

(一)「蚕連」 『王禎』農器圖譜集之十六「蠶連」

蠶種紙也。舊用連二大紙、蛾生卵後、又用線長綴、通作一連。故因曰連。

(二)「蚕槌」 『王禎』農器圖譜集之十六「蠶槌」所引『務本直言』

夫槌、立木四莖、各過梁柱之高、隨屋每間豎之。……

(三)「繭種～三五日」 『輯要』卷四、養蚕・收種所引『士農必用』

繭種、取簇中腰東南、明淨厚實繭。蛾、第一日出者、名苗蛾、不可用。次日以後出者可用。每一日所出爲一等輩。末後出者、名末蛾、亦不可用。鋪連於槌箔上、雄雌相配。當日可提掇連三五次、至末時後、款摘去雄蛾、將母蛾於連上勻布。所生子、如環成堆者、其蛾與子皆不用。其餘者生子數足、更當就連上、令覆養三五日。然後將母蛾亦置在雄蛾、苗蛾、末蛾處、十八日後埋之。

(四)「掛時、～磨損其子」 『輯要』卷四養蚕、浴連所引『士農必用』「浴畢掛時、須蠶子向外、恐有風相磨損其子」。

【訓読】

夫れ育蚕の法は擇種、收種より始む。繭種は簇の中の、陽に向かい明淨にして厚實なる者を取る。蛾出でて第一日の者は苗蛾と名づけ、末後に出づる者は末蛾と名づく。皆用う可からず。次日以後に出づる者は之を取り、

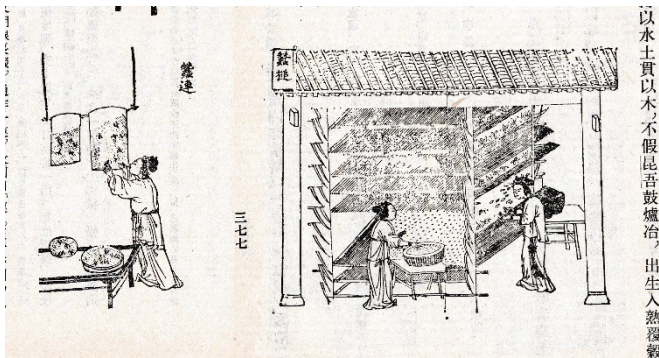
連を槌箔に鋪き(原注:蚕連、蚕槌は農器譜に見ゆ)、雄と雌を相ひ配す。暮に至れば雄蛾を抛去し、母蛾を將て連上に勻しく布く。生む所の子、環堆する者は皆用ゐず。生子の數足るも、更に連上に就き覆養せしむること三、五日なり。掛くる時、蚕子を須(もち)ゐて外に向かしむるは、風有りて磨して其の子を損なふを恐るればなり。

【現代語訳】

養蚕の方法は繭を選んで卵を取ることから始まる。卵をとる繭は、簇の中で陽(=東南)に向いていて、明るくきれいで繭が厚く充実しているものを選び取る。[繭から]蛾が出て第一日目のは苗蛾とよび、最後に出てくるものは末蛾とよぶ。ともに用いてはいけない。二日目以後に出てくるものを用いる。蚕連を槌箔に敷いて(原注:蠶連、蠶槌は農器図譜を見よ(1))、蛾を置き、雌・雄をあわせる。暮になったら雄の蛾を取り去り、母蛾を連の上に均一に並べる。生みつけられた卵が連の周りを巡って生みつけられているものや(2)、積み重なっているものはみな用いない。卵が十分な数になっても、さらに母蛾を三～五日間連の上で覆っておく。蚕連を[横棒に]掛けて[乾かす]とき、卵が生みつけられている面を外向きにするが、卵が擦れて傷つくのを恐れるからである。

【注】

(1) 左:蠶連 右:蠶槌



(2)「環堆者」 繆『王氏訳注』一二一頁【注釈】(4)は「这是病弱蚕蛾下的卵。……病弱的蚕蛾往往散乱不勻、以之成堆」とし、「环绕成堆的不用」と解釈する。

【原文の三】

冬節及臘八日、浴時無令水極凍、浸二日取出復掛。年節後、瓮内豎連、須使玲瓏、每十數日、日高時一出、每陰雨上〔後〕、節〔即〕便曬暴〔曝〕(一)。蚕子変色、要在遲速由己、勿致損傷自變。桑葉已生、自辰巳間、將瓮内取出、舒卷〔捲〕提掇、亦無度數。但要第一日變三分、第二日變七分、却用紙密糊封了、還瓮内收藏。至第三日午時、又出連舒卷、須要變至十分(二)。

【出典および参考史料】

(一)「冬節及臘八日……」 『輯要』卷四、養蚕「浴連」所引『士農必用』

冬節日及臘八日、浴時無令水極凍、浸二日取出。年節後、瓮内豎連、須使玲瓏、每十數日、日高時一出、每陰雨後、即便曬曝。

(二)「蚕子変色、……」 『輯要』卷四、養蚕「變色、生蟻、下蟻等法」所引『士農必用』

蠶子變色、惟在遲速由己、勿致損傷自變。桑葉已生、自辰巳間、於風日中、將甕中連取出、舒・卷・提・掇。舒時連背向日曬至温、不可熱。舒捲無度數。但要第一日、十分中變灰色者、變至三分、收了。次二日、變至七分、收了。此二日收了後、必須用紙密糊封了、如法還甕内收藏。至第三日、於午時後、出連舒・卷・提・掇、須要變至十分。

【訓読】

冬節及び臘八日に浴す時は、水をして極く凍(こご)えしむること無く、浸すこと二日にして取り出し復た掛く。年節の後、瓮内に連を豎て、須く玲瓏なら使め、十數日毎に、日高き時に一たび出だし、陰雨の後毎に即便(ただ)ちに曬曝す。蚕子の変色は、要(かなら)ず遅速の己に由るに在らしめ、自変を損傷するを致す勿かれ。桑の葉已に生ずれば、辰自り巳の間、瓮内を將て取り出だし、舒、捲、提、掇するに、亦た度數無し。但だ要ず第一日は三分を変じ、第二日は七分を変じ、却て紙を用って密に糊もて封し了はり、瓮内に還して收藏すべし。第三日の午の時に至れば、又た連を出だして舒、卷し、須く變じて十分に至るを要す。

【現代語訳】

冬至の日および十二月八日に蚕の卵を水浴させる時は水を冷やし過ぎてはいけない。二日間水浴させたら取り出し、前のように掛けておく。春節後、瓮のなかに連を立てて入れ、玲瓏(=清潔)(1)に保つべきである。十数日ごとに一度、日が高い時に取り出し、雨に逢うたびに手早く日に干す。卵の色が変化してきたら孵化の速さはそれぞれに任せ、自然な変化を妨げてはいけない。桑の葉が生長してきたら、辰の刻から巳の刻の間に、瓮のなか〔の連〕を取り出し、広げたり、巻いたり、また引っぱり出したり、しまったりを何度も繰り返す。ただ第一日目には三分の色が変り、第二日目には七分の色が変るようにし、変色し終わったら種紙は糊で密封して瓮内に収めるべきである。第三日目の午の刻になったら、さらに連を出して広げたり巻いたりする。こうして十分に色が変わるようになければならない。

【注】

(1)「玲瓏」 一般には「精巧である」「艶やかで美しい」といった意味であるが、この文意には合わない。とりあえず、清潔にしておくという意味に解しておく。

【原文の四】

其蚕屋、火倉、蚕箔竝須預備。蚕生〔屋〕宜高廣、牕戸虚明、易辨眠起。仍上於行樺、各置照牕。每臨早暮、以助高明下就。附地列置風竇、令可啓閉、以除濕鬱(一)。若新泥濕壁、用熱火薰乾。牕上用淨白紙新糊、門牕各掛葦簾藁薦。

【出典および参考史料】

(一)「牕戸虚明、……」 『王禎』農器圖譜集之十六「蠶室」

……牕戸虚明、易辨眠起。仍上於行樺、各置照牕。每臨蠶暮、以助高明下就。附地列置風竇、令可啓閉、以除濕鬱。

【訓読】

其れ蚕屋、火倉、蚕箔は並びに須らく預め備ふべし。蚕屋は宜しく高く廣くし、牕戸は虚明にし、眠・起を辨じ易くす。仍て上は行・樺に於いて、各おの照牕を置く。早・暮に臨む毎に、以て高明の下就するを助く。地に附して風竇を列置し、啓閉す可から令め、以て濕鬱を除く。新泥の濕壁の若きは、熱火を用て薰乾す。牕上に淨白紙を用て新たに糊し、門・牕各おのに葦簾・藁薦を掛くべし。

【現代語訳】

蚕屋・火倉・蚕箔はみなあらかじめ準備しておくべきである。蚕屋は高く広くし、窓は明るくして、蚕の眠・起を見分けやすくする。檐口〔=軒先?〕の桁と下の横木の間には、それぞれ灯り取りの小窓を開く(1)。早朝や夕暮れになると、中の明かりを補助する(2)。地面の近くには通気用の穴をあけ、開閉ができるようにし、湿気を除く。新しい泥を塗って湿った壁があれば、火を焚いて燻して乾かす。窓にはきれいな白紙を新しく糊で貼り、戸や窓には

それぞれ葦の簾(すだれ)や藁薦(わらむしろ)を掛ける。

【注】

(1)「上於行棒」 未詳。繆『王氏訳注』一二三頁の解釈に従う。

(2)「助高明下就」 文字通りの意味は「高所の明かりが下に及ぶのを助ける」であろうが、意識する。

【原文の五】

下蟻之時、勿用雞翎等物掃拂。惟在詳款稀勻、使不至驚傷稠疊。生齊、取葉著懷中令煖、用利刀切極細、篋於器內蓐紙之上勻薄。將連合於葉上、蟻聞葉香自下。或過時不下連[連]、及縁上連背者、並棄(一)。

【出典および参考史料】

(一)全文 『輯要』卷四、養蚕「變色、生蟻、下蟻等法」下蟻所引『士農必用』

下蟻之時、勿用雞翎等物掃拂。惟在詳款稀勻、不至驚傷稠疊。蟻生既齊、取新葉用快利刀切極細、用篩子篩於中箔蓐紙上、務要勻薄。將連合於葉上、蟻自縁葉上。或多時不下連、及縁上連背、翻過、又不下者、並連棄了。此殘病蟻也。

【訓読】

蟻を下すの時、雞翎等の物を用て掃拂する勿れ。惟だ詳款して稀勻するに在りて、驚き傷つき稠く疊するに至らざら使む。生じ齊(そろ)わば、葉を取りて懷中に著して煖なら令め、利刀を用て極細に切り、器内の蓐紙の上に篋(ふる)ひ勻薄ならしむ。連を將て葉上に合すれば、蟻は葉の香を聞きて自ら下る。或ひは時を過ぎて連に下らず、及び連背に縁上する者は並びに棄つべし。

【現代語訳】

蟻蚕を連(=種紙)から下すときは鶏の羽などで掃いてはいけない。ただ注意深くたたき(1)、平均に散らばるようにし、驚かせて傷つけたり、密に重ならないようにする。蟻蚕が出揃ったら、桑の葉を懷中に入れて暖め、鋭い包丁できわめて細かく切り、器内の敷き紙の上に篩い入れ、薄く均一にする。[蚕を載せた]連を葉の上に合わせると、蟻蚕は葉の香りを嗅いで自ら下る。時間が経っても連に下らないものと、連の背に這い上がったものがあればすべて連ごと廃棄する。

【注】

(1)「詳款」 「詳」には「細やかに心を配る」という意味があり、また「款款」は「慢慢的」の意味だという(田宗堯『中国古典小説用語辞典』)。繆『王氏訳注』一二三頁の解釈はこの方向で「全在小心轻缓」と解したようである。ただ「款」には「たたく」という意味もある。そちらにとれば「細やかにたたく」という意味になる。ここではこの方向で解釈する。

【原文の六】

養蚕蟻時、先辟東間一間(一)、四角挫壘空龕、狀如三晷[星](二)、以均火俟[候]。謂屋小則易收火氣也。停眠前後則撤去、擇日安槌、每槌上下閑[間]鋪三箔、上承塵埃、下隔濕潤、鋪砌碎稈草於上。中箔以備分擡(三)。用細切搗軟稈草、勻鋪爲蓐、又揉淨紙、粘[黏]成一片、鋪蓐上安蚕(四)。

【出典および参考史料】

(一)「先辟東間一間」 『王禎』農器圖譜集之十六「蠶室」

考之諸蠶書云、蠶室先辟東間養蟻。

(二)「四角挫壘空龕……」 『輯要』卷四、養蚕・火倉(『王禎』農器圖譜集之十六「火倉」はこれに拠る)

生蠶、有小屋者、四壁挫壘空龕、頗類參星樣。一高一下、頓藏熟火、庶得火氣勻停。

(三)「每槌上下閑鋪三箔……」『王禎』農器圖譜集之十六・蠶槌所引『農桑直説』

每槌上中間鋪三箔、上承塵埃、下隔濕潤、中備分擡。

(四)「勻鋪爲蓐……」『輯要』卷四、養蚕「脩治變室等法」安槌所引『土農必用』

上下二箔上、皆鋪切碎稈草。中一箔用細切搗軟稈草爲蓐、鋪案平勻、……揉淨紙、粘成一段、可所鋪蓐大、鋪於中箔蓐上。

【訓読】

蚕蟻を養ふ時は、先ず東間の一間を辟き、四角に空龕を挫壘し、状は三星の如くし、以て火候を均しくす。謂ふところは、屋の小なれば則ち火氣を収め易ければなり。停眠の前後は則ち撤去し、日を擇びて槌に安んじ、槌毎に上下の間に三箔を鋪き、上は塵埃を承け、下は濕潤を隔て、砌碎せる稈草を上を鋪く。中箔は以て分・擡に備ふ。細切し搗軟せる稈草を用ひ、勻しく鋪きて蓐と爲し、又た揉みし淨紙を粘(はり)りて一片と成し、蓐の上に鋪きて蚕を安んず。

【現代語訳】

蠶蚕を養う時はまず東の部屋に一間を設け、四方の壁(1)には空の龕を積み重ね、〔二十八宿の〕参星のように並べ(2)、室内の温度が均等になるようにする。それは部屋が小さいので火による温度上昇を調節しやすいという意味である。二眠前後にはそれを撤去し、吉日を選んで蚕槌を安置する。蚕槌の上・中・下の間に三枚の箔を敷く。上の箔は塵埃を防ぐもので、下の箔は湿気から隔てるものである。その上には細かく切った藁を敷く。中の箔は〔蚕が成長した後の〕分箔に備える。細かく切って軟かく搗いた藁を均一に敷いて蓐(しとね)とし、さらに揉んだきれいな紙を一枚に貼りあわせ、蓐の上に敷いて蚕を落ち着かせる。

【注】

(1)「四角」 【出典】(二)の『輯要』にしたがって「四壁」とする。

(2)「挫壘空龕、状如三暑〔星〕」 繆『王氏訳注』一一一頁の注(9)に解釈がある。四角形の中央に三つ星が並んでいる星座、つまりオリオン座のように四方の壁に空龕を積み重ねるといふ。室温調整のためである。

【原文の七】

初生、色黒。漸漸加食、三日後漸變白、則向食、宜少加厚。變青則正食、宜益加厚。復變白則慢食、宜少減。變黃則短食、宜愈減。純黃則停食、謂之正眠。眠起自黃而白、自白而青、自青復白、自白而黃、又一眠也。每眠〔例〕如此(一)、候之、以加減食。

【出典および参考史料】

(一) 以上の全文 『輯要』卷四、養蚕「涼暖・飼養・分擡等法」飼養總論所引『土農必用』原注

蠶生、色黒、三日後漸變白、則向食、宜少加厚。變青則正食、宜益加厚、雖飽亦不傷。復變白則慢食、宜少減。變黃則短食、謂之向眠、宜愈減。純黃則住食、謂之正眠。眠起自黃而白、自白而青、自青復白、自白而黃、又一眠也。凡眠起變色、例如此。

【訓読】

初生は色黒し。漸漸に食を加へ、三日後、漸く白に變ずれば則ち向食なりて、宜しく少や厚きを加ふべし。青に變ずれば則ち正食なりて、宜しく益ます厚を加ふべし。復た白に變ずれば則ち慢食なりて、宜しく少や減ずべし。黄に變ずれば則ち短食なりて、宜しく愈いよ減ずべし。純黄なれば則ち停食なりて、之を正眠と謂ふ。眠より起きれば黄自り白く、白自り青く、青自り復た白く、白自り黄なれば、又た一眠なり。眠毎に例として此くの如く、之を候(うかが)ひ、以て食を加減す。

【現代語訳】

蟻蚕が孵化したばかりの時は色が黒い。次第に葉の量を増やしてゆくと、三日後にはだんだん蚕の色が白くなり、「向食」になるので、少し葉の量を増やすのがよい。色が青くなると「正食」であり、さらに葉を増やす。ふたたび白くなれば「慢食」なので、やや減らす。黄色になれば「短食」で、これを「向眠」といい、さらに減らす。純黄色になれば「停食」で、これを「正眠」という。眠から起きると、黄色から白、白から青、青からふたたび白になり、白から黄色になって、さらに一眠する。毎回の眠までの間に、このように〔体色が変わる〕ので、蚕の様子をうかがい、餌の量を加減する。

【原文の八】

凡葉不可以帶雨露及風日所乾或沍臭者食之、令生諸病(一)。常收三日後、以備霖雨、則蚕常不食濕葉、且不失飢。採葉歸、必疎爽於室中、待濕〔熱〕氣退、乃與食(二)。

【出典および参考史料】

(一)「凡葉不可以帶雨露……」 『輯要』卷四、養蚕「涼暖・飼養・分擡等法・飼養總論」所引『士農必用』

用葉(原注:蠶不可食之葉有三、一、承帶雨露、……二、爲風日所薦乾、……三、沍臭者、即生諸病。

(二)「常收三日後……」 『陳旉』卷下、用火採桑之法篇

常收三日葉、以備雨濕、則蠶常不食濕葉、且不失飢矣。外採葉歸、必疎爽于葉室中、以待其濕熱氣退、乃可與食。

【訓読】

凡そ葉は雨・露を帯び及び風日の乾かす所、或ひは沍臭ある者を以て之に食らはし、諸病を生ぜ令む可からず。常に三日後を収め、以て霖雨に備ふれば則ち蚕は常に濕葉を食らはず、且つ飢に失せず。葉を採りて歸らば、必ず室中に疎爽ならしめ、濕・熱の氣の退くを待ち、乃ち與へて食らはす。

【現代語訳】

およそ桑の葉は雨・露に湿った葉と、風に吹かれ陽に晒されて萎れた葉、あるいは湿気で腐って臭う葉を食べさせて、さまざまな病気に罹らせてはいけない。常に三日分の葉を蓄えて長雨に備えれば、いつでも蚕が湿った葉を食べることはないし、飢えることもない。桑の葉を摘んで帰ったら、必ず室内に散らばしておき、湿気と熱気が退くのを待って食べさせる。

【原文の九】

蚕時、晝夜之間、大概亦分四時。朝暮類春秋、正晝如夏、夜深如冬。寒暄不一、雖有熱〔熟〕火、各合斟酌多少、不宜一例。自初生至兩眠、正要温煖。蚕母須着〔著〕單衣、以爲體測。自覺身寒、則蚕必寒、便添熱〔熟〕火。自身覺〔二字作覺身〕熱、蚕亦必熱、約量去火。一眠之後、但天氣清明、巳午之間、〔時〕暫揭起窓〔牕〕間簾薦、以通風日。南風則捲北窓〔牕〕、北風則捲南牕、放入倒溜風氣、則不傷蚕。大眠起後、飼罷三頓、剪開牕紙透風日、必不頓驚生病。大眠之後、捲簾薦、去牕紙。天氣炎熱、門口置瓮、旋添新水、以生涼氣。如遇風雨夜涼、却當將簾薦放下(一)。

【出典および参考史料】

(一)以上の全文 『輯要』卷四、養蚕「涼暖・飼養・分擡等法」涼暖總論所引『務本新書』

春蠶時分、一晝夜之間、比類言之、大概亦分四時。朝暮天氣類春秋、正晝如夏、深夜如冬、既是寒暄不一、雖有熟火、各合斟酌多寡、不宜一體。自蟻初生、相次兩眠、蠶屋內正要温煖。蠶母須著單衣、以身體較、

若自身覺寒、其蠶必寒、便添熟火。若自身覺熱、其蠶亦熱、約量去火。一眠之後、但天氣清明、巳午未之間、時暫捲門上簾薦、以通風日、免致大眠起後、飼罷三頓投食、剪開牕紙時、陡見風日、乍則必驚、後多生病。……至大眠後、……宜捲起簾薦、剪開窗紙、門口置甕、旋添新水、以生涼氣。儻遇猛風暴雨、或夜氣太涼、却將簾薦時暫放下。

【訓読】

蚕時、晝夜の間は大概亦た四時に分かち。朝・暮は春・秋に類(に)、正晝は夏の如く、夜深きは冬の如し。寒・暄一ならず、熱火有りと雖も、各おの合に多少を斟量すべく、宜しく一例なるべからず。初生自り兩眠に至るまで、正に温暖なるを要す。蚕母は須く單衣を着、以て體もて測るを爲す。自ら身寒きを覺ゆるは、則ち蚕も必ず寒ければ、便ち熱火を添ふ。自ら身熱きを覺ゆるは、蚕も亦た必ず熱ければ、約量して火を去る。一眠の後、但だ天氣清明なる巳・午の間、時に暫く窓間の簾薦を掲起し、以て風日を通す。南風なれば則ち北窓を捲り、北風なれば則ち南窓を捲り、風氣を放入し倒溜すれば、則ち蚕を傷めず。大眠より起きて後、飼罷すること三頓、牕紙を剪り開きて風日を透さば、必ず頓驚して病を生ぜず。大眠の後、簾薦を捲り、牕紙を去る。天氣炎熱なれば、門口に甕を置き、旋(たちま)ち新水を添へ、以て涼氣を生ぜしむ。如し風雨に遇ひ夜涼しければ、却て當に簾薦を將て放下すべし。

【現代語訳】

春蚕(はるこ)(1)を育てる時、昼夜の間をおおよそ四時に区分する。朝と夕暮の天気は春・秋に似ており、真昼は夏のように、深夜は冬のようにである。寒暖が異なっており、火を焚いているとはいえ、それぞれの時を考慮して調節すべきで、同じように対応してはいけぬ。蟻蚕から二眠までは温暖であることが求められる。養蚕婦は単衣を着て、自分の体感で室温を測らねばならない。自分が寒いと感じれば、蚕もきっと寒いので火を増やす。自分が暑いと感じれば、蚕もきっと暑いので酌量して火を減らす。一眠の後、ただ天氣がよいときだけは、巳の刻から午の刻の間、暫時、窓の簾・薦(すだれ・むしろ)を捲って風と日光を通す。南風ならば北窓〔の簾薦〕を捲り、北風ならば南窓を捲って、空気を出し入れすれば蚕を傷つけない。大眠の後、三度桑の葉を与え終わったら(2)、窓紙を切り開き風と日光を通す。〔このように慣れさせておけば〕きっと、蚕に衝撃を与えて病気になることはない。大眠の後、簾・薦を捲って窓紙を取り去る。天氣が炎熱であれば、門口に甕を置き、すぐに新しい水を加え、涼氣を起こさせる。もし風雨に遭って夜が涼しくなれば、簾薦を下におろさねばならない。

【注】

- (1)「蚕時」 出典の『輯要』に従い「春蚕」と解釈する。
- (2)「飼罷三頓投食」 この「罷」には完了の意味があり、繆『王氏訳注』一二七頁は「飼过三顿之后」とする。しかし単純に「やめる、おわる」という意味にとることもできる。ちなみに「頓」は「食事や小言等の回数を表す」量詞である(『中日大辞典』)。

【原文の十】

其間自●〔小〕至老。蚕滋長則分之、沙燠厚則擡之、失分則稠疊、失擡則蒸濕。蚕柔輒之物、不禁揉觸。小而分擡、人知愛護、大而分擡、或懶倦而不知顧惜。久堆亂積、遠擲高拋、損傷生疾、多由於此。

【出典および参考史料】

全文 『輯要』卷四、養蚕「涼暖・飼養・分擡等法」分擡總論所引『士農必用』

分擡之便、……使不致蒸濕、損傷也(原注:蠶滋多、必須分之、沙燠厚、必須擡之、失分則不勝稠疊、失擡則不勝蒸濕。故宜頻。蠶者柔輒之物、不禁觸弄。小而分擡、猶能愛護、大而分擡、莫能顧惜也。未免久堆亂積、遠擲

高抛、生病損傷、實由於此。……)。

【訓読】

其の間小自り老に至る。蚕滋ます長ずれば則ち之を分け、沙燠厚ければ則ち之を擡す。分を失すれば則ち稠疊、擡を失すれば則ち蒸濕なり。蚕は柔輒の物なれば、揉觸を禁ぜず。小にして分・擡するは、人愛護を知り、大にして分・擡するは、或いは懶倦にして顧惜を知らず、久しく堆み亂れて積み、遠く擲し高抛すれば、損傷して疾を生ずるは、多くは此れに由る。

【現代語訳】

この間に蚕は小から老になる。さらに成長してゆけば箔を増やして分割し〔=分〕、蚕沙が溜まって蒸れるようになれば、箔を持ち上げて除去する〔=擡〕(1)。箔を分けなければ蚕が密になり、蚕沙を除去しなければ蒸れて湿気が増える。蚕は軟らかいのでつい揉んだり触れたりしてしまう。小さいうちに分、擡するのは、人が愛護を知っているからであり、大きくなってから分、擡するのは、怠けて蚕を大切にしないのであろう。長い間蚕が乱雑に重なり合うようにさせておき、遠くに投げたり、高い所から落としたりすれば、蚕は傷つき、病気になるのであり、多くはこうした扱い方が原因である。

【注】

(1)「分」「擡」 「分」は蚕の成長によって密度が増すため、箔を分ける作業である。また「擡」は「二人以上で持ち上げる」という意味であるが、養蚕の場合は二人で箔を持ち上げ、糞を掃除するという作業を指す。繆『王氏訳注』一二七頁は「分擡」を「分箔除沙」と解す。

【原文の十一】

蚕自大眠後、十五六頓即老。得絲多少、全在此數。北蚕多是三眠、南蚕俱是四眠。日見有老者、量分數減飼。候十蚕九老、方可入簇(一)。值雨則壞繭。南方例皆屋簇、北方例皆外簇。然南簇在屋、以其蚕少易辨、多則不任。北方蚕多露簇、率多損壓壅閼(原注:音遏)、南北簇法、俱未得中。今有善蚕者一説。南北之間、蚕少、疎開牖戸、屋簇之則可。蚕多、選於院内、構長春〔脊〕草厦、内制蚕簇、週以木架、平鋪蒿梢、布蚕於上、用蓆箔圍護、自無簇〔蠶〕病、實良策也(原注:蠶簇見農器譜)(二)。

【出典および参考史料】

(一)「蚕自大眠後……」 『輯要』卷四、養蚕「涼暖・飼養・分擡等法」大眠擡飼所引『韓氏直説』

蠶自大眠後、十五六頓即老、得絲多少、全在此數日。見有老者、依抽飼斷眠法飼之。候十蠶九老、方可就箔上撥蠶入簇。

(二)「南北簇法……」 『王禎』農器図譜集之十六「蠶簇」

然嘗論之、南北簇法、俱未得中。何哉。今聞善蠶者一法、約量育蠶多少、選於院内空地、……若蠶少屋多、疎開牖戸、就内簇之亦可。……南北之間、去短就長、制此良法、屋蠶多、構長春〔脊〕草厦、内制蠶簇、週以木架、平鋪蒿梢、布蠶於上、用蓆箔圍護、自無簇〔蠶〕病、實良策也。

【訓読】

蚕は大眠自り後、十五六頓なれば即ち老ゆ。絲を得るの多少は全て此の數に在り。北蚕は多くは是れ三眠、南蚕は俱に是れ四眠なり。日び老有る者を見、分數を量りて飼を減ず。十蚕九老を候ちて、方めて簇に入る可し。雨に値れば則ち繭を壞つ。南方は例として皆な屋簇、北方は例として皆な外簇なり。然して南簇は屋に在り、其の蚕少なきを以て辨じ易く、多ければ則ち任へず。北方の蚕多くは露簇にして、率ね多く損壓壅閼(原注:音遏)し、南北の簇法、俱に未だ中を得ず。今蚕を善くする者の一説有り。南北の間、蚕少なければ、牖戸を疎開し、屋

もて之を簇すれば則ち可なり。蚕多ければ、院内より選び、長春脊の草厦を構へ、内に蚕簇を制し、週らずに木架を以てし、蒿梢を平鋪し、蚕を上(なら)べ、蓆箔を用て圍護すれば、自ら蠶病無く、實に良策なり(原注:蠶簇は農器譜に見ゆ)。

【現代語訳】

蚕は大眠の後、十五、六回葉を与えると成熟する。どれだけの生糸が得られるかは、この数日にかかっている(1)。北方の蚕の多くは三眠であり、南方の蚕はともに四眠である。成熟した蚕を見つけたらその割合を考えて、与える葉の量を減らす。九割の蚕が成熟するのを待って、そこではじめて簇に移す。雨にあたると繭がだめになる。南方は一般にみな屋内に簇をおき、北方は一般にみな屋外に簇をおく。そうして南方の簇は屋内にあるので、蚕が少なければ処理しやすいが、多ければ処理できない。北方の蚕は多くは露天の簇なので、折り重なって傷つくことが多い(2)。南・北の簇の設置法はともに不十分である。いま養蚕が得意な者の話がある。南北を通じて、蚕が少なければ窓や戸をあけ放ち、屋内の簇にするのがよい。蚕が多ければ、住居の庭を選んで梁の長い粗末な建物を作る。中に蚕簇を作り、木の棚をめぐらし、そこに平らに藁や木の枝を敷き、その上に蚕をならべ、むしろで囲んで護る。こうすれば自ずと蚕の病気はなくなり、じつに良策である、と。

【注】

- (1)「全在此數。……日見有老者」 原文では「數」と「日」の間に二句入っているが、【出典】(一)の「數日」として解釈する。この二句は後から挿入されたものであろう。繆『王氏訳注』一二七頁【注釈】(2)でもこの主旨が説明されている。
- (2)「率多損壓壅闕」 「壅」「闕」ともに「塞ぐ、塞がる」の意。

【原文の十二】

又有夏蚕・秋蚕。夏蚕自蟻至老、俱宜涼。惟忌蠅蟲。秋蚕初宜涼、漸々宜煖(一)。亦因天時漸涼故也。簇與繰絲、法同春蚕。南方夏蚕、不中繰絲、惟堪線繅而已。周礼忌原蚕(二)。歲再登、非不利也。然王者法禁之、謂其殘桑也(三)。然則夏蚕最不宜多育。務本新書云、凡繭宜併手忙擇、涼处薄攤●[攤]、蛾自遲出、免使抽繰相逼(四)。恐有不及、則有瓮浥籠蒸之法(原注:瓮浥・籠蒸並見農器譜(五))。士農必用云、繰絲之訣、惟在細圓勻緊、使無偏[偏]慢節核、蠹[蠹]惡不勻也(六)。

【出典および参考史料】

- (一)「夏蚕自蟻至老……」『輯要』卷四、夏秋蠶法所引『士農必用』
夏蚕自蟻至老、俱宜涼。忌蠅蟲。……秋蠶初宜涼、漸漸宜暖。
- (二)「周礼忌原蚕」『周禮』夏官・馬質
禁原蠶者(鄭注:原再也。)
- (三)「歲再登……」『淮南子』泰族訓
原蠶一歲再收、非不利也、然而王法禁之者、爲其殘桑也。
- (四)「務本新書云……」『輯要』卷四、簇蠶・繰絲等法・擇繭所引『務本新書』
繭宜併手忙擇、涼处薄攤、蛾自遲出、免使抽繰相逼。
- (五)「瓮浥・籠蒸」『王禎』農器図譜集之十六「繭甕」所引『蚕書』(実は『陳勇』卷下、簇箔・藏繭之法篇)、同・繭籠所引『農桑直説』
- (六)「士農必用云、……」『輯要』卷四、簇蠶・繰絲等法・繰絲所引『士農必用』
繰絲之訣、惟在細圓勻緊、使無偏慢節核、蠹惡不勻也。

【訓読】

又た夏蚕・秋蚕有り。夏蚕は蟻自ら老に至るまで、俱に宜しく涼たるべし。惟だ蠅蟲を忌むのみ。秋蚕は初めは宜しく涼たるべく、漸漸に宜しく煖だるべし。亦た天時の漸く涼たるの故に因るなり。簇と繰絲は、法春蚕に同じ。南方の夏蚕、繰絲に中らず、惟だ線續に堪ふのみ。周礼原蚕を忌む。歳に再び登(みの)るは、利あらざるに非ざるなり。然れども王者法もて之を禁ずるは、其の桑を残するを謂ふなり。然れば則ち夏蚕最も宜しく多く育つべからず。務本新書に云く、凡そ繭は宜しく手を併せて忙(せわ)しく擇び、涼処に薄く攤(ひら)くべし。蛾自ら遅く出でて、抽繰の相ひ逼ら使むるを免るべし。及ばざること有るを恐るれば、則ち瓮焔・籠蒸の法有り(原注:瓮焔・籠蒸は並びに農器譜に見ゆ)。土農必用に云く、繰絲の訣は惟だ細・圓・勻・緊に在り、褊慢節核、麤惡勻ならざるを無から使むるなり。

【現代語訳】

さらに夏蚕・秋蚕がある。夏蚕は蟻蚕から成熟するまでは涼しいのがよい。ただ蠅だけは避けるようにする。秋蚕は、はじめは涼しい環境がよいが、次第に暖かいのがよくなる。天候がだんだん涼しくなるためである。簇の設置法と繭から生糸を繰る方法は春蚕と同じである。南方の夏蚕は生糸を繰るのに適せず、ただ真綿にできるだけである。『周礼』は年に二度養蚕をおこなうのを忌み嫌っている。「一歳に二度繭を収穫するのは利益がないのではない。しかし王が法によって禁止する理由は桑を痛めるからである」(『淮南子』)という。そうであるから、夏蚕はとりわけ多く育てないのがよい。

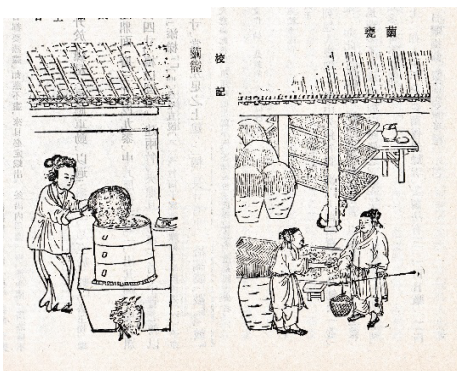
『務本新書』に云う。凡そ繭というものは人手を集めて急いで選り分け、涼しいところに薄く広げておくべきである。[そうすれば]蛾が出てくるのは自ずと遅くなり、糸繰りの時期が逼迫するのを免れられる。間に合わないことを恐れるのなら、瓮焔・籠蒸の法がある(原注:瓮焔・籠蒸はともに農器図譜に見える(1))。

『土農必用』に云う。生糸を繰る秘訣は、ただ細く(細)、円く(圓)、均一に(勻)、引き締まっている(緊)、の四点に尽きる。細すぎたり太すぎたりせず、継ぎ目や凸凹がないようにし、粗雑でざらつきがないようにする(2)。

【注】

- (1)『王禎』の記事は、繭を一時的に保存しておく方法である。「瓮焔」は繭を甕に塩漬けにする方法で、「籠蒸」は籠で蒸しておく方法である。ただし農器図譜集の十六では「瓮焔」「籠蒸」を「繭甕」「繭籠」と立項する(下図)。
- (2)「褊慢節核」 繆『王氏訳注』一二六頁【注釈】(9)の解釈に従う。つまり、「褊;偏細。慢;偏粗。節;接头。核;疙瘩(geda:球状・塊状にでこぼこしている)。」とする。

下図 左:繭籠 右:蠶甕



【原文の十三】

繰絲有熱釜冷盆之異。然皆必有繰車絲軒、然後可用。熱釜要大、置於釜上、接一盃〔盆〕甌。添水至甌中八分滿。甌中用一板攔〔欄〕断、可容二人對繰也。水須常熱、旋々下繭。多下則繰不及、鬻〔煮〕損。此可繰蠶絲單

繅者。双繅者亦可、但不如冷盆所繅潔淨光瑩也。冷盆要大、先泥其外、用時添水八九分。水宜溫暖長勻、無令乍寒乍熱(一)、可繅全繅細絲。中●〔等〕繅可繅雙繅、比熱釜者、有精神而又堅韌〔韌〕也。

【出典および参考史料】

(一)「熱釜要大……」 『輯要』卷四、簇蠶・繅絲等法「繅絲」所引『土農必用』

熱釜(原注:可繅蠶絲單繅者。双繅亦可。但不如冷盆所繅者、潔淨光瑩也)。釜要大、置於竈上、釜上大盆甑接口、添水至甑中八分滿。甑中用一板欄斷、可容二人對繅也。繅少者、止可用一小甑。水須熱、宜旋旋下繅(原注:多下則繅不及、煮損)。冷盆(原注:可繅全繅細絲。中等繅可雙繅。比熱釜者、有精神而又堅韌)。盆要大、先泥其外。用時添水八九分滿(原注:水宜溫暖常勻、無令乍寒乍熱)。

【訓読】

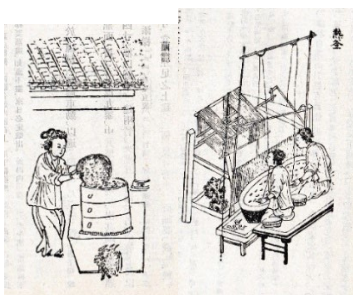
繅絲に熱釜・冷盆の異有り。然れども皆に必ず繅車・絲軒有りて、然る後用う可し。熱釜は大なるを要し、竈上に置きて一盆甑に接し、水を添すること甑中の八分に至りて滿つ。甑中に一板を用ゐて欄断し、二人の對繅するを容す可し。水は須く常に熱すべく、旋々と繅を下す。多く下せば則ち繅し及ばず、煮損すべし。此れ蠶絲單繅者を繅る可し。双繅者も亦可なり。但だ冷盆の繅る所の潔淨光瑩なるに如かざるなり。冷盆は大なるを要し、先ず其の外に泥ぬり、用う時水八九分を添す。水は宜しく溫暖にして常に勻し、乍ち寒に乍ち熱にならしむこと無ければ、全繅細絲を繅る可し。中等の繅は雙繅を繅る可く、熱釜なる者に比ぶれば、精神有りて又た堅韌なり。

【現代語訳】

生糸を繅するためには熱釜と冷盆の異なる器がある。しかしどれも必ず繅車・絲軒が必要で、熱釜・冷盆の後に使うことができる。熱釜は大きいのが必要で、竈の上に載せ、釜の口と大きい甑の口とを繋ぎ合わせる。水を加えて甑の八分目まで満たす(1)。甑の中は一枚の板で区切り、二人が向き合つて糸繅りができるようにすべきである。水は常に熱しておくべきで、次々に繅を入れる。多く入れると繅るのが間に合わず、煮えすぎて繅を損なう。これは太い糸の單繅(2)のものを繅ることができるし、双繅のものもできるが、冷盆で繅った糸の清らかで光沢があるのには及ばない。冷盆は大きいのが必要で、まずその外側に泥を塗っておき、使用する時に水を八、九分目まで加える。水は温暖でいつも一定なのがよく、急に冷たくなったり、熱くなったりしないようにする。すべての繅の細糸を繅ることができる。中等の繅は雙繅の生糸を繅ることができるが、熱釜で繅る糸に比べて、しっかりしていて強韌である。

【注】

- (1)「添水至甑中八分滿」これを直訳すると「甑の八分目まで水を満たす」となるが、この甑の構造がわからない。一般に甑は「蒸し器」の意味で、蒸気を通す穴が開いており、水を入れることはできない。『王禎』が掲げる下図左(原文十二に同じ)の「繅籠」はそのような蒸し器にみえる。一方、「熱釜」の図もあげられているが(下図右)、ここには竈や釜はみえない。原文は「盃〔盆〕甑」となっており、二人で扱っているのが、この図の方が合っているかもしれない。
- (2)「單繅」「双繅」 繆『王氏訳注』一二六頁【注釈】(12)によれば、繅の糸口をとる道具(鎖星という)に一廻りさせたものが「單繅」で、二廻りさせたものが「双繅」であるという。後者の生糸の方が前者よりもぴんと張っているという。



【原文の十四】

南北蠶繰之事、摘〔擇〕其精妙、筆之於書、以爲必效之法。業蚕者取其要訣、歳々必得。庶上以廣府庫之貨資、下以備生民之續帛。開利之源、莫此爲大。

【訓読】

南北蠶繰の事、其の精妙を擇び、之を書に筆(しる)し、以て必效の法と爲すべし。蚕を業とする者は其の要訣を取れば、歳々必ず得ん。庶(こ)ひねがはくは、上は以て府庫の貨資を廣げ、下は以て生民の續帛に備へんことを。開利の源、此より大と爲すは莫し。

【現代語訳】

南・北地域の糸繰りの作業は、その精巧で美しい〔生糸を取る〕方法を選んで、これを書に記し、必ず見習うべき方法とすべきである。養蚕を生業とする者がその秘訣を取り入れれば、毎年必ず良い成果を得られるであろう。願わくは、上は国庫の物資を豊かにし、下は生民の絹物〔の需要〕に備えんことを。利益を掘り出す源としてこれより大きなものはないのだ。

(4)附「耕犁篇」

【原文の一】

夫耕犁之事、上古聖人、以教耕耨。三代以上皆耦耕(原注:謂二人合二耒而耕之)。春秋之時、后稷之裔孫叔均始作牛耕(一)。至漢趙過、增其制度、三犁一牛(二)、則力省而功倍。今之耕者、易墾〔耒〕耜而為犁、不問地之堅強輕弱、莫不任使。欲淺欲深、求之犁箭、ヒ一而已。欲廉欲猛、猶求之犁稍、ヒ一而已。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』農桑通訣集之二 墾耕篇第四より抄出

若夫耕犁之事、又有本末。上古聖人制耒耜、以教耕耨、三代以上皆耦耕、謂兩人合二耒而耕之。……春秋之時、后稷之裔孫叔均始作牛耕、至漢趙過、增其制度、三犁一牛、則力省而功倍。今之耕者、……今易耒耜而為犁、不問地之堅強輕弱、莫不任使、欲淺欲深、求之犁箭、箭一而已。欲廉欲猛、取之犁稍、稍一而已。……

(一)「后稷之裔孫叔均始作牛耕」 『山海經』海内經「后稷是播百穀、稷之孫曰叔均、始作牛耕」。

(二)「漢趙過……三犁一牛」 『要術』卷一耕田所引崔寔『政論』。『王禎』農器図譜集之二「耬車」同文。

武帝以趙過爲搜粟都尉、教民耕殖、其法三犁共一牛。一人將之、下種、挽耬、皆取備焉。……(原注:按三犁共一牛、若今三脚耬矣。未知耕法如何。……)。

【訓読】

夫れ耕犁の事は、上古の聖人、以て耕耨を教ふ。三代以上は皆な耦耕す(原注:謂ふところは、二人二耒を合して之を耕す)。春秋の時、后稷の裔孫叔均、始めて牛耕を作す。漢の趙過に至りて、其の制度を増し、三犁一牛とすれば、則ち力省かれて功は倍す。今の耕者は、耒耜に易へて犁を為(もち)み、地の堅・強・輕・弱を問はず、使ふに任へざるは莫し。浅きを欲し深きを欲すれば、之を犁箭に求め、箭は一なるのみ。廉なるを欲し猛なるを欲すれば、猶ほ之を犁稍に求むるがごとく、稍は一なるのみ。

【現代語訳】

耕作法については、上古の聖人が耕起や除草法を教えた。夏・殷・周の三代以前はみな耦耕していた(原注:その意味は、二人が二本の耒(1)を合せて耕すのである)。春秋時代に后稷の末裔である叔均が始めて牛耕をおこなった。漢の趙過に至って、その型を改良し、三台の犁を一頭の牛が牽引する形式にしたので、労力が省けて成

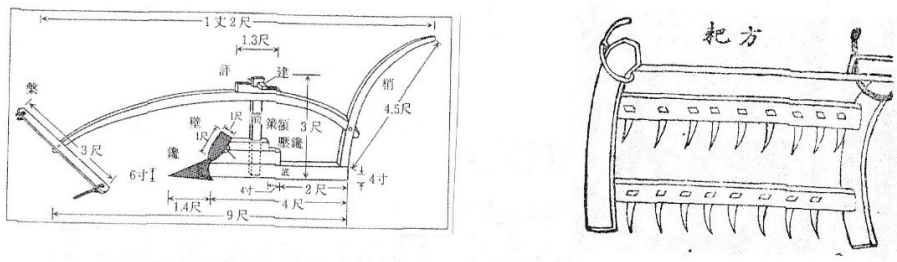
果は倍になった。今の農民は、耒・耜のかわりに犁を使い、農地の堅・強・輕・弱を問わず、使えない土地はなくなった。耕起の深・浅は犁箭によって調節でき、箭一つによるだけである。耕起の幅の狭・広は(2)、犁稍の操作に求められ、稍一つによるだけである(3)。

【注】

(1)原文は「耒」であるが出典に従って「耜」に改める。

(2)原文の「簾」は「鋭い、角が立っている」などの意味で、「猛」は「荒々しい」などの意味であるが、これでは文意が通じない。『要術』卷一耕田に「犁欲廉、勞欲再(原注:犁廉耕細、牛復不疲、……)」とあり、繆『校釋』の注【一六】は「狭仄」つまり「狭い」という意味だとする(繆『王氏訳注』も同じ)。西山・熊代『訳註』(31頁、【譯注】二九)は、「簾」について「犁を傾けて耕す幅を狭くし、耕を細密ならしめるのである」とする。これらの解釈に従う。

(3)「犁箭」「犁稍」 下図左の犁の構造図(大澤)参照。



【原文の二】

耕地之法、耒耕曰生、已耕曰熟、初耕曰塌、再耕曰轉。生者欲深而猛、熟者欲猛〔淺〕而廉、此其畧也。齊民要術云、凡耕高下田、不問春秋、必須燥湿得所為佳。若水旱不調、寧〔甯〕燥无湿、春〔秋〕耕欲深、夏耕欲浅、秋耕欲穰青為上(原注:比至冬月、青草復生、其美与豆同)、**耕田開墾之圖**初耕欲深、轉耕〔地〕欲浅(原注:耕不深則土〔地〕不熟、轉不浅則動生土)、管茅之地、宜縱牛羊踐之、七月耕之〔有則死二字〕。汜勝之曰、凡耕之本、在於趣時、春凍解、地氣始通、土一和解、夏至天氣始暑、秋〔陰〕氣始盛、土復解、夏至後九十日、晝夜分、天地氣和、此時耕、一而當五、名曰膏澤(一)。凡地除種麥〔之〕外、並宜秋耕、除種粟〔之〕地外、其餘黍豆等地、春耕亦可、大抵秋耕宜早、春耕宜遲(二)。所謂順天〔之〕時也。農書云、早田穫刈畢、隨即耕治、曬曝、加糞壅培、而種豆麥蔬茹、因〔以〕熟土壤而肥沃之、以省來歲功役。其所收又足以助歲計。晚田宜待春乃耕、為其稟〔藁〕**粘堅韌〔韌〕**、必待●●〔朽腐〕、●〔易〕為牛力地〔也〕(三)。(原注:北方農俗所傳、春宜早〔晚〕耕、●〔夏〕宜煎〔兼〕夜耕、秋宜日高耕、中原地皆平●●〔以上二字作曠旱田陸四字〕地、一犁必用兩牛三牛或四牛、以一人執之、量牛強弱耕地多少、其耕楷〔皆〕雨〔有〕定法也。)

【出典および参考史料】

全文 『王禎』農桑通訣集之二 墾耕篇第四より抄出

耕地之法、耒耕曰生、已耕曰熟、初耕曰塌、再耕曰轉。生者欲深而猛、熟者欲浅而廉、此其畧也。……齊民要術云、凡耕高下田、不問春秋、必須燥湿得所為佳。若水旱不調、甯燥无湿。秋耕欲深、夏耕欲浅、犁欲廉、勞欲再。秋耕穰青者為上(原注:比至冬月、青草復生者、其美與豆同也)、初耕欲深、轉地欲浅(原注:耕不深則地不熟、轉不浅則動生土)、管茅之地、宜縱牛羊踐之、七月耕之則死。汜勝之曰、凡耕之本、在於趣時、春凍解、地氣始通、土一和解、夏至天氣始暑、陰氣始盛、土復解、夏至後九十日、晝夜分、天地氣和、此時耕、一而當五、名曰膏澤、皆得時功(一)。韓氏直說云、凡地除種麥外、並宜秋耕、……除種粟地外、其餘黍豆等地、春耕亦可、大抵秋耕宜早、春耕宜遲(二)。此所謂順天之時也。……農書云、早田穫刈纔畢、隨即耕治、曬曝、加糞

壅培、而種豆麥蔬茹、因以熟土壤而肥沃之、以省來歲功役。其所收又足以助歲計。晚田宜待春乃耕、為其藁
結堅韌、必待其朽腐、易為牛力也(三)。北方農俗所傳、春宜早晚耕、夏宜兼夜耕、秋宜日高耕、中原地皆平曠、
旱田陸地、一犁必用兩牛三牛或四牛、以一人執之、量牛強弱、耕地多少、其耕皆有定法。

(一)「齊民要術云、……」 『要術』卷一耕田

凡耕高下田、不問春秋、必須燥濕得所為佳。若水旱不調、寧燥不濕。……凡秋耕欲深、春夏欲淺、犁欲廉、
勞欲再。秋耕欲穰青者為上、秋耕欲穰青為上(原注:比至冬月、青草復生者、其美與豆同也)、初耕欲深、轉地
欲淺(原注:耕不深、地不熟、轉不淺、動生土也)、管茅之地、宜縱牛羊踐之、七月耕之則死。……汜勝之曰、
凡耕之本、在於趣時、……春凍解、地氣始通、土一和解。夏至天氣始暑、陰氣始盛、土復解。夏至後九十日、
晝夜分、天地氣和。以此時耕田、一而當五、名曰膏澤、皆得時功。

(二)「凡地除種麥外、……」 『輯要』卷二耕墾所引『韓氏直說』

凡地除種麥外、並宜秋耕、……除種粟地外、其餘黍豆等地、春耕亦可。大抵秋耕宜早、春耕宜遲。

(三)「農書云、……」 『陳勇』卷上「耕耨之宜篇」

早田穫刈纔畢、隨即耕治、曝暴、加糞壅培、而種豆麥蔬茹。因以熟土壤、而肥沃之、以省來歲功役。且其收
足、又以助歲計。晚田宜待春乃耕、為其藁結柔韌。必待其朽腐、易為牛力也。

【訓読】

耕地の法は、未だ耕さざるを生と曰ひ、已に耕すを熟と曰ひ、初耕を場と曰ひ、再耕を轉と曰ふ。生なる者は深く
して猛なるを欲し、熟なる者は淺くして廉なるを欲す。此れ其の畧なり。齊民要術に云く、凡そ高下田を耕すに、
春秋を問はず、必ず漬く燥・湿所を得るを佳と爲すべし。若し水・旱調はざれば、寧ろ燥にして湿無かるべし。秋
耕は深きを欲し、夏耕は淺きを欲す。秋耕は穰青を上と為さんと欲す(原注:比ごろ冬月に至りて、青草復た生じ、
其の美は豆と同じ)。初耕は深きを欲し、轉地は淺きを欲す(原注:耕すこと深からざれば則ち地熟さず、轉淺からざ
れば則ち生土を動かす)。管茅の地は、宜しく牛羊を縦ちて之を踐ましむべし。七月之を耕さば則ち死す。汜勝之
曰く、凡そ耕の本は、時に趨くに在り、春、凍解すれば、地氣始めて通じ、土一(は)じめて和解す。夏至は天氣始
めて暑く、陰氣始めて盛んにして、土復た解す。夏至後九十日、晝夜分ち、天地の氣和す。此の時耕さば、一
にして五に当たり、名づけて膏澤と曰ふ。

凡そ地は種麥を除くの外、並びに宜しく秋耕すべし。種粟の地を除くの外、其餘の黍・豆等の地は、春耕す
るも亦可なり。大抵秋耕は宜しく早くすべく、春耕は宜しく遅くすべし。所謂天の時に順ふなり。

農書に云く、早田の穫刈畢はれば、隨即に耕治し、曝曝し、糞を加へて壅培し、而して豆麥蔬茹を種う。因りて
土壤を熟して之を肥沃にし、以て來歳の功役を省く。其の收むる所は又た以て歲計を助くるに足る。晚田は宜しく
春を待ちて乃ち耕し、其の藁結堅韌なるが為に、必ず朽腐を待てば、牛力を為(おさ)め易ければなり。(原注:北
方の農俗の傳ふる所、春は宜しく早・晩に耕し、夏は宜しく夜を兼ねて耕し、秋は宜しく日高くして耕すべし。中原の地
は皆な平曠なれば、旱田・陸地は、一犁に必ず兩牛三牛或四牛を用ゐ、一人を以て之を執らしむ。牛の強弱と耕地の
多少を量るべし。其の耕は皆な定法有るなり。)

【現代語訳】

農地を耕す法では、未だ耕していない農地を「生」といい、すでに耕した農地を「熟」といい、初めて耕す農地
を「場」といい、再び耕す農地を「転」という。「生」の地は深く幅広く(1)耕すのがよく、「熟」の地は浅く幅を狭く耕
すのがよい。これはその概略である。

『齊民要術』にいう。およそ高田・低田を耕すには、春・秋を問わず、乾・湿の具合が適当なのが必要である。も
し天候の晴・雨が順調でなければ、寧ろ乾燥していて湿気がない方がよい。秋耕には深く耕すのがよく、夏耕に

は浅く耕すのがよい。秋耕は青草を埋め込むのが上策である(原注:このごろ冬になって青草が再び生えてくるが、それを埋め込んだ場合の肥効は豆の場合と同じである)。初めて耕すときは深くするのがよく、再び耕すときは浅くするのがよい(原注:耕すのが深くないと農地はこなれず、転耕のときに浅くしないと生土(2)を動かしてしまう)。管(スゲ)・茅(カヤ)の茂る土地には、牛や羊を放って踏ませるべきである。七月にこの土地を耕すと管・茅は枯れる、と。

『汜勝之書』にいう。およそ耕起の基本は、時季を見極めることである。春に土が解(ほど)ければ、地気が通じ始め、土は最初に和らぎ解ける。夏至には天気が暑くなり始め、陰気が盛んになり始めて、土はさらに解ける。夏至の後、九十日経てば、昼・夜の長さが等しくなり、天地の気が和合する。この時に耕すと、作業効果が五倍になり、これを名づけて「膏澤」という、と。

『韓氏直説』にいう。およそ農地は麦を播く畑を除いて、みな秋耕するのがよい。アヲを播く畑を除いて、その他の黍・豆などの畑は春耕してもよい。たいてい秋耕は早めにすべきで、春耕は遅めにすべきである、と。これが所謂天の時に従うということである。

『(陳勇)農書』にいう。早稲の田の収穫が終われば直ちに耕起し、陽に当て、肥料を入れて土作りをし、豆・麦・野菜の種を播く。これに因って土壌をこなして肥沃にし、そうして来年の手間を省く。その収穫はさらに家計を助ける役に立つ。晩稲の田は春を待ってはじめて耕すのがよい。その藁が強靱なために、必ず腐敗するのを待つなら、牛の労働が楽になるのである、と。

(原注(3): 北方の農家の俗風が伝えられている。春は朝・晩に耕し、夏は夜なかに耕し、秋は日が高くなってから耕すのがよい。中原の地は皆な平らで広いので、旱田や畑では一台の犁に必ず二頭・三頭あるいは四頭の牛をつけ、一人の農夫に操縦させる。牛の強・弱と耕地の多・少を量っておく、と。その耕起法には皆な定法があるのである。)

【注】

(1)「猛」「簾」 前掲原文の一【注】(2)参照。

(2)「生土」 耕土層の下土。西山・熊代『譯註』は「そこつち」とルビを振る。

(3)これ以下の文章は割注になっているが『王禎』の原文である。

(5)附「耙勞篇」

【原文の一】

夫耙勞者、耙有渠疏之義、勞有盖磨之功。今呼耙曰渠疏、勞曰盖磨。所以散墾去芟、平土壤也(一)。桓寬塩鐵論曰、茂木之下无豊草、大塊之間无美苗(二)、耙勞之功不至、而望禾稼之秀茂實栗者**難**矣。韓氏曰、古農法、犁一**耨**六。今人只知犁深為功、而不知耨熟為全功。耨不到、土龕不實、下種後、雖見苗、立根在龕土、根土不相着、不耐旱。有[矛+系?][懸]死虫咬乾死諸病。耨功多[到]、則土細而[實]、立根在細實土中。又碾過、根土相着、自然耐旱、不生諸病。**耙田抄田之圖** 又曰、凡地除種麥外、並宜秋耕。先以鐵齒耨縱橫[有耨之二字]、然後挿犁細耕、隨耙隨勞。至地大白背時、更**耨**兩遍、至來年[春]地氣透時、得[待]日高、[復]耨四五遍、其地爽潤、上有油土四指許、春雖無雨、[時]至、便可下種(三)。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』農桑通訣集之二 耙勞篇第五

凡治田之法、犁耕既畢、則有耙勞。耙有渠疏之義(一)、勞有盖磨之功。今人呼耙曰渠疏、勞曰盖磨。皆因其用以名之。所以散墾去芟、平土壤也。桓寬塩鐵論曰、茂木之下無豊草、大塊之間無美苗(二)。耙勞之功不至、而望禾稼之秀茂實栗者、難矣。韓氏直説云、古農法、犁一耨六。今人只知犁深為功、不知耨熟為全功。耨功不到、土龕不實、下種後、雖見苗、立根在龕土、根土不相着、不耐旱。有懸死、蟲咬、乾死諸病。耨功到則土細

實、立根在細實土中。又碾過、根土相著、自然耐旱、不生諸病。又云、凡地除種麥外、並宜秋耕。先以鐵齒耨縱橫耨之、然後挿犁細耕、隨耕隨勞。至地大白背時、更耨兩遍、至來春地氣透時、待日高、復耨四五遍。其地爽潤、上有油土四指許、春雖無雨、時至、便可下種(三)。

(一)「耙有渠疏之義、……」 唐・陸龜蒙『耒耜經』「耕而後有爬、渠疎之義也、散墾去芟者焉」

(二)「茂木之下无豊草、大塊之間无美苗」 『塩鉄論』輕重「茂木之下無豊草、大塊之間無美苗」。

(三)「韓氏直説曰、……」 『輯要』卷一「耕墾」耕地

種蒔直説、古農法、犁一耨六。今人只知犁深為功、不知耨細為全功。耨功不到、土龕不實。下種後、雖見苗立、根在龕土、根土不相着、不耐旱。有懸死、蟲咬、乾死等諸病。耨功到、則土細又實、立根在細實土中。又碾過、根土相着、自耐旱、不生諸病。

韓氏直説、……凡地除種麥外、並宜秋耕。先以鐵齒[木+罷]縱橫[木+罷]之、然後挿犁細耕、隨耙隨撈、至地大白背時、更[木+罷]兩遍。至來春地氣透時、待日高復[木+罷]四五遍。其地爽潤、上有油土四指許、春雖無雨、時至、便可下種。

【訓読】

夫れ耙・勞なる者、耙は渠疏の義有り、勞は蓋磨の功有り。今耙を呼びて渠疏と曰ひ、勞を蓋・磨と曰ふ。墾を散じ去芟し、土壤を平らぐ所以なり。桓寛の塩鉄論に曰く、茂木の下豊草無く、大塊の間美苗無し、と。耙・勞の功至らず、而して禾稼の秀(ほ)茂り、實粟(かた)きを望む者は難し。韓氏曰く、古の農法は犁一耨六なり。今人只だ犁くこと深きの功を為すを知るも、而れども耨熟すことの全功を為すを知らず。耨到らざれば、土は龕にして實(み)ちらず、種を下せし後、苗を見ると雖も、立根は龕土に在り、根と土と相ひ着かざれば、早に耐へず。懸死、蟲咬、乾死の諸病有り。耨功多ければ、則ち土細にして立根は細實なる土中に在り。又た碾過すれば根と土と相ひ着き、自然と早に耐へ、諸病を生ぜず。又た曰く、凡そ地の麥を種うるを除くの外、並びに宜しく秋耕すべし。先ず鐵齒耨を以て縱横(に之を耨)し、然る後に犁を挿して細耕し、耙に随ひ勞に随ふ。地大ひに白背なる時に至れば、更に耨すること兩遍、來年の地氣透るの時に至らば、日高きを待ち、復た耨すること四、五遍、其の地爽潤にして、上に油土四指許有らば、春に雨無しと雖も、時至らば便ち種を下す可し。

【現代語訳】

耙・勞なるものについて、耙には渠疏つまり耙の意味があり、勞には蓋・磨の役割がある。今耙を渠疏と呼んでおり、勞を蓋・磨と呼んでいる(1)。土塊を砕き、[雑草や古い根株を]取り除き、土壤を均平にする道具である。前漢・桓寛の『塩鉄論』にいう。「茂った木の下に繁茂する雑草はなく、大きい土塊の間に良い苗はない」と。耙や勞の作業が行き届かないのに、穀物の穂が実り、その実入が多いことを望んでも[実現は]困難である。

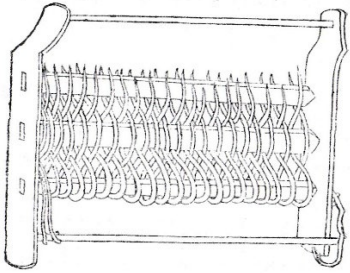
『種蒔直説』にいう。「古の農法は『犁一遍に耨六遍』という。今の人はただ深く犁き起こすことが効果的だと知っているだけで、よく耨をかけることで作業の効果が完結することを知らない。耨の作業が行き届かなければ、土壤は荒いままで落ち着かず、種を播いた後で苗が生えてくるけれども、その根は荒い土壤のなかにあり、根と土とが密着していないので日照りに耐えられない。懸死[=根が浮いて枯れる?]、虫害、乾死[=枯れ死]などの諸病になる。耨をかける回数が多ければ、土壤は細かくなり、根は細かく充実した土中に置かれる。さらに碾(ローラー)をかければ根と土とが密着し、自然と日照りに耐えられ、諸病に罹らない」と。

また『韓氏直説』にいう。「およそ麥を播く畑を除いて、みな秋耕すべきである。まず鉄齒耨を縱横にかけ、その後に犁をかけて細かく耕し、耙をかけるはしから勞をかける。畑地の表面が大いに白く乾燥する(2)時になれば、更に耨を二遍かけ、來春の地氣が通じる時になったら、日が高くなるのを待って、また耨を四、五遍かける。その畑地は空気を含んで潤い、表面に油土が指四本分ほどできる。そうなれば、春に雨がなかったといっても、播き時に

なったらすぐに種を播くことができる」と。

【注】

(1)「耙」「耨」 耙には杷・爬・渠疏などの呼称がある。レーキ・熊手・馬鍬の形の農具で、犁き起した土塊を砕く(前掲④原文の一注(3)参照)。渠疏については、拙著『唐宋変革期農業社会史研究』(汲古書院、1996年)第二章『耒耜経』の犁について、参照。『方言』巻五で、杷の宋・魏での呼称を「渠疏」としている。また、耨は耙で砕いた土塊をさらに細かくするための農具で、蓋・磨などの呼称もある(下図参照)。



耨

(2)「白背」 西山・熊代『訳註』の解釈に従う。繆『校釋』巻一・耕田注釈【一二】によれば、現在の魯東地方でも土壌の表面がやや乾燥し、白色になることを「白背」というとする。

【原文の二】

齊民要術云、耕地深細、不得弥〔趁〕多。看乾濕、隨時盖磨。待一段總轉了、横盖一遍。每耕一遍、盖兩遍。最後盖三遍、還縱横盖之。種麥地以五月耕三遍、種麻地耕五六遍、倍盖之。但依此法、除虫災外小旱〔旱?〕〔乾〕、不至全損〔損〕。縁盖磨數多故也(一)。又云、春耕〔β+穴+用〕〔随〕手勞、秋耕待白背勞(原注:盖春多風、不即勞、則致地虚燥。秋田濕、速勞則恐到〔致〕地硬)(二)。又曰、耕欲廉、勞欲再。凡巴〔已〕耕耙、欲受種之地、●〔非〕勞不可。諺云、耕而不勞、不如作暴。然耙勞之功、非但施于納種之前、亦有用於種苗之後。齊民要術〔曰〕、穀田既出壟、每一遇雨、白背時、盖以鐵齒鑷鍤、縱横耙而勞之(三)。此用於種苗之後也。南方水田轉畢則耙、ヒ畢即抄。故不用勞。其耕種陸地、犁而耙之、欲其土細。再犁再耙後用勞、乃無遺功也。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』農桑通訣集之二 耙勞篇第五

齊民要術云、耕地深細、不得趁多。看乾濕、隨時盖磨。待一段總轉了、横盖一遍。每耕一遍、盖兩遍、最後盖三遍。還縱横盖之。種麥地以五月耕三遍、種麻地耕五六遍、倍盖之。但依此法、除虫災外、小小旱乾、不至全損、縁盖磨數多故也(一)。又云、春耕随手勞、秋耕待白背勞(盖春多風、不即勞則致地虚燥。秋田濕、濕速勞則恐致地硬)。又曰、耕欲廉、勞欲再(二)。凡已耕耙、欲受種之地、非勞不可。諺曰、耕而不勞、不如作暴。……然耙勞之功、非但施於納種之前、亦有用於種苗之後者。齊民要術曰、苗既出壟、每一遇雨、白背時、輒以鐵齒鑷鍤、縱横耙而勞之(三)。……此用於種苗之後也。南方水田、轉畢則耙、耙畢則抄。故不用勞。其耕種陸地者、犁而耙之、欲其土細。再犁再耙後用勞、乃無遺功也。

(一)「耕地深細、……」 『要術』卷頭雜說

觀其地勢、……務遣深細、不得趁多。看乾濕、隨時盖磨。……待一段總轉了、即横盖一遍。……每耕一遍、盖兩遍、最後盖三遍。還縱横盖之。……凡種小麥地、以五月内耕一遍、看乾濕轉之、耕三遍爲度。……凡種麻地、須耕五六遍、倍盖之。……一切但依此法、除虫災外、小小乾、不至全損。何者、縁盖磨數多故也。

(二)「春耕随手勞、……」 『要術』卷一耕田

春耕随手勞、秋耕待白背勞(春既多風、若不尋勞、地必虚燥。秋田濕長切反實、濕勞令地硬。諺曰、耕而不勞、不如作暴。……)。……凡秋耕欲深、……耕欲廉、勞欲再。

(三)「苗既出壟、……」 『要術』卷一種穀

苗既出壟、每一經雨、白背時、輒以鐵齒鋤、縱橫杷而勞之。

【訓読】

齊民要術に云く、地を耕すは深く細かくし、多きを趣(お)ふを得ず。乾・湿を看、随時に蓋・磨す。一段總て轉し了はるを待ち、横蓋すること一遍。耕一遍毎に、蓋兩遍。最後に蓋三遍し、還(ま)た縦横に之を蓋す。麥を種うるの地は五月を以て耕すこと三遍、麻を種うるの地は耕すこと五、六遍、倍もて之を蓋す。但だ此の法に依らば、虫災を除くの外、小小の早乾あるも、全損に至らず。蓋磨の数多きが故に縁るなり、と。又た云く、春耕は手に随ひて勞し、秋耕は白背を待ちて勞す(原注:蓋し春は風多ければ、即(ただ)ちに勞せざるは、則ち地の虚燥なるを致す。秋田湿れば、速やかに勞するは則ち地の壞なるを致すを恐る)。又た曰く、耕は廉なるを欲し、勞は再なるを欲す。凡そ已に耕耙し、種を受けんと欲するの地は、勞に非ざれば不可なり。諺に云く、耕して勞せざれば、暴を作すに如かず、と。然れば耙勞の功は、但だ納種の前に施すのみに非ず、亦た種苗の後に用うる事有り。齊民要術に曰く、穀田既に壟より出で、一たび雨に遇ふ毎に、白背の時、蓋し鐵齒鋤を以て、縦横に耙して之を勞す。此れ種苗の後に用うるなり。南方の水田は轉し畢はれば則ち耙し、耙畢はれば即ち秒す。故に勞を用ゐず。其の陸地を耕種するは、犁きて之を耙し、其の土の細かなるを欲す。再び犁し再び耙して後に勞を用うれば、乃ち遺功無きなり。

【現代語訳】

『齊民要術』にいう。「畑地を耕すには、深く耕し、〔土を〕細かくするのが大事で、〔面積の〕多さを追い求めてはいけない。土の乾・湿の度合いをみて、随時、蓋・磨をかける。一段の畑地すべてを耕し終わるのを待ち、横向きに一遍蓋をかける。一遍耕すごとに、蓋を二遍かける。最後に蓋を三遍かけ、さらにまた縦・横に蓋をかける。麦を播く畑地は五月中に三遍耕し、麻を播く畑地は五、六遍耕し、その倍の回数の蓋をかける。ただこの方法に依るだけで、虫害を防ぐほか、少々の日照りに遇っても、すべて損なわれることにはならない。蓋・磨の回数が多いおかげである」と。

またいう。「春耕は手当たり次第に耨をかけ、秋耕は畑地の表面が白くなるのを待って耨をかける(原注:思うに、春は風が多いので、〔耕起のあと〕すぐに耨をかけないと畑地はカラカラに乾燥してしまう。秋の田は湿っているので、急いで耨をかけると畑地が硬くなってしまふ恐れがある)」と。

またいう。「犁耕は犁き幅が狭いのがよく、耨は繰り返すのがよい」と。およそ犁耕して耨をかけおわり、種子を受け入れようとする畑地には、耨をかけなければならない。諺にいう、「犁耕して耨をかけないのなら、放置しておく方がよい」と。そうであれば耙・耨の作業は、ただ種子を播く前におこなうだけではなく、また播種後〔の中耕〕にも有効である。

『齊民要術』にいう。「アワが畑地から芽を出し、雨に遇うたびに、表面が乾いたら、すぐに鉄齒鋤を使って、縦・横に耙をかけ、耨をかける」と。これは播種後〔の中耕〕に適用する方法である。

南方の水田は再度耕し終わったらすぐに耙をかけ、耙をかけ終わったらすぐに秒をかける。それ故に耨を用いないのである。畑地を耕作するには、犁き起こして耙をかけ、その土が細くなるのを求める。再び犁き起こし再び耙をかけた後に耨を使えば、そこではじめて作業をやり尽くしたことになるのである。

(6)【種植類】

①(総論)

【原文】

司馬遷貨殖傳曰、山居千章之楸、安邑千樹棗、[●][燕]秦千樹栗、蜀漢江陵千樹橘、齊・魯千樹桑。其人皆與千戸侯等(一)、其言種植之利博[博]矣。觀柳子厚郭橐駝傳稱、駝所種樹、成[或]移徙、無不活、且碩茂、早實以蕃。他人效之、莫能如也(二)。又知種樹之不可無法也。考之于詩、帝省其山、柞[棧][械]斯[拔]、松柏斯免[兌](三)。周之所以受命也。樹之榛栗、椅桐梓漆(四)、衛文公之所以[囚+木?][興]其國也。夫以王侯之富且貴、猶以種樹為功。況於民乎。周礼太宰以九職任萬民、一曰三農生九穀、二曰[園圃毓草木](五)、園圃之職、次於三農。其為民事之重尚矣[以上八字作事綦重矣四字]。然則種植之務、其可緩乎。[種植之類夥矣]、民生濟用、莫先於桑也。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』農桑通訣集之五 種植篇

司馬遷貨殖傳曰、山居千章之楸、安邑千樹棗、燕・秦千樹栗、蜀漢・江陵千樹橘、齊魯千樹桑。此其人皆與千戸侯等(一)。其言種植之利博矣。觀柳子厚郭橐駝傳、稱駝所種樹、或移徙、無不活、且碩茂、早實以蕃、他人效之、莫能如也(二)。又知種樹之不可無法也。考之于詩、帝省其山、柞械斯拔、松柏斯兌(三)、周之所以受命也。樹之榛栗、椅桐梓漆(四)。衛文公之所以興其國也。夫以王侯之富且貴、猶以種樹為功。況於民乎。周礼太宰以九職任萬民、一曰三農生九穀、二曰園圃毓草木。園圃之職、次於三農、事綦重矣(五)。然則種植之務、其可緩乎。種植之類夥矣、民生濟用、莫先於桑也。

(一)「司馬遷貨殖傳……」 『史記』貨殖列伝

……故曰「陸地牧馬二百蹄、牛蹄角千、千足羊。沢中千足彘。水居千石魚陂。山居千章之材。安邑千樹棗。燕秦千樹栗。蜀漢、江陵千樹橘。淮北常山已南、河濟之間千樹萩。陳夏千畝漆。齊魯千畝桑麻。渭川千畝竹。及名国万家之城、帶郭千畝畝鐘之田、若千畝卮茜、千畦薑韭。此其人皆与千戸侯等。

(二)「觀柳子厚郭橐駝傳、……」 『柳河東集』卷十七、種樹郭橐駝傳

郭橐駝不知始何名、……駝所種樹、或移徙無不活、且碩茂、蚤實以蕃。他植者雖窺伺倣慕、莫能如也。

(三)「帝省其山、柞械斯拔、松柏斯兌」 『詩經』大雅・皇矣 白川静 『詩經雅頌』(平凡社、東洋文庫)によれば、周の先祖の王業を述べる説話詩という。柞・械は「つげ・くぬぎ」の類とする。

(四)「樹之榛栗、椅桐梓漆」 『詩經』国風、鄘風・定之方中 吉川幸次郎『詩經国風』(岩波書店、中国詩人選集)によれば、衛の国の復興を喜ぶ歌。榛(はしばみ)、栗、椅(いぎり)、桐、梓、漆を植えて琴瑟を作るといふ。

(五)「周礼太宰……」 『周礼』太宰

以九職任萬民、一曰三農生九穀、二曰園圃毓草木……(疏)三農謂農民於原隰及平地三處營種、

【訓読】

司馬遷の貨殖傳に曰く、山居千章の楸、安邑千樹の棗、燕・秦千樹の栗、蜀漢・江陵千樹の橘、齊・魯千樹の桑、其の人皆な千戸侯と等し、と。其の種植の利の博きを言う。柳子厚の郭橐駝傳を觀るに稱すらく、駝の種うる所の樹、或ひは移徙するも、活き、且つ碩茂し、早に實りて以て蕃(しげ)らざるは無し。他人之れを效(なら)ふも、能く如(およ)ぶこと莫きなり、と。又た種樹の法無かる可からざるを知るなり。之れを詩に考ふるに、帝其の山を省(み)、柞(さく)械(よく)斯(こ)に拔(たり)、松柏斯に兌(だつ)たり、と。周の命を受くる所以なり。樹うるは榛と栗と、椅と桐と梓と漆、と。衛文公の其の國を興す所以なり。夫れ以(おも)ふに王侯の富み且つ貴きに、猶ほ種樹を以て功を為すがごとし。況や民に於いてをや。周礼に太宰は九職を以て萬民に任じ、一に三農と曰ひて九穀を生ぜしめ、二に園圃と曰ひて草木を毓(そだ)てしむ。園圃の職は三農に次ぐ。其れ民事の重く尚(たつ)きが為なり。然れば則ち種植

の務めは、其れ緩む可けんや。

種植の類夥しく、民生の用を濟(たす)くるに、桑より先んずるは莫きなり。

【現代語訳】

商品作物類を栽培する

司馬遷の『史記』貨殖列伝にいう。「山間に住まう人には千本の楸(きささげ)、安邑の人には千本の棗、燕・秦の人には千本の栗、蜀漢・江陵の人には千本の橘、齊・魯の人には千本の桑があれば、その人はみな千戸侯に等しい〔収入になる〕」と。これは種植〔=商品作物類の栽培〕の利益が大きいことを言っているのである。柳宗玄の『種樹郭橐駝伝』を読むと次のように書いている。「郭橐駝が植えた樹木は、移植した場合でも根付かないことはなく、そのうえ大きく繁茂し、早くに実がなり繁殖する。他人がこの真似をしても、彼のようににはできない」と。そうしてきっと樹木の栽培法があったのだと知れる。このことを『詩経』から考えるに、「帝其の山を省(み)、柞・楸斯に抜たり、松・柏斯に兌たり」とある。ここに周が天命を受けた理由がみられる。また「樹うるは榛と栗と、椅と桐と梓と漆」とある。衛の文公がその国を復興させた理由である。思うに王侯は財に富み且つ位が高いが、それでもなお果樹を植えて成果をあげているようなものである。いわんや民に於いてをや。『周礼』太宰では「九職」を人民に任じる職として、一に「三農」といい九種類の穀物を栽培させ、二に「園圃」といい草木〔=実のなる野菜や果樹〕を育てさせた。「園圃」は「三農」に次ぐ職であり、それは民の生業において尊重すべきだからである。そうであるからには種植の務めは、おろそかにしてはいけないのだ。

種植の分野はきわめて多いが、民生の役に立つものといえば桑に先んずるものはない(1)。

【注】

(1)『王禎』の原文を見ると、この一文は次項の冒頭にあるべきである。とりあえず『三台万用』の原文に従う。

②桑

【原文】

桑種甚多、所名者、荊與魯也。荊桑多榘、魯桑少榘。葉薄而尖、其辺有瓣、枝幹條葉堅勁者荊桑也。葉圓厚而多津、枝幹條葉豐腴者魯桑也。荊桑根固而心實、能久遠。魯桑根不固、心不實、不能久遠。宜以魯桑條接之、則能久遠、而又盛茂也。魯爲地桑、而有厭條之法。傳轉無窮、是亦可以久遠也。荊桑所飼蚕、其絲堅韌、中紗羅用。魯桑之類、宜飼大〔小〕蚕、荊桑宜飼小〔大〕蚕(一)。齊民要術曰、收榘之黒者、剪去兩頭、惟取中間一截。盖兩頭者、其子差細、種則成雞桑花桑。中間一截、其子堅栗、則枝幹堅強、而葉肥厚。將種之時、先以柴灰淹〔緑?〕〔揉〕、次日水淘去輕秕不實者、曬令水脉方乾、種乃易生(二)。仍當畦種、常薺令淨、慎勿採摘〔沐〕。大如指〔臂〕許、正月中移之、十歩一樹、行欲少犄角、不用正相當。凡耕桑田、不用近樹、犁不著処斲土令起、研〔斫〕去浮根、以蚕矢糞之。〔++劇〕〔剝〕桑、十二月爲上時、正月次之、二月爲下。大抵桑多者、宜苦研〔斫〕、桑少宜劇〔剝〕(三)。農桑要旨云、平原淤壤土地肥虚、荊桑魯桑種之俱可。若地連山陵、土脉赤硬、止宜荊桑(四)。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』農桑通訣集之五 種植篇第十三

桑種甚多、所名者、荊與魯也。荊桑多榘、魯桑少榘。葉薄而尖、其邊有瓣者、荊桑也。凡枝幹條葉堅勁者、皆荊之類也。葉圓厚而多津者、魯桑也。凡枝幹條葉豐腴者、皆魯之類也。荊之類、根固而心實、能久遠。宜爲樹。魯之類、根不固、心不實、不能久遠、宜爲地桑。然荊之條葉、不如魯葉之盛茂。當以魯桑條接之、則能久遠、又盛茂也。魯爲地桑、而有壓條之法、傳轉無窮、是亦可以久遠也。荊桑所飼蠶、其絲堅韌、中紗羅用。……魯

桑之類、宜飼小蠶(一)。齊民要術曰、收椹之黒者、剪去兩頭、惟取中間一截。蓋兩頭者、其子差細、種則成雞桑・花桑。中間一截、其子堅栗、則枝幹堅強、而葉肥厚。將種之時、先以柴灰淹揉、次日、水淘去輕秕不實者、曬令水脉才乾、種乃易生(二)。仍當畦種、常薺令淨、慎勿採沐。大如臂許、正月中移之、十步一樹、行欲少犄角、不用正相當。凡耕桑田、不用近樹、犁不著處、鬪土令起、研去浮根、以蠶矢糞之。剝桑十二月爲上時、正月次之、二月爲下。大抵桑多者宜苦斫、桑少宜省剝(三)。農桑要旨云、平原淤壤、土地肥虚、荆桑魯桑、種之俱可。若地連山陵、土脉赤硬、止宜荆桑(四)。

(一)「桑種甚多、……」 『輯要』卷三栽桑、論桑種所引『士農必用』原注

桑種甚多、不可徧舉。世所名者、荆與魯也。荆桑多椹、魯桑少椹。葉薄而尖、其邊有瓣者、荆桑也。凡枝幹條葉堅勁者、皆荆之類也。葉圓厚而多津者、魯桑也。凡枝幹條葉豐腴者、皆魯之類也。荆之類、根固而心實、能久遠、宜爲樹。魯之類、根不固而心不實、不能久遠、宜爲地桑。然荆桑之條葉、不如魯桑之盛茂、當以魯條接之、則能久遠而又盛茂也。魯爲地桑、而有壓條換根之法、傳轉無窮、是亦可以長久也。荆桑之類、宜飼大蠶。其絲堅紉、中紗羅。……魯桑之類、宜飼小蠶。

(二)「齊民要術曰、……種乃易生」 『陳勇』卷下 種桑之法篇

若欲種椹子、擇美桑種椹、每一枚、剪去兩頭、兩頭者不用、爲其子差細、以則成雞桑・花桑、故去之。唯取中間一截。以其子堅栗特大、以種則其幹強實、其葉肥厚、故存之。所存者、先以柴灰淹揉一宿、次日、以水淘去輕秕不實者、擇取堅實者、略曬乾水脉、勿令甚燥、種乃易生。

(三)「仍當畦種、……」 『要術』卷五、種桑柘

……仍畦種、常薺令淨、……慎勿採沐。大如臂許、正月中移之、率十步一樹、行欲少犄角、不用正相當。……凡耕桑田、不用近樹、其犁不著處、鬪地令起、斫去浮根、以蠶矢糞之。……剝桑十二月爲上時、正月次之、二月爲下。大抵桑多者宜苦斫、桑少宜省剝。

(四)「農桑要旨云、……」 『輯要』卷三、栽桑・移桑原注所引

平原淤壤、土地肥虚、荆桑魯桑、種之俱可。若地連山陵、土脉赤硬、止宜荆桑。

【訓読】

桑種甚だ多きも、名づくる所の者は荆と魯なり。荆桑は椹多く、魯桑は椹少し。葉薄くして尖り、其の辺に瓣有り、枝幹・條葉の堅勁なる者は荆桑なり。葉圓厚にして津多く、枝幹・條葉の豊腴なる者は魯桑なり。荆桑は根固くして心實ち、能く久遠なり。魯桑の根は固からず、心は實ちず、久遠なる能はず。宜しく魯桑の條を以て之に接げば、則ち能く久遠にして又た盛茂するなり。魯は地桑と爲し、而して厭條の法有り。傳轉して窮まり無く、是れも亦た以て久遠なる可きなり。荆桑もて飼ふ所の蚕は、其の絲堅紉なりて、紗羅の用に中たる。魯桑の類は宜しく小蚕を飼うべく、荆桑は宜しく大蚕を飼ふべし。齊民要術に曰く、椹の黒き者を收め、兩頭を剪去し、惟だ中間の一截を取る。蓋し兩頭の者は、其の子差や細かく、種うれば則ち雞桑・花桑と成る。中間の一截は、其の子堅栗なれば、則ち枝幹堅強にして、葉は肥厚なり。將に種ゑんとする時は、先づ柴灰を以て淹揉し、次日、水もて輕秕の實ちざる者を淘去し、曬して水脉をして方に乾か令め、種うれば乃ち生じ易し。仍ほ當に畦に種うべく、常に薺して淨なら令め、慎んで採・沐する勿かれ。大いさ臂許りの如くなれば、正月中之を移し、十歩に一樹、行は少や犄角なるを欲し、正しく相ひ當るを用ゐず。凡そ桑田を耕すは、樹に近きを用ゐず、犁の著かざる処は、土を鬪して起こさ令め、浮根を斫り去り、蚕矢を以て之に糞す。剝桑は、十二月を上時と爲し、正月之に次ぎ、二月を下と爲す。大抵桑の多き者は、宜しく斫るに苦(つと)むべく、桑の少なきものは宜しく剝を省くべし。農桑要旨に云く、平原淤壤は土地の肥虚なれば、荆桑・魯桑之を種うるは俱に可なり。若し地の山陵に連なり、土脉赤硬なれば、止だ荆桑に宜しきのみ。

【現代語訳】

桑の種類はたいへん多いが、古くから名付けてきたのは荊桑と魯桑である。荊桑は榧(果実)が多く、魯桑は榧が少ない。葉が薄くて尖り、その周囲に切り込みがあり、枝や幹・葉が硬く強(こわ)いものは荊桑である。葉が円くて厚く、樹液が多く、枝や幹・葉が豊かなものは魯桑である。荊桑は根が固くて芯が充実しており、寿命が長い。魯桑は根が固くなく、芯が充実しておらず、寿命が長くない。魯桑の枝を荊桑に接ぎ木すれば寿命が長くなり、そのうえ繁茂する。魯桑は地桑仕立てとして栽培し、圧条(=取り木)法で殖やす。[荊桑の]性格が永く引き継がれて、これもまた寿命が長くなる。荊桑で飼った蚕は、その生糸が堅くしなやかで、紗や羅を織るのに用いる。魯桑の類は小蚕(=幼い蚕)を飼うのに適しており、荊桑は大蚕(=成長した蚕)を飼うのに適している。

『齊民要術』[実は『陳勇農書』]にいう、榧の黒いものを収穫し、両端を取り去り、ただ中間の部分だけを使う。思うに両端のものは、中の種子がやや細かく、これを播くと雞桑・花桑になる。中間の部分は、種子が堅く充実しているので、枝や幹が堅くて強く、葉は肥えて厚い。播こうとする時は、まず柴の灰をまぶして揉み、次の日、水に入れ、軽くて実の入っていないものをすすぎ取り、陽に充てて水を乾かし、これを播けば芽を出しやすい。

『齊民要術』にいう]畦(うね)播きにすべきで、常に除草してきれいにしておき、くれぐれも葉を摘んだり、整枝してはいけない。太さが臂ほどになれば、正月中に移植し、十歩に一株の間隔とし、株の各行はややずれて互い違いになっているのがよく、株の位置が碁盤の目状になっているのはよくない。およそ桑田を犁耕する場合には、桑の近くは耕さない。犁が行き届かない場所は、畑土を掘り起こして、桑の浮根を切りとり、ここに蚕矢を入れて肥やす。桑の枝下ろしは、十二月を上時とし、正月がこれに次ぎ、二月を下時とする。おおむね桑を多く持っている者は枝下ろしに励むのがよく、桑の少ない者は枝下ろしを省略するのがよい。

『農桑要旨』にいう、平原の泥の堆積地は土地が肥えてふかふかなので、荊桑・魯桑ともに植えることができる。もし山・丘に連なる土地で、土質が赤く硬いものであれば、ただ荊桑のみに適している。

③【梨】

【原文】

謂之快果、其名不一。乳梨皮厚而肉實、鵝梨皮薄而漿多味香。消梨可療病。水梨・紫煤梨・冬梨・甘棠梨豪梨重六斤。雪梨皮黃薄、其味如蜜。香水梨其樹可種亦可挿。齊民要術云、種法、梨熟時全埋之、經年、至春地釋、分栽之、多著熟糞及水。至冬葉落、附地刈殺之、以炭火燒頭、二年即結子、挿者弥疾、法用棠・杜、〔杜〕如臂以上者任挿、杜樹大者挿五枝、小者或〔三或〕二枝。梨葉微動為上時、將欲開莖為下時。先作麻紉、纏十數匝、以鋸截杜、令去地約五六寸。竹為籤、刺皮木之際、令深一寸許。折取其美梨枝陽中者、長五六寸、亦斜籤〔攢〕之、令過心。大小長短與籤等。以刀微割梨枝斜攢之際、剥黑皮、勿令傷青皮、拔去竹籤、即挿梨枝至割處。木邊向木、皮還近皮、挿訖、以綿幕杜頭、封熟泥於上、以土培覆。令梨枝僅得出頭。以土壅四畔。當梨上沃水、水盡、以土覆水、勿令堅涸。百不失一。不宜十字破杜、十不收一。梨既生、杜傍有葉輒去之。凡遠道取梨枝者、下根即燒三四寸、亦可行數百里〔猶生〕。【藏梨法】初霜後即收。於屋下掘深廕坑、底無令潤濕、收梨置中、〔不〕須覆蓋、便得經夏。摘時勿令損傷。又曰、凡醋梨、易水熟煮、則甜美而不損人也。

【出典および参考史料】

*ここまでは『王禎』農桑通訣集からの引用であったが、以下の果樹・樹木類は「百穀譜集」が主体になっている。全文『王禎』百穀譜集之六 果属・梨

梨謂之快果、其名不一。本草圖經曰、乳梨出宣城、皮厚而肉實。鵝梨出近京州郡及北郡。皮薄而漿多、味差短於乳梨、香則過之。其餘有水梨、…紫煤梨、…甘棠梨、…之類。又註曰、消梨可療病。……鉅野豪梨、重六

斤。……北地有香水梨。梨樹亦可種亦可插(一)。齊民要術云、種法、梨熟時、全埋之、經年、至春地釋、分栽之、多著熟糞及水。至冬葉落、附地刈殺之、以炭火燒頭、二年即結子。插者彌疾。插法用棠杜。杜如臂以上者任插。杜樹大者插五枝、小者或三或二。梨葉微動爲上時、將欲開莖爲下時。先作麻紉、纏十數匝、以鋸截杜、令去地五六寸、斜攢、竹爲籤、刺皮木之際、令深一寸許、折取其美梨枝、陽中者、長五六寸、亦斜攢之、令過心。大小長短與籤等、以刀微割梨枝斜攢之際、剥去黑皮(原注:勿令傷青、青皮傷即死)、拔去竹籤、即插梨枝至割處、木邊向木、皮還近皮、插訖、以綿幕杜頭、封熟泥於上、以土培覆、令梨枝僅得出頭。以土壅四畔、當梨上沃水、水盡、以土覆之、勿令堅涸。百不失一。其十字破杜者、十不收一。梨既生、杜傍有葉輒去之。……又曰、凡遠道取梨枝者、下根即燒三四寸、亦可行數百里猶生。藏梨法、初霜後即收、於屋下掘深廕坑、底無令潤湿、收梨置中、不須覆蓋、便得經夏。(摘時必令好接、勿令損傷)。又曰、凡醋梨、易水熟煮、則甜美而不損人也(二)。

(一)「本草圖經曰……」 『重修政和經史證類備用本草』卷二三果部下品

圖經曰、……乳梨出宣城、皮厚而肉實。…鵝梨出近京州郡及北都、皮薄而漿多、味差短於乳梨、其香則過之。……其餘有水梨、消梨、紫煤梨、赤梨、…甘棠、禦兒梨之類甚多。

(二)「齊民要術云、……」 『要術』卷四 插梨第三十七

種者、梨熟時、全埋之、經年、至春地釋、分栽之、多著熟糞及水。至冬葉落、附地刈殺之、以炭火燒頭。二年即結子。插者彌疾。插法、用棠杜。杜如臂以上、皆任插。杜樹大者、插五枝、小者或三或二。梨葉微動爲上時、將欲開莖爲下時。先作麻紉、纏十數匝、以鋸截杜、令去地五六寸。斜攢竹爲籤、刺皮木之際、令深一寸許。折取其美梨枝陽中者、長五六寸、亦斜攢之、令過心。大小長短與籤等。以刀微●梨枝斜攢之際、剥去黑皮(勿令傷青、青皮傷即死)、拔去竹籤、即插梨、令至●處、木邊向木、皮還近皮。插訖、以綿幕杜頭、封熟泥於上、以土培覆、令梨枝僅得出頭、以土壅四畔。當梨上沃水、水盡、以土覆之、勿令堅涸。百不失一。其十字破杜者、十不收一。梨既生、杜傍有葉出、輒去之。……又曰、凡遠道取梨枝者、下根即燒三四寸、亦可行數百里猶生。藏梨法、初霜後即收、於屋下掘作深廕坑、底無令潤湿。收梨置中、不須覆蓋、便得經夏(摘時必令好接、勿令損傷)。又曰、凡醋梨、易水熟煮、則甜美而不損人也。

【訓読】

[梨は]之を快果と謂ひ、其の名一ならず。乳梨は皮厚くして肉實ち、鵝梨は皮薄くして漿多く、味香あり。消梨は病を療す可し。水梨・紫煤梨・冬梨・甘棠梨あり、豪梨は重さ六斤。雪梨は皮黄にして薄く、其の味蜜の如し。香水梨あり。其の樹は種う可く亦た挿す可し。齊民要術に云く、種法、梨熟するの時全て之を埋め、年を経、春に至りて地釋(とくれば、分ちて之を栽(う)ゑ、多く熟糞及び水を著す。冬に至り葉落つれば、地に附して刈りて之を殺し、炭火を以て頭を焼けば、二年して即ち子を結ぶ。挿す者は弥いよ疾し。挿し木法。棠(やまなし)・杜(あまなし)を用う。杜の臂以上の如き者は挿すに任ふ。杜樹の大なる者は五枝を挿し、小なる者は或ひは三、或ひは二枝なり。梨の葉微や動くを上時と爲し、將に莖を開かんと欲するを下時と爲す。先づ麻紉を作り、纏うこと十數匝、鋸を以て杜を截り、地を去ら令むること約そ五六寸。竹もて籤を爲り、皮・木の際に刺し、深さ一寸許りとせ令む。其の美梨の枝の陽中なる者を折り取り、長さ五六寸とし、亦た之を斜に攢し、心を過ぎ令む。大小、長短は籤と等しくす。刀を以て梨の枝の斜攢の際を微や割し、黒皮を剥去す。青皮を傷つか令む勿れ。竹籤を抜き去り、即ちに梨枝を挿して割處に至らしむ。木邊は木に向かひ、皮は還た皮に近づく。挿し訖れば、綿を以て杜の頭を幕(つつ)み、熟泥を上封じ、土を以て之を覆ひ、梨の枝を令て僅かに頭を出すを得しむ。土を以て四畔を壅ふ。梨上に當てて水を沃ぎ、水盡くれば、土を以て之を覆ひ、堅く涸ら令む勿れ。百に一を失なはず。其の十字もて杜を破れば、十に一を收めず。梨既に生じ、杜の傍に葉有れば輒ち之を去る。凡そ遠道より梨の枝を取る者は、下根即

ち三四寸を焼けば、亦た数百里を行く可く、猶ほ生ずるがごとし。【藏梨法】初霜の後即ちに收む。屋下に深き廢坑を掘り、底は潤湿なら令むる無く、梨を収めて中に置き、漬く覆盖せざれば、便ち夏を経るを得ん。摘む時に損傷せ令むる勿れ。又た曰く、凡そ醋梨は、水を易へて熟煮すれば、則ち甜美にして人を損なわざるなり。

【現代語訳】

梨は「快果」といい、その名称は一つではない。乳梨は皮が厚くて果肉が詰まっており、鵝梨は皮が薄くて果汁が多く、味〔は乳梨よりもやや劣っているが〕香〔りはそれ以上で〕ある(1)。消梨は病気を治すことができる。〔その他に〕水梨・紫煤梨・冬梨・甘棠梨などがある。豪梨は重さが六斤ある。雪梨は皮が黄色で薄く、その味は蜜のようである。香水梨もある。

梨の樹〔の繁殖法〕は実生法でもよいし、接ぎ木法でもよい。『齊民要術』にいう。「実生法。梨が熟した時、果実全体を埋め、年を経て(2)、春になって畑地が解ければ、苗を分けて植えつけ、多くの熟糞と水をそそぐ。冬になって葉が落ちたら、地際で刈り取り、炭火で切り口を焼けば、二年経って実を結ぶ。接ぎ木する場合はずっと成長が速い。接ぎ木法。棠(やまなし)・杜(あまなし)を台木に用いる。臂以上の太さの杜は接ぎ木に耐えられる。杜の樹の大きなものには五本の枝を接ぎ、小さなものには三本か、二本を接ぐ。梨の葉がやや動くようになったら上時であり、葉の芽の薄皮が開こうとするときが下時である(3)。まず麻縄を縋い、杜の樹に十数回巻き付け、〔その上端を〕鋸で切り、地面からおよそ五、六寸とする。竹を削いでへらを作り、皮と木の間に刺し、深さ一寸ばかりとする。日向の質の良い梨の枝を折り取り、長さ五、六寸とし、さらにこれを斜に削ぎ、芯の部分を越えるようにする。大小、長短は竹のへらと等しくする。梨の枝を斜めに削ぎ取った際を刀で傷つけ、黒皮を剥ぎ取る。〔内側の〕青皮を傷つけてはいけない。竹のへらを抜き去り、すぐに梨の枝を挿して剥ぎ取ったところまで届かせる。枝の木部は木部に向きあい、皮はまた皮に近づける。接ぎ終わったら、綿で杜の先端を包み、練り上げた泥で上を封じ、土で覆い、梨の枝がわずかに頭を出せるようにする。〔台木の〕周囲に土寄せして養生する。梨の上から水をそそぎ、水がなくなれば、土で覆い、堅く乾燥させてはならない。こうすれば百に一つの失敗もない。十字に切り込みを入れる接ぎ木法では(4)、十に一つの成功も望めない。梨が成長してから、杜の傍に葉があればすぐに取り去る。およそ遠路はるばる梨の枝を取り寄せる場合は、下端の三、四寸を焼いておくと、数百里を行くことができ、なお接ぎ木することができる。

【梨の貯蔵法】初霜の後、すぐに収穫する。屋根の下に深く穴倉を掘り、底は湿潤にならないようにし、中に梨を収納し、覆いをかけないようにしておけば、夏を越すことができる。果実を摘む時に傷つけないようにする。またいう。およそ醋梨は水を換えて十分煮れば甘美になり、人体に害を与えない」と。

【注】

- (1) ()内は典拠史料から補ったが、元来はこれがないでも文意が通じるように編集されている。
- (2) 「経年」 西山・熊代訳注では「年明けて春となり」(192 頁)と訳し、繆『王氏訳注』では「経過一年到第三年初春」(243 頁)と訳している。
- (3) 「梨葉微動……」 接ぎ木の適時について、西山・熊代訳注では「梨葉の動き始める頃を上時」、「芽が開きそうになるころを下時」とする(192 頁)。「芽は葉芽の薄皮」とする。繆『王氏訳注』では、それぞれの時期を「梨樹葉芽萌動」「将要開展長葉」の時とする。
- (4) 「十字破杜」 西山・熊代訳注では「杜樹を十字に裂いて接ぐ」とし、繆『王氏訳注』では「(通過砧木中心横豎劈兩刀的)十字劈接法」とする。

④【桃】

【原文】

典術曰、五木之精也。厭伏邪氣、制百鬼〔鬼〕。衍義曰、桃品亦多、有山桃・旄冬桃・夏白桃・秋赤桃・襄桃。句鼻桃重二斤。金城桃、胡桃出西域、甘美可食。細核桃、霜桃、霜下可食。綺●〔帶〕桃・含桃・紫紋桃。金桃、色深黃。崑崙桃、肉深紫紅色、二種極甘。餅子〔桃〕。齊民要術云、種桃法、桃熟時、合肉全埋糞地中、至春既生、則移栽實地。不然則實小而苦。栽法、以鋤合土掘移之。若離本土多死。又法、桃熟時、於墻南陽中煖處、深寬為坑、選取好桃數十枚、擊破〔取〕核、即內牛糞中、頭向上、取好爛糞和土厚覆尺餘。至春桃始動時、徐徐撥去糞土。皆應生芽、合〔合〕取核種之、萬不失一。其餘以熟糞之、則益桃味。桃性皮急、四年以上、宜刀豎〔豎〕劇〔劇〕其皮。七八年便老、十年即死。又法、候其子細、便附上〔土〕斫去、枿上生者、復為小〔少〕桃。【桃酢法】桃爛自零落者、收取、納之甕中、以物蓋之〔口〕。七日後既爛、漉去皮核、密〔封〕閉之、一二〔以上二字作三字〕七日酢成、香美可食。

【出典および参考史料】

全文 『玉禎』百穀譜集之六 果属・桃

典術曰、五木之精也。厭伏邪氣、制百鬼(一)。爾雅曰、旄冬桃。〔木+虎〕桃・山桃。廣志曰、桃有冬桃・夏白桃・秋白桃。襄桃、其桃美也。有秋赤桃。……鄴中記曰、石虎苑中有句鼻桃、重二斤。西京雜記曰、〔木+虎〕桃・細核桃、霜桃、霜下可食。金城桃・胡桃出西域、甘美可食。綺帶桃・含桃・紫文桃。本草衍義曰、桃品亦多。……太原有金桃、色深黃。西京有崑崙桃、肉深紫紅色。此二種尤甘。又餅子桃。如今之香餅子。齊民要術云、種桃法、桃熟時、合肉全埋糞地中。至春既生、移栽實地(原注:若仍處糞中、則實小而苦)。栽法、以鋤合土掘移之(原注:桃性易種難栽、若離本土、率多死矣)。又法、桃熟時於墻南陽中煖處、深寬為坑、選取好桃數十枚、擊破核、即內牛糞中、頭向上。取好爛糞和土厚覆之、令厚尺餘(二)。至春、桃始動時、徐徐撥去糞土、皆應生芽、合取核種之、萬不失一。其餘以熟糞糞之、則益桃味。桃性皮急、四年以上、宜刀豎劇其皮。七八年便老、十年即死。又法、候其子細、便附土斫去、枿上生者、復為少桃。【桃酢法】桃爛自零者、收取、納之甕中、以物蓋口。七日後既爛、漉去皮核、密封閉之、三七日酢成。香美可食。

(一)『太平御覽』卷九六七桃

典術曰、桃者五木之精也。故厭伏邪氣者也。桃之精生在鬼門、制百鬼。……

(二)『種藝必用』

桃熟時、墻面煖處、寬深為坑、收濕牛糞內坑中、好桃核十數箇、尖頭向坑中、糞和厚蓋一尺深。

全文参考:『要術』卷四 種桃柰第三十四

(冒頭原注:爾雅曰、旄冬桃。〔木+虎〕桃・山桃。……廣志曰、桃有冬桃・夏白桃・秋白桃。襄桃、其桃美也。有秋赤桃。……鄴中記曰、石虎苑中有句鼻桃、重二斤。西京雜記曰、〔木+虎〕桃・櫻桃・細核桃、霜桃、言霜下可食。金城桃・胡桃出西域、甘美可食。綺帶桃・含桃・紫文桃。)桃・柰桃欲種法。熟時合肉全埋糞地中。至春既生、移栽實地(原注:仍處糞地中、則實小而苦矣)。栽法、以鋤合土掘移之(原注:桃性易種難栽、若離本土、率多死矣、故須然矣)。又法、桃熟時、於墻南陽中煖處、深寬為坑。選取好桃數十枚、擊取核、即內牛糞中、頭向上、取好爛糞和土厚覆之、令厚尺餘。至春桃始動時、徐徐撥去糞土、皆應生芽、合取核種之、萬不失一。其餘以熟糞糞之、則益桃味。桃性皮急、四年以上、宜以刀豎劇其皮。七八年便老、十年即死。又法、候其子細、便附土斫去、枿上生者、復為少桃、如此亦無窮也。【桃酢法】桃爛自零者、收取、納之瓮中、以物蓋口。七日之後、既爛、漉去皮核、密封閉之。三七日酢成、香美可食。

【訓誥】

典術に曰く、五木の精なり。邪氣を厭伏し、百鬼を制す、と。衍義に曰く、桃品も亦多し。山桃、旄冬桃、夏白桃・

秋赤桃・囊桃有り。句鼻桃は重さ二斤。金城桃、胡桃は西域に出で、甘美にして食す可し。緋核桃、霜桃は、霜下に食す可し。綺帯桃・含桃・紫紋桃あり。金桃は色深黄なり。崑崙桃、肉は深き紫紅色、二種極めて甘し。餅子桃あり。齊民要術に云く、種桃の法、桃熟する時、肉を合して全て糞地中に埋め、春に至りて既に生ずれば、則ち實地に移栽す。然らざれば則ち實は小にして苦し。栽法、鋤を以て土を合して掘り之を移す。若し本土を離るれば多く死すべし。又た法に、桃熟するの時、墻南の陽中の煖かき處に、深く寛く坑を為る。好き桃数十枚を選択し、核を撃取し、即ちに牛糞中に内れ、頭を上に向かせる。好く爛りし糞を取り、土に和して厚く覆ふこと尺餘。春の、桃始めて動く時に至らば、徐徐に糞土を撥去す。皆な應に芽を生ずべく、合に核を取りて之を種うべし。萬に一つも失はざるべし。其の餘は熟糞を以て糞せば、則ち桃味を益す。桃の性は皮急なれば、四年以上なりて、宜しく刀もて豎に其の皮を割す。七八年便ち老い、十年即ち死す。又た法に、其の子の細きを候ひ、便ち土に附して斫去すれば、**枿**上に生ぜし者は復た少(わか)き桃と為る。【桃酢法】桃爛りて自ら零落する者を收取し、之を甕中に納め、物を以て口を蓋ふ。七日後既に爛らば、皮・核を漉し去り、密封して之を閉せば、三七日にして酢成り、香りは**美**にして食す可し。

【現代語訳】

『典術』⁽¹⁾にいう、〔桃は〕五木の精である。邪気を払い除き、百鬼を抑える、と。『衍義』⁽²⁾にいう、桃の品種も〔以下のように〕たくさんある。山桃・旄冬桃・夏白桃・秋赤桃・囊桃・句鼻桃(重さ二斤もある)・金城桃・胡桃(西域に産し、甘美で食べることができる)・緋核桃・霜桃(霜が降りたときに食べることができる)・綺帯桃・含桃・紫紋桃・金桃(色が深い黄色である)・崑崙桃(肉が深い紫紅色である。これら二種は極めて甘い)・餅子桃などである。

『齊民要術』にいう。桃の植え方、桃が熟した時、果肉とともにすべて施肥した畑に埋め、春になって芽を出したら、本畑に移植する。そうしないと果実は小さくて苦くなる。栽培法、鋤で周囲の土ごと掘って移植する。もとの畑から離すと多くは枯れるからである。

また別の法にいう。桃が熟した時、垣根の南側の陽当たりがよくて暖かいところに、深くて広い坑を掘る。良質の桃を数十箇選別し、種子を剥ぎ取って、すぐに牛糞中に入れ、頭を上に向かせる。十分に発酵した肥料を取り、畑土と混ぜあわせて〔種子の入った牛糞を〕一尺余りの厚さに覆う。春になって桃が活動し始める時になったら、徐々に糞土を取り除く。みな発芽の準備が整ったはずなので、種子を取り出して播くのがよい。萬に一つの失敗もない。その後は熟糞を施せば桃の風味を益す。桃の性質上、樹皮が引き締まっているので、四年以上になったら、その皮に刀で豎の切り目を入れる。七、八年で衰え始め、十年で枯れる。

また別の法にいう。その果実が小さくなってきたら、地面に近いところで幹を切る。そうすると、その後に伸びてくる枝はまた若い樹となる。

【桃酢の作り方】桃の果実が腐って自然に落ちたものを拾い集め、それを甕のなかに納め、何かでその口を覆う。七日後、十分にどろどろになったら、皮・種子を漉し取り、密封して之を閉ざしておくと、三～七日で酢になり、香りがよく食べられるようになる。

【注】

(1)『典術』『太平御覽』には『王建平典術』という書名もあげられているが、ともに未詳。

(2)『衍義』【出典および参考史料】に挙げたように、これ以下の引用書に『衍義』は含まれていない。またこの部分の記事は『王禎』からの引用であるが、かなり混乱している。おそらく『三台万用』の編纂時に余象斗が誤ったのであろう。

⑤【李】

【原文】

李有数種。尔雅曰、休無實李、即趙李。座〔**瘞**〕接慮李、即麥李、駁赤李、青皮李・馬肝李・牛心李・饀李、肥黏似糕、柰李離核似柰、擘李熟必擘破。有黃扁李・夏李。冬李、十一月熟。春李、冬花春實。御黃〔紫〕其重踰兩、肉厚核小。食之甘香而美。均亭李、紫色極肥大、味甘如蜜。齊民要術曰、李性耐久、樹得三十年、老雖枝枯、子亦不細。【嫁李法】正月一日、或十五日、以磚石着李樹岐〔**歧**〕中、令實繁。又臘月中以杖微打岐間亦良。桃李樹下、並欲鋤去草穢、而不用耕墾。【作白李法】用夏李、色黃便摘取、於塩中揆之、塩入汁出。然後合塩曬令萎、手捻之令扁〔**扁**〕、復曬極扁乃止。曬乾、飲酒時、以湯洗之、漉着蜜中、可以薦酒。

【出典および参考史料】

全文『王禎』百穀譜集之六 果属・李

李有数種。爾雅曰、休無實李。瘞接慮李。駁赤李。註曰、休無實李。一名趙李。瘞接慮李。即今之麥李、細實、有溝道、與麥同熟、故名。駁赤李、其實赤者是也(一)。廣志曰、有黃建李・青皮李・馬肝李・赤陵李。有饀李、肥黏似糕。有柰李、離核似柰。有擘李、熟必擘破。……有黃扁李・夏李。冬李、冬十一月熟。有春季李、冬花春實。愚嘗見北方一種、謂之御黃、其重踰兩、肉厚核小、食之甘香而美、李中之嘉種也。江南建寧有一種名均亭李、紫色、極肥大、味甘如蜜。……齊民要術曰、李性耐久、樹得三十年、老雖枝枯、子亦不細。【嫁李法】正月一日或十五日、以磚石着李樹岐中、令實繁。又臘月中以杖微妙打岐間。……桃李樹下、並欲鋤去草穢、而不用耕墾。……【作白李法】用夏李、色黃、便摘取、於塩中揆之、塩入汁出、然後合塩晒令萎、手捻之令扁、復晒極扁乃止。曝使乾、飲酒時、以湯澆之、漉著蜜中、可以薦酒。

(一)「爾雅曰、……」『爾雅』釋木

休無實李(注:一名趙李)。瘞接慮李(注:今之麥李)。駁赤李(注:子赤)。疏:……李之無實者名休。郭云一名趙李。瘞接慮李、郭云今之麥李、與麥同熟、故名云。李之子赤者名駁。

全文参考:『要術』卷四 種李第三十五

(冒頭原注:爾雅曰、休無實李。瘞接慮李。駁赤李。廣志曰、赤李、麥李、細小有溝道。有黃建李・青皮李・馬肝李・赤陵李。有饀李、肥黏似糕。有柰李、離核似柰。有擘李、熟必擘破。……有黃扁李・夏李。冬李、冬十一月熟。有春季李、冬花春熟。)李欲栽、李性耐久、樹得三十年、老雖枝枯、子亦不細。嫁李法、正月一日、或十五日、以磚石著李樹岐中、令實繁。又法、臘月中以杖微妙打岐間。……李樹桃李樹下、並欲鋤去草穢、而不用耕墾。……作白李法、用夏李、色黃、便摘取、於鹽中揆之、鹽入汁出、然後合鹽曬令萎、手捻之令扁、復曬、極扁乃止。曝使乾、飲酒時、以湯洗之、漉著蜜中、可下酒矣。

【訓読】

李は数種有り。尔雅曰く、休は無實の李。即ち趙李なり。瘞は接慮李。即ち麥李なり。駁は赤李なり。青皮李・馬肝李・牛心李。饀李は肥えて黏(ねば)り、糕に似たり。柰李は核を離れ、柰に似たり。擘李は熟すれば必ず擘破す。黄扁李・夏李有り。冬李は十一月熟す。春李は冬花あり春に實る。御黄は其の重さ兩を踰え、肉厚く核は小なり。之を食すれば甘く香りて美(うま)し。均亭李は紫色にして極めて肥大、味甘きこと蜜の如し。齊民要術曰く、李の性は久しきに耐へ、樹(う)うれば三十年を得。老いて枝枯ると雖も、子亦た細からず。【李を嫁する法】正月一日、或十五日、磚石を以て李樹の岐中に着け、實を令て繁らしむ。又た臘月中、杖を以て岐間を微打するも亦た良し。桃・李樹の下、並(み)な草穢を鋤去するを欲するも、而れども耕墾を用みず。【白李を作る法】夏李を用て、色黄なれば便ち摘み取り、塩中に於て之を揆めば、塩入りて汁出づ。然る後、塩を合して曬し萎れ令め、手もて之を捻り扁なら令め、復た曬して極く扁ならしめて乃ち止む。曬して乾し、飲酒の時、湯を以て之を洗ひ、蜜中に漉着し、以て酒を薦む可し。

【現代語訳】

李には数種類ある。『爾雅』にいう。「休は実のならない李である」と。即ち(注にいう)趙李である。「瘞は接慮李である」と。即ち(注にいう)麦李である。「駁は赤李である」と。『廣志』にいう。]青皮李・馬肝李・牛心李。饒李は肥えて黏(ねばり)、糕(蒸しモチ)に似ている。柰李は果肉の種離れがよく、柰(りんご)に似ている。擘李は熟すると必ず実割れする。黄扁李・夏李。冬李は十一月に熟す。春李は冬に花が咲き春に実る。御黄はその重さが一両を越え、肉が厚く種子は小さい。食べると甘く香りがあり美味しい。均亭李は紫色で極めて肥えて大きく、蜜のように甘い。

『齊民要術』にいう。李の性は長命で、一度植えると三十年はもつ。老樹になると枝が枯れるとはいえ、果実は小さくならない。

【李の果実を増やす方法(1)】正月一日あるいは十五日に、磚や石を李の枝の又(また)に置き、果実を繁らせる。また、十二月中に、杖で李の枝の又を少し打つのもまた良い。桃・李樹の下はみな雑草を除くけれども耕してはいけない。

【白李(2)を作る法】夏李を用い、色が黄色くなったら摘み取り、塩の中に入れて揉むと、塩分が浸みこんで汁が出る。そうした後、塩とともに日に晒して萎れさせ、手で捻って平たくし、再度晒して極く扁平にする。晒して乾かしたものは、飲酒の時に湯で洗い、蜜の中に浸せば、酒を薦めるのによい。

【注】

(1)「嫁李法」 繆『王氏訳注』249 頁によれば「樹上の養分を下に送るのを阻害して果実が成る割合を増やす」とする。

(2)「白李」 同前によれば「干し李」とする。

⑥【梅・杏】

二果也。爾雅曰、梅栂也。西京雜記曰、候梅・同心梅・紫蒂梅・臙脂梅・麗枝梅。杏〔之〕類梅者味酢、類桃者味甘。廣志曰、荊陽有白杏、鄴中有赤杏、黄杏・柰杏。文杏材有文彩。蓬萊杏、花雜五色、仙人所食也。黄而圓者名金杏。又謂之漢帝杏。〔□+扁〕〔扁〕而有〔青〕黄者、曰木杏、味酢。又赤色大而稍〔□+扁〕〔扁〕、肉厚、謂之肉杏。又謂之金剛拳。齊民要術曰、栽種法與桃李同。【作白梅法】梅子酸核初成〔蹠?〕〔時〕〔柄〕〔摘〕取、夜以塩汁漬之、晝則日曝。凡作十宿、十浸、十曝、便成矣。【作烏梅法】梅子施(?)〔核〕初成時摘取、籠盛、於突上熏之、即成矣。【藏梅法】取梅極大者、剥皮陰乾、勿令得風、經一〔二〕宿、去塩汁、内蜜中、月許更易蜜、經年如新。【作烏梅不蠹法】濃燒穰、以湯适〔沃〕之、取汁、以梅投之、使澤、乃出蒸之。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之六 果属・梅杏

梅與杏、二果也。爾雅曰、梅栂也。西京雜記曰、候梅・朱梅・同心梅・紫蒂梅・臙脂梅・麗枝梅。……杏類梅者味酢、類桃者味甘。廣志曰、荊陽有白杏、鄴中有赤杏、有黄杏、有柰杏。西京雜記曰、文杏、材有文彩。蓬萊杏、……花雜五色、云是仙人所食杏也。本草曰、黄而圓者名金杏。……彼人謂之漢帝杏。……其扁而青黄者、曰木杏、味酢。……赤色、大而稍扁、肉厚、謂之肉杏。又謂之金剛拳。……齊民要術曰、栽種法與桃李同。作白梅法、梅子酸、核初成時、摘取、夜以鹽汁漬之、晝則日曝、凡作十宿、十浸、十曝、則成矣。……又作烏梅法、亦以梅子核初成時摘取、籠盛、於突上薰之、即成矣。……食經曰、蜀中藏梅法。取梅極大者、剥皮陰乾、勿令得風、經二宿、去鹽汁、内蜜中月許、更易蜜、經年如新。作烏梅令不蠹法。濃燒穰、以湯沃之、取汁、以梅投、使澤、乃出蒸之。

全文参考:『要術』卷四 種梅杏第三十六

(冒頭原注: 爾雅曰、梅栂也。……西京雜記曰、候梅・朱梅・同心梅・紫蒂梅・臙脂梅・麗枝梅。……廣志曰、荊陽有白杏、鄴中有赤杏、有黃杏、有柰杏。西京雜記曰、文杏、材有文彩。蓬萊杏、……一株花雜五色、云是仙人所食杏也。) 齊民要術曰、栽種法與桃李同。作白梅法、梅子酸、核初成時、摘取、夜以鹽汁漬之、晝則日曝。凡作十宿、十浸、十曝、便成矣。……作烏梅法、亦以梅子核初成時摘取、籠盛、於突上熏之、令乾、即成矣。……食經曰、蜀中藏梅法。取梅極大者、剥皮陰乾、勿令得風。經二宿、去鹽汁、內蜜中。月許更易蜜、經年如新也。……作烏梅欲令不蠹法。濃燒穰、以湯沃之、取汁、以梅投中、使澤、乃出蒸之。

【訓読】

梅と杏は二果なり。爾雅に曰く、梅は栂なり、と。西京雜記に曰く、候梅・同心梅・紫蒂梅・臙脂梅・麗枝梅、と。杏の梅に類(に)たる者は味酢し。桃に類たる者は味甘し。廣志に曰く、荊陽に白杏有り、鄴中に赤杏有り、黃杏・柰杏あり、と。(西京雜記に曰く、)文杏は材に文彩有り。蓬萊杏は、花五色に雜(ま)じり、仙人の食らふ所なりという。黄にして圓き者は金杏と名づく。又た之を漢帝杏と謂ふ。扁にして青黄なる者は木杏と曰ひ、味酢し。又た赤色の大にして稍や扁、肉厚く、之を肉杏と謂ふ。又た之を金剛拳と謂ふ。齊民要術に曰く、栽種法は桃李と同じ。【白梅を作る法】梅子酸ければ核の初めて成る時に摘み取り、夜に塩汁を以て之を漬け、晝は則ち日に曝(さら)す。凡そ十宿、十浸、十曝を作せば、便ち成る。【烏梅を作る法】梅子の核、初めて成る時に摘み取り、籠もて盛り、突上に於て之を熏せば、即ち成る。【藏梅法】梅の極めて大なる者を取り、皮を剥ぎて陰乾しし、風を得令むる勿れ。二宿を経て、塩汁を去り、蜜中に入れ、月許り更に蜜を易ふれば、年を経るも新しきが如し。【烏梅を作りて蠹(むし)くはざらしむる法】濃く穰を焼き、湯を以て之に沃ぎ、汁を取り、梅を以て之に投じて澤(しめ)ら使め、乃ち出だして之を蒸す。

【現代語訳】

梅と杏は二種類の果実である。『爾雅』にいう。梅は栂である、と。『西京雜記』にいう。候梅・同心梅・紫蒂梅・臙脂梅・麗枝梅、と。杏の梅に似ているものは味が酢っぱいが、桃に似ているものは味が甘い。廣志にいう。荊陽に白杏があり、鄴中に赤杏があり、黄杏・柰杏がある、と。[『西京雜記』にいう]文杏は材木に美しい模様がある。蓬萊杏は花が五色に混じり合っていて、仙人の食べるものだという。黄色くて丸いものは金杏とよぶ。また漢帝杏という。扁平で色が青黄のものは木杏といい、味が酢っぱい。また赤色で、大きくてやや扁平で、果肉が厚いものを肉杏という。また金剛拳という。

『齊民要術』にいう。栽培法は桃・李と同じ。【白梅を作る法】梅の実は酢っぱく、種子が成り始めた時に摘み取り、夜に塩水に漬け、昼は陽にあてる。全部で十日間、十回塩水に浸し、十回陽にあてればできあがる。【烏梅を作る方法】梅の実の種子が成り始めた時に摘み取り、籠に盛り、煙出しの上で燻せばできあがる。【〔蜀の〕梅の貯蔵法】梅の極めて大きいものを取り、皮を剥いで陰乾しし、風にあててはいけぬ。〔塩水に漬けて〕(1)二晩経ったら、塩水を取り去り、蜜の中に入れ、一か月ばかりで蜜を取り換えれば、年を経ても新しいものと同じである。【烏梅を作って虫がつかないようにする方法】十分に(2)藁を焼き、湯をそそいで汁を取り、梅を投入して浸し、とり出して蒸す。

【注】

(1)ここに「塩漬」の二文字が抜けていることは繆『齊民要術校釋』203頁【七】で指摘されている。

(2)「濃燒穰」未詳。西山・熊代訳註191頁は「灰汁を濃く取るの意か」とし、繆『王氏訳註』253頁も同じである。しかし、そう考えた場合「濃」の位置が落ち着かない。とりあえず本文のように訳しておく。

⑦【柰・林檎】

【原文】

柰與林檎、二果相類也。柰本草云、木似柰、實皆〔比〕柰差圓。亦有甘酢二種。甘者早熟而味脆美、酢者差晚、湏熟爛堪食。林檎一名來禽。以味甘、來衆禽也。似柰〔林檎〕而小。大長者為柰、圓小為林檎。其形相似、氣味相近。柰性寒、林檎味〔性〕溫。夏熟、小者味澁為枵。齊民要術曰、柰林檎不種、但栽〔之〕、種之雖生、其味不佳。取栽如壓桑法。又法於樹傍數尺許掘坑、洩其根頭、則生栽〔栽易生〕矣。凡樹栽者皆然。〔栽〕如桃李法。林檎樹以正月二月中、翻斧班駁推〔椎〕之、則饒子。

【出典および参考史料】

全文『王禎』百穀譜集之七 果属・柰林檎

柰與林檎、二果而相類也。……陶隱居云、……林檎一名來禽。洪玉父曰、以味甘、來衆禽也(一)。本草圖經曰、木似柰、實比柰差圓。亦有甘酢二種、甘者早熟而味脆美、酢者差晚、湏熟爛堪噉(二)。齊民要術曰、柰林檎不種、但栽之(原注:種之雖生、而味不佳)、取栽如壓桑法。又法、於樹傍數尺許掘坑、洩其根頭、則栽易生矣。凡樹栽者皆然。栽如桃李法。林檎、樹以正月二月中、翻斧班駁椎之、則饒子(三)。……按本草、陳士良云、大長者為柰、圓小為林檎、夏熟。小者味澁為枵、秋熟。若是則柰之與林檎、形相似也。氣味相近也。然柰性寒、林檎性溫、則有不同者。

(一)『種藝必用』

尚書故實云、……來禽言、味甘、來衆禽也。

(二)『重修政和經史證類備用本草』卷二十三 果部下品・林檎

陳士良云、此有三種。大長者為柰、圓者林檎、夏熟。小者味澁為枵、秋熟。……圖經曰、……木似柰、實北〔比〕柰差圓。六七月熟。亦有甘酢二種、甘者早熟而味脆美、酢者差晚、湏熟爛堪噉。……

(三)『要術』卷四 種柰林檎第三十九

柰林檎不種、但栽之(原注:種之雖生、而味不佳)、取栽如壓桑法。……又法、於樹傍數尺許掘坑、洩其根頭、則生栽。凡樹栽者、皆然矣。栽如桃李法。林檎、樹以正月二月中、翻斧班駁推之、則饒子。

【訓読】

柰と林檎、二果なるも相ひ類たるなり。林檎、本草に云く、木は柰に似たるも、實は柰に比して差や圓なり。亦た甘酢二種有り。甘き者は早熟にして味は脆美、酢き者は差や晩にして、熟爛を湏ちて食ふに堪ふ。林檎は一名來禽なり。味甘きを以て、衆禽を來(まね)くなり。柰に似て小なり。大長なる者は柰と為し、圓小なるを林檎と為す。其の形相ひ似て、氣味相ひ近し。柰の性は寒、林檎の性は温なり。夏に熟し、小なる者は味澁く枵と為す。齊民要術に曰く、柰・林檎は種まかず、但だ之を栽するのみ(原注:之を種まけば生ずと雖も、其の味佳からず)。栽を取るは壓桑法の如くす。又た法に、樹傍數尺許りに坑を掘り、其の根頭を洩(もら)せば、則ち栽生じ易し。凡そ樹栽は皆な然り。栽は桃李の法の如し。林檎樹は正月二月中を以て、斧を翻して班駁に之を椎(う)てば、則ち子を饒(ゆたか)にす。

【現代語訳】

柰と林檎は、二種の果樹であるが、たがいに似ている。林檎について本草書にいう。木は柰に似ているが、果実は柰に比べてやや丸い。また甘いものと酢っぱいものの二種がある。甘いものは早熟で、味はさくさくして美味しく、酢っぱいものはやや晩熟で、完熟するのを待てば食べられる。林檎は一名を「來禽」という。味が甘いので多くの鳥類(=禽)を呼び寄せる(=來)のである。柰に似ているが小さい。大きくて長いものを柰とし、丸くて小さいものを林檎とする。それらの形はたがいに似ていて、匂いと味は近い。柰の性は寒で、林檎の性は温である。夏に熟し、小さいものは味が渋く枵(とねりこ)という。

『齊民要術』にいう。柰・林檎は実生法では増やさず、ただ本体を分けることで増やすのみである(原注:種を播けば芽を出すけれども、味が佳くない)。苗を取る場合は桑の取り木法のようにする。また別法に、樹の傍数尺ばかりのところ、坑を掘り、その根の先を引き出せば、苗が芽を出しやすい。だいたい樹木の苗をとる場合はこのようにする。栽培には桃・李の方法のようにする。林檎の樹は、正月から二月中に、斧の背で乱雑にたたくと果実がたくさん実る。

⑧【棗】

【原文】

棗類最多、其名数種不一。樂氏棗世傳樂毅從燕齋來種。又有狗牙・雞心・牛頭・羊矢・獼猴・細腰之名。齊民要術曰、旱澇之地、不任耕稼者、歷落種棗則任矣。棗性燥故也。又曰、常選好味者、留栽之。候棗葉始生而移之。欲令牛馬踐履令淨。正月一日、日出時、反斧班駁推〔椎〕之、名曰嫁棗。候大蚕入簇以杖擊其枝間、振〔振〕去狂〔狂〕花。全赤即收。【收棗〔法〕】日日撼而落之為上。【曬棗法】先治地令淨、有草萊令棗具〔臭〕、布〔才+縁+糸〕〔棗〕於箔上、以无齒杷扒之、聚而復散之、一日中二十度乃佳。夜仍不聚、五六日別擇取紅軟者、上高厨而曝〔暴〕之、去湿〔脞〕爛者。其未乾者、曬曝如法。

【出典および参考史料】

全文『王禎』百穀譜集之七 果属・棗

棗類最多。……又有狗牙・雞心・牛頭・羊矢・獼猴・細腰之名。……青州有樂氏棗、世傳樂毅從燕齋來所種也。齊民要術曰、旱澇之地、不任耕稼者、歷落種棗則任矣。棗性燥故也。又曰、常選好味者留栽之、候棗葉始生而移之、……欲令牛馬踐履令淨(原注:……若耕荒穢則蟲生、須淨。地堅饒實、故宜踐也)。正月一日、日出時、反斧班駁椎之、名曰嫁棗。候大蚕入簇、以杖擊其枝間、振去狂花。全赤即收。收法、日日撼而落之為上。曬棗法、先治地令淨(原注:有草萊、令棗臭)、布棗於箔上、以扒(原注:……無齒杷)聚而復散之、一日中二十度乃佳。夜仍不聚。五六日、別擇取紅軟者、上高厨而暴之、去脞爛者。其未乾者、曬曝如法(一)。

(一)『要術』卷四 種棗第三十三

(冒頭原注:按青州有樂氏棗、……父老相傳云、樂毅破齊時、從燕齋來所種也。……)常選好味者、留栽之。候棗葉始生而移之、……欲令牛馬踐履令淨(原注:……荒穢則蟲生、所以須淨。地堅饒實、故宜踐也)。正月一日、日出時、反斧班駁椎之、名曰嫁棗。候大蚕入簇、以杖擊其枝間、振去狂花。全赤即收。收法、日日撼而落之為上。曬棗法、先治地令淨(原注:有草萊、令棗臭)、置棗於箔上、以扒聚而復散之、一日中二十度乃佳。夜仍不聚。五六日後、別擇取紅軟者、上高厨而曝之、擇去脞爛者。其未乾者、曬曝如法。其阜勞之地、不任耕稼者、歷落種棗則任矣(原注:棗性妙故也)。

【訓読】

棗類最も多く、其の名数種にして一ならず。樂氏棗、世々傳ふるに樂毅燕從り齋し來たる種なり、と。又た狗牙・雞心・牛頭・羊矢・獼猴・細腰之名有り。齊民要術に曰く、旱澇の地の耕稼に任へざる者は、歷落に棗を種(ま)けば則ち任ふ。棗の性燥なるが故なり。又た曰く、常に好味なる者を選び、留めて之を栽う。棗の葉始めて生ずるを候ひて之を移す。牛馬を令て踐履せしめ淨なら令めんと欲す。正月一日、日出づる時、斧を反し班駁に之を椎ち、名づけて嫁棗と曰ふ。大蚕の簇に入るを候ひ杖を以て其の枝間を撃ち、狂花を振去すべし。全て赤なれば即ち收む。【棗を收むる法】日日撼ひて之を落とすを上と為す。【棗を曬す法】先づ地を治めて淨なら令め、草萊有れば棗を臭は令む、棗を箔上に布き、无齒杷を以て之を扒し、聚めて復た之を散じ、一日二十度に中(あ)たれば乃ち佳し。夜は仍ほ聚めず。五、六日、別に紅軟なる者を選び取り、高厨に上げて之を曝し、脞爛者を去る。其の未

だ乾かざる者は、曬曝すること法の如くす。

【現代語訳】

棗の種類はとりわけ多く、その名称は数種でまちまちである。楽氏棗は、世々伝えるところでは楽毅が燕から将来した種類であるという。また狗牙・雞心・牛頭・羊矢・獼侯・細腰棗の名称がある。

『齊民要術』にいう。早澇の地⁽¹⁾で農業に使えないところでは、棗をまばらに植えるなら使うに堪える。棗の性は燥だからである。また曰く、常に好い味の棗を選び、留めておいて之を栽培する。棗の葉が始めて出てきたころ合いをみて移植する。牛馬に畑を踏ませ、[除草して]さっぱりさせておきたい。正月一日、日が出る時、斧の背で乱雑に[樹幹を]たたく。これを名づけて「嫁棗」という。大蚕が簇に入るところ合いをみて、杖でその枝の間を撃ち、無駄花を振り落とす。果実の全体が赤くなればすぐに収穫する。【棗を収穫する方法】毎日ゆずぶって実を落とすのがもつともよい。【棗を陽に晒す方法】まず農地を調べて除草してさっぱりさせ(雑草があれば棗が臭うようになる)、棗を箔の上に敷き、熊手[無齒杷]でこれを掻き集め、集めてはまたこれを散らし、一日に二十度になればよい。夜になったら集めない。五、六日して、別に紅く軟らかくなったものを選びとり、高い棚に上げて陽に晒し、脹れて乾かず軟らかく爛れたもの⁽²⁾をとり去る。まだ乾いていないものは、通常のやり方で陽に晒す。

【注】

- (1)「早澇」 文字の異同があり確定できない。西山・熊代訳註は「阜勞」とし「丘陵瘠薄の地」と解するが「勞」の意味が理解できない。繆『齊民要術校釋』は「阜勞」であれば「高阜勞累之地」と解釈できて「差可(ややよい)」とするものの、文字に疑いが残るとし結論は保留している(186 頁⁽⁴⁾)。なお、繆の「勞累」には「働きすぎ」といった意味があり(『中日大辞典』)、使い過ぎて地力のなくなった農地であろう。
- (2)「降爛」 西山・熊代訳註は「降れたり爛れたりしたもの」と解し(181 頁)、繆『齊民要術校釋』は「膨張不乾縮而軟爛」と解する(189 頁【二四】)。

⑨【栗】

【原文】

五方皆有之。惟濮陽范陽生者味美。兗州宣州最勝、燕山栗小而味甘。有板栗佳栗、皆大禾花栗早栗適中、茅栗似栗而細。一種栗頂圓末尖、謂之旋栗。又曰、鈎栗亦名榛。齊[民]要術曰、栗種而不栽。栗初熟出殼、即於屋裏深埋濕土中、見風[日]不復生矣。至春二月、芽生、出而種之。既生數年、不要掌近。三年內、每到十月、當須草裹[裹]、至二月乃解。不裹[裹]恐凍死。種榛法與栗同。凡栗欲乾、莫如曝。欲生莫欲[如]潤。藏乾栗法。取穰灰淋汁漬栗、取出日中曬、令栗肉焦燥、可[至]後年春夏。【藏生栗法】著器中、曬細沙可[令]燥、以盆覆之。至後年芽而不生蟲。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之七 果属・栗

栗、陸璣疏曰、五方皆有之、周・秦・吳・揚特饒。惟濮陽及范陽生者味美、他方不及。本草圖經曰、兗州・宣州者最勝。……愚嘗見燕山栗、小而味最甘。蜀本圖經曰、板栗・佳栗、二木皆大。又有茅栗、似栗而細。衍義曰、有一種栗、頂圓末尖、謂之旋栗(一)。榛亦栗屬、實最小。齊民要術曰、栗種而不栽。栗初熟出殼、即於屋裏埋著濕土中(原注:……及見風日、則不復生矣)、至春二月、芽生、出而種之。既生、數年不用掌近。三年內、每到十月、常須草裹、至二月乃解(原注:不裹則凍死)。種榛法與栗同。本草圖經曰、栗欲乾、莫如曝、欲生莫如潤(二)。食經曰、藏乾栗法、取穰灰淋汁漬栗、取出、日中曬、令栗肉焦燥、可至後年春夏。藏生栗法、著器中、曬細沙令燥、以盆覆之、至後年二月生芽而不生蟲(三)。

(一)『重修政和經史證類備用本草』卷二十三 栗子

臣禹錫等謹按蜀本圖經云、……又有板栗・佳栗、二樹皆大。又有茅栗、似栗而細。……圖經曰、……今處處有之。而兗州・宣州者最勝。……陸璣疏云、栗五方皆有之、周・秦・吳・楊特饒。……惟濮陽及范陽栗甜美味長、他方者盡不及也。……衍義曰、栗欲乾、莫如曝、欲生收、莫如潤、……有一種栗、頂圓末尖、謂之旋栗。

(二)『重修政和經史證類備用本草』卷二十三 栗子

圖經曰、栗欲乾、莫如曝、欲生收、莫如潤、

(三)『要術』卷四 種栗第三十八

栗種而不栽。栗初熟出殼、即於屋裏埋著濕土中(原注:……及見風日、則不復生矣)、至春二月、悉芽生、出而種之。既生、數年不用掌近。三年內、每到十月、常須草裹、至二月乃解(原注:不裹則凍死)。……食經、藏乾栗法、取穰灰、淋取汁漬栗、出、日中曬、令栗肉焦燥、可不畏蟲、得至後年春夏。藏生栗法、著器中、曬細沙可燥、以盆覆之、至後年二月、皆生芽而不蟲者也。榛。栽種與栗同。

本草圖經曰、栗欲乾、莫如曝、欲生莫如潤。

【訓読】

五方皆な之れ有り。惟だ濮陽・范陽の生ずる者、味は美なり。兗州・宣州最も勝れ、燕山の栗は小なれど味甘し。板栗・佳栗有り、皆な大なり。禾花栗・早栗は適中なり。茅栗は栗に似るも細し。一種の栗ありて頂は圓にして末は尖、之を旋栗と謂ふ。又た曰く、鈎栗亦の名は榛。齊民要術曰く、栗種まきて栽せず。栗初め熟して殻を出れば、即ち屋裏に於いて湿土中に深く埋め、風日を見れば復た生ぜず。春二月に至り、芽生ずれば、出して之を種う。既に生じて数年、掌の近づきを要せず。三年内、十月に到る毎に、當に漬草もて裹み、二月に至れば乃ち解く。裹まざれば凍死するを恐る。榛を種まくの法は栗と同じ。凡そ栗の乾なるを欲すれば、曝すに如くは莫し。生なるを欲すれば潤に如くは莫し。乾栗を藏するの法。穰灰淋汁を取り栗を漬け、取り出だして日中に曬し、栗肉を令て焦燥ならしむれば、後年春夏に至る可し。【生栗を藏するの法】器中に着して曬し、細沙もて燥(かわ)か令め、盆を以て之を覆ふ。後年に至り芽ぐみても蟲を生ぜず。

【現代語訳】

栗は中央と四方のすべての地域に産する。ただ濮陽(1)・范陽(唐・河北道幽州)で穫れるものは美味である。兗州(宋・京東西路)・宣州(宋・江南東路)産は最もすぐれており、燕山(唐・河北道薊州)の栗は小さいけれども味は甘い。板栗・佳栗というものがあり、ともに大きい。禾花栗・早栗(2)はちょうどよい大きさである。茅栗は栗に似ているが細かい。一種の栗があり、先端は円く末端は尖っており、これを旋栗と謂う。またいう。鈎栗はまたの名を榛という。

『齊民要術』にいう。栗は実生法で殖やし挿し木はしない。栗が初めて熟し殻から出たら、すぐに屋内の湿土中に深く埋める(原注:風や日に当てると、もはや芽を出さない)。春二月に至り、芽が出てくれば、土中から出して播く。芽を出してから数年は、掌を近づけてはいけない。三年以内は十月に到るたびに、草で〔苗木を〕包まねばならず、二月になったらはじめて解く(原注:包まないで凍死する恐れがある)。榛(はしばみ)を播く方法は栗と同じである。『本草衍義』にいう凡そ栗を乾燥させたければ、陽にあてるのがもっとも良い。生で収蔵したければ潤しておくのがもっとも良い。

乾し栗を貯蔵する方法。藁灰のあく汁を作って栗を漬け、取り出して日中に曬し、栗の肉を十分に乾燥させれば、翌年の春・夏までもつ。

【生栗を貯蔵する方法】容器にいれて陽にあて、細かい砂で〔栗を〕乾燥させ(3)、盆でこれを覆っておく。翌年になって芽を出しても虫はつかない。

【注】

- (1)「濮陽」 唐・河南道濮州または宋・河北東路開德府。
- (2)「禾花栗・早栗」 未詳。あるいは「早栗」は早生種の栗か。
- (3)「著器中、曬細沙令燥」 西山・熊代『訳註』197頁は読点の位置を変えて「器に入れて日にさらし、(栗を埋めた)細沙がよく乾燥したら」とするが、不自然である。

⑩【柿】

【原文】

多種有黄柿・紅柿・朱柿。有着盖柿、於蒂下別更〔生〕一重、有牛心柿・蒸餅柿・塔柿。棹柿江南柿而青黒。又有梁侯鳥〔烏〕棹之柿。齊民要術云、柿有小者、栽之、無小者、取枝、於榎棗根上挿之、如挿梨法。食經云、以灰汁澡柿再三度、乾令汁絶、着器中十日可食。紅〔烘〕柿器内盛、待其紅軟、其澁自去可食。【作柿乾法】生柿搦去厚皮、捻〔□+扁〕〔扁〕、向日曝乾、納甕中、待柿霜出可食。其霜收、甘涼如蜜。可治口瘡及咽喉積熱。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之七 果属・柿

柿多種。本草曰、有黄柿……紅柿……朱柿……(一)。衍義曰、柿有着盖柿、於蒂下別生一重、有牛心柿・蒸餅柿……有一種塔柿……棹柿(二)、生江淮南、似柿而青黒。又有梁侯鳥棹之柿。齊民要術云、柿有小者、栽之、無小者、取枝、於榎棗根上挿之、如挿梨法。食經云、以灰汁澡柿再三、度乾、令汁絶、著器中、經十日可食(三)。……又有烘柿、器内盛之、待其紅軟、其澁自去、味甘如蜜。圖經曰、……愚按、作柿乾法。生柿搦去厚皮、捻扁、向日曝乾、納於瓮中、待柿霜俱出可食、甚涼。其霜收之、甘涼如蜜、可醫口瘡及咽喉熱積。

(一) 『重修政和經史證類備用本草』卷二十三 柿

圖經曰、……柿之種亦多、黄柿生近京州郡、紅柿南北通有、朱柿出華山、……棹柿……

(二) 同前

衍義曰、柿有着盖柿、於蒂下別生一重、又牛心柿如牛之心、蒸餅柿如今之市買蒸餅、……又一種塔柿亦大於諸柿、

(三) 『要術』卷四 種第四十

柿有小者、栽之。無者、取枝於榎棗根上挿之、如挿梨法。……食經藏柿法、……以灰汁澡再三度、乾令汁絶、著器中、經十日可食。

【訓読】

柿は多種なり。黄柿・紅柿・朱柿有り。着盖柿有り、蒂下に別に一重を生ず。牛心柿・蒸餅柿・塔柿有り。棹柿は、江南の柿にして青黒し。又た梁侯鳥棹之柿有り。齊民要術に云く、柿に小さき者有れば、之を栽す。小さき者無ければ、枝を取り榎棗の根上に之を挿し、挿梨法の如くす。食經に云く、灰汁を以て柿を澡ふこと再三度、乾けば汁を令て絶せしめ、器中に着すこと十日にして食らふ可し。烘柿は器内に盛り、其の紅軟なるを待てば、其の澁自ら去り食らふ可し。

【柿乾を作る法】生柿は厚き皮を搦去し、捻扁し、日に向かひて曝乾し、甕中に納めて柿霜の出づるを待てば食らふ可し。其の霜は收むれば甘涼なること蜜の如し。口瘡及び咽喉の積熱を治す可し。

【現代語訳】

柿は種類が多い。黄柿・紅柿・朱柿がある。着盖柿があり、蒂の下に別に一重の蒂を生じる。牛心柿・蒸餅柿がある。塔柿があり、棹柿は江南の柿で青黒い色をしている。さらに潘岳の「閑居賦」に「梁侯鳥棹之柿」というもの

がある(1)。

『芥民要術』にいう。柿は小さい苗(2)があれば、これを栽培する。小さい苗がなければ、枝を取って**檟棗**(3)の根の上に挿し、梨の接ぎ木法のようにする。

『食経』にいう。灰汁で柿を再三洗い、乾いたら汁気をすっかりなくし、容器に入れて十日経てば食べることができる。**烘柿**は容器のなかに盛り、紅く軟らかくなれば、その渋が自然と抜けるので食べることができる。

【干し柿を作る方法】生柿は厚く皮を剥き(4)、捻って平らにし、日に当てて干し、甕のなかに納めて、柿霜が出てくれば食べることができる。柿霜は収穫すれば甘く涼やかで蜜のようである。口瘡および咽喉の積熱を治すことができる。

【注】

- (1)ここまでの記述は『王禎』に拠るものの、かなり省略され、また改変されている。このためもとの文意とやや異なる部分もあるが、そのまま訳す。
- (2)「小者」 西山・熊代『訳註』201 頁は「ひこばえ」と解釈するが、根拠は示していない。
- (3)「**檟棗**」 『要術』『王禎』には出て来ない名称であるが、繆『王氏訳註』260 頁は棗類ではなく柿樹科の、俗に「軟棗」と呼ばれる種だとする。ただし『大漢和辞典』は「さるかき」という意味をつけている。
- (4)「搯去」「搯」の字義について繆『王氏訳註』は未詳とする。『大漢和辞典』は「ぬく」という意味をつけている。文意によって訳す。

⑩【荔枝】

【原文】

一名丹荔枝。生嶺南巴蜀閩泉漳興化及兩廣。其品閩為最、蜀川次之、嶺南為下。樹形團圓〔團〕如帷蓋〔蓋〕、葉如冬青、花以〔如〕橘、朶如葡萄、核如枇杷、殼如紅繪、膜如紫綃〔綃〕、肉白如肪。花於二、三月、實於五、六月。其根浮、必須加糞土以培之。性不耐寒、最難培植、纔經繁霜、枝葉枯死、遇春二、三月、再發新葉。初種五、六年、冬月覆蓋〔蓋〕之、以護霜雪。種之四、五十年、始開花結實。其木堅固、有經四百餘年、猶能結實者。【曬荔枝法】採下即用竹筥〔籬〕朗曬、經數日、色變核乾、用火焙之、以核十分乾硬為度。【收藏】用竹籠、箬葉裹〔裹〕之、可以至〔致〕遠。成朶曬乾者、名為荔錦。取其肉生、以蜜熬作煎、嚼之如糖霜然。名為荔煎。此果若離本枝、一日色變、二日香變、三日味變、四日五日外、色香味盡皆去矣。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之七 果属・荔枝

一名丹荔。……生嶺南・巴中・泉・福・漳・興・嘉・蜀・渝・涪及二廣州郡皆有之。其品閩為最、蜀川次之、嶺南為下。樹形團圓如帷蓋、葉如冬青、花如橘、朶如葡萄、核如枇杷、殼如紅繪、膜如紫綃、肉白如肪、花於二三月、實於五六月。其根浮、必須加糞土以培之。性不耐寒、最難培植、纔經繁霜、枝葉枯死、遇春二三月、再發新葉。初種五六年、冬月覆蓋之、以護霜雪。種之四五十年、始開花結實。其木堅固、有經四百餘年、猶能結實者。曬荔枝法。採下即用竹籬朗曬、經數日、色變核乾、用火焙之、以核十分乾硬為度。收藏用竹籠、箬葉裹之、可以致遠。成朶曬乾者、名為荔錦。取其肉生、以蜜熬作煎、嚼之如糖霜然。名為荔煎。……蓋此果若離本枝、一日色變、二日香變、三日味變、四日五日外、香色味盡皆去矣。

【訓読】

一名丹荔枝。嶺南・巴蜀・閩・泉・漳・興化及び兩廣に生ず。其の品は閩最と為し、蜀川之に次ぎ、嶺南下と為す。樹形は團圓にして帷蓋の如し。葉は冬青の如く、花は橘の如く、朶は葡萄の如く、核は枇杷の如く、殼は紅繪の

如く、膜は紫絹の如く、肉白きこと肪の如し。二、三月に花さき、五、六月に實る。其の根浮けば必ず漬く糞土を加へ以て之を培ふべし。性は寒に耐へず、最も培植に難く、纔に繁霜を経れば、枝葉枯死し、春二、三月に遇へば、再び新葉を發す。初めて種ゑてより五、六年、冬月は之を覆蓋し、以て霜雪より護る。之を種ゑて四、五十年、始めて花を開き實を結ぶ。其の木は堅固にして、四百餘年を経て、猶ほ能く實を結ぶ者有り。【荔枝を曬す法】採下すれば即ち竹籬を用て朗曬し、数日を経て、色変り核乾けば、火を用て之を焙り、核の十分乾硬なるを以て度と為す。【收藏】竹籠を用て、箬葉もて之を裹み、以て遠を致す可し。朶を成して曬乾せし者を、名づけて荔錦と為す。其の肉を取り、生もて蜜を以て熬して煎と作し、之を嚼めば糖霜の如く然り。名づけて荔煎と為す。此の果若し本枝を離るれば、一日にして色変じ、二日にして香変じ、三日にして味変じ、四日、五日の外、色・香・味盡く皆な去る。

【現代語訳】

荔枝(レイシ)、一名は丹荔枝。嶺南・巴蜀・閩・泉・漳・興化府および広東・西に生える。その品質は閩を最上とし、蜀川がこれに次ぎ、嶺南は下とする。樹形はまん丸で帷蓋(車を覆う幕)のようである。葉は冬青(モチノキ)の如く、花は橘の如く、花の塊は葡萄の如く、種子は枇杷の如く、殻は紅繒(=紅色のきぬ)の如く、薄皮は紫絹(=紫色の生絹)の如く、肉の白いことは肪(あぶら)の如くである。二、三月に花が開き、五、六月に実がなる。その根が浮いたら必ず糞土を加えて之を培うべきである。その性質は寒に耐えられず、最も栽培が困難で、ちょっとでもひどい霜にあたると、枝葉は枯れてしまう。春の二、三月になると、再び新葉を出す。初めて植えてから五、六年は、冬の月には覆いをかぶせ、霜・雪から保護する。これを植えて四、五十年、始めて花を開き実を結ぶ。その木質は堅固で、四百余年経っても、なお実のできるものがある。

【荔枝を乾燥する方法】採取したらすぐに竹箎で乾かし、数日経って色が変り種子が乾いたら、火で焙る。種子が十分乾いて硬くなるのを目安にする。

【收藏法】竹籠を使い、クマザサの葉(あるいは竹の皮)で包めば、遠くまで運ぶことができる。塊状に乾燥させたものを荔錦とよぶ。その肉を取って、生のまま蜜で煮詰めて煎じ、これを嚼むと粉砂糖のようである。これを荔煎とよぶ。この果物は、もとの枝を離れると、一日で色が変わり、二日で香りが変わり、三日で味が変わり、四日、五日以上になれば、色・香り・味のすべてがなくなる。

⑫【龍眼】

【原文】

花與荔枝同開、樹亦如荔枝。但枝葉稍小、殼青黄色、形如彈丸。[丸]核如木椀子、而不堅、肉〔白〕而帶漿。其甘如蜜。熟於八月、白露後方可採摘。一朶五六十顆、作一穗。荔枝過即龍眼熟。故謂之荔枝奴。比荔枝特罕。木性畏寒。北方〔亦無此種、今充歲貢焉〕。【曬龍眼法】採下、用梅滷浸一宿。取出曬乾、用火焙之。以核乾硬為度、如荔枝法。收藏之。成朶乾者名龍眼錦。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之七 果属・龍眼

龍眼、花與荔枝同開、樹亦如荔枝。但枝葉稍小。殼青黄色、形如彈丸、核如木椀子、而不堅。肉白而帶漿、其甘如蜜。熟於八月、白露後、方可採摘。一朶五六十顆、作一穗。荔枝過即龍眼熟、故謂之荔枝奴。福州・興化・泉州有之、比荔枝特罕。木性畏寒。北方亦無此種、今充歲貢焉。【曬龍眼法】採下、用梅滷浸一宿、取出曬乾、用火焙之、以核乾硬為度、如荔枝法。收藏之。成朶乾者名龍眼錦。

【訓読】

花は荔枝と同(とも)に開き、樹も亦た荔枝の如し。但だ枝葉稍や小さく、殻は青黄色にして、形は彈丸の如く、核は木椀子の如くして堅からず。肉は白くして漿を帯ぶ。其の甘きこと蜜の如し。八月に熟し、白露の後、方めて採摘す可し。一朵五六十顆、一穗と作す。荔枝過ぐれば即ち龍眼熟す、故に之を荔枝奴と謂ふ。荔枝に比して特に罕し。木性は寒を畏る。北方に〔此の種無く、今歳貢に充つ〕。【曬龍眼法】採下し、梅滷を用て浸すこと一宿。取り出だして曬乾し、火を用て之を焙り、核の乾硬なるを以て度と為すは荔枝の法の如し。之を收藏す。朶を成して乾きし者を龍眼錦と名づく。

【現代語訳】

龍眼(リュウガン)の花は荔枝と同時に開き、樹も亦た荔枝に似ている。ただ枝・葉がやや小さく、〔実の〕殻は青黄色で、形は彈丸のようである。種子は木椀子(1)に似ているが堅くはなく、肉は白くて果汁を持っている。その甘さは蜜のようである。八月に熟し、白露の後になって、はじめて採集できる。一朵(ふさ)に五、六十個あり、これを一穗とする。荔枝の時期が過ぎると龍眼が熟すので、これを荔枝奴と謂う。荔枝に比べて特に少ない。木の性は寒を畏れる。北方にはこの種の果樹がなく、今は歳貢に充てている。

【干し龍眼の作り方】採集したら、梅酢に一晩浸す。取り出して陽に当てて乾かし、火で焙る。種子が乾燥して硬くなるのを目安とするのは荔枝の乾燥法と同じ。これを收藏する。房になった実を乾かしたものを龍眼錦と名づける。

【注】

(1)「木椀子」繆『王氏訳注』によれば、木患子とも書き、「無患子」であるとする。そうであれば、和名は「むくろじ」。種子は羽根つきの羽根に使う黒い実である。

⑬【橄欖】

【原文】

生嶺南及閩廣諸郡。性畏寒、江浙難種。樹大數圍、實長寸許、形如訶子而無稜瓣。其子先生者向下、後生者漸高。有野生者、樹峻、不可梯緣。但刻其根方寸許、納〔内〕塩於内〔其中〕、一夕即〔子皆自〕落。蜜藏極甜。生啖〔噉〕及煑食、并〔並〕皆消酒、解諸毒。人誤食鯪鱈〔鮠〕魚肝、迷悶欲死者、飲其汁立解。以其木柁〔作〕舟楫、撥着〔著〕魚、皆浮出。物之相〔畏〕如此。其果味苦酸而澁、食久、味方回甘。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之八 果属・橄欖

生嶺南及閩廣諸郡。性畏寒、江浙難種。樹大數圍、實長寸許、形如訶子而無稜瓣。其子先生者向下、後生者漸高。有野生者、樹峻、不可梯緣。但刻其根方寸許、内鹽於其中、一夕子皆自落(一)。蜜藏極甜、生啖及煑食之、並消酒、解諸毒。誤食鯪鱈魚肝、迷悶欲死者、飲其汁、立解。以其木作楫、撥著魚、皆浮出。物之相畏、有如此者。……其味苦酸而澁、食久、味方回甘。故昔人名爲諫果。

(一)『種藝必用』

物類相感志云、……野生者樹極高、不可攀援。但刻其根下方寸許、納鹽於刻痕中、其子皆自落。

【訓読】

嶺南及び閩・廣諸郡に生ず。性は寒を畏れ、江浙は種ゑ難し。樹の大いさは数圍にして、實の長さは寸許り、形は訶子の如くして稜瓣無し。其の子の先に生ずる者は下に向き、後に生ずる者は漸く高し。野生の者有りて、樹は峻(たか)く、梯もて縁(のぼ)る可からず。但だ其の根に刻むこと方寸許り、塩を其の中に内るれば、一夕にして子皆な自ら落つ。蜜もて藏すれば極めて甜し。生もて啖ひ及び煑食すれば、並びに皆な酒を消し、諸毒を解く。人

誤りて鯪鮓(イ)魚の肝を食らひ、迷悶して死せんと欲する者、其の汁を飲めば立ちどころに解く。其の木を以て舟の楫を作り、魚を撥着すれば、皆な浮き出づ。物の相ひ畏ること此くの如し。其の果味は苦酸にして澁く、食らふこと久しければ、味方めて甘きに回す。〔故に昔人名づけて「諫果」と爲す〕。

【現代語訳】

橄欖(カンラン)は嶺南および閩・広の諸郡に生える。性は寒を畏れ、江浙では栽培しがたい。樹の太さは数圍あり、実の長さは一寸ばかりで、形は訶子(カリロク=訶梨(黎)勒)の実のようだが稜瓣(=山脈状の突起)がない。その実の先に生じるものは下に向き、後に生じるものは次第に高くなる。野生のものもあり、樹は峻(たか)くて、梯で登ることができない。ただその根元の一寸四方ばかりを削り、そのなかに塩を入れると、一晩で実が自然に落ちる。これを蜜に漬けておけば極めて甜くなる。生食あるいは煮食すれば、みな酒を消し、諸毒を解く。人が誤って鯪鮓魚(フク)の肝を食べ、朦朧として死にそうになったら、その汁を飲ませればたちまち毒が解ける。その木で舟の楫を作り、魚(が)いる水?をはじくと、みな浮きあがってくる。物が畏れあうことこのようである。その果実の味は苦く酸っぱく、また澁いが、長く食べていると味は甘く変わる。〔故に昔の人はこれを名づけて「諫果」とした。〕

⑭【餘甘】

【原文】

亦橄欖類、推〔惟〕泉州有之。乃深山窮谷自生之物、非人家所種。其樹稍高、其子梭形、又如梅實、兩頭尖〔銳〕。始嚼味酸澁、飲水乃甘。九月採摘、比之橄欖、酷相似。以蜜藏之亦佳。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之八 果属・橄欖(餘甘子附)

亦橄欖類、惟泉州有之。乃深山窮谷自生之物、非人家所種。其樹稍高、其子梭形、又如梅實、兩頭尖。始嚼、味酸澁、飲水乃甘。九月採、比之橄欖、酷相似。以蜜藏之亦佳。

【訓読】

亦た橄欖の類。惟だ泉州のみ之れ有り。乃ち深山・窮谷自生の物にして、人家の種うる所に非ず。其の樹は稍や高く、其の子は梭の形、又た梅の實の如く、兩頭鋭し。始めて嚼めば味は酸っぱく澁きも、水を飲めば乃ち甘し。九月に採摘す。之を橄欖に比ぶれば、酷く相ひ似たり。蜜を以て之れを藏するも亦た佳し。

【現代語訳】

餘甘もまた橄欖の類であるが、ただ泉州にのみ生える。そうして深山・窮谷に自生する植物で、人家が栽培したものではない。その樹はやや高く、その実は梭の形をしており、また梅の実のように両端が尖っている。始めて噛んだときは味が酸っぱく渋いけれども、水を飲むと甘くなる。九月に収穫する。これを橄欖に比べると、たがいに酷似している。蜜に漬けて貯蔵するのもまた佳い。

⑮【石榴】

【原文】

一名若榴、一名丹若。張騫使西域、得塗林安石榴。今稱為海榴。阿〔河〕陰者最佳。榴實有二種、其子一紅如瑪瑙、一白如水晶。花不出於紅黃、味不出乎甘酸。甘者可餐、多食亦損肺。道家謂之三尸酒。夏則花實、待秋後摘之、以充盤果、多則可鬻。【藏榴法】取其實有稜角者、用熱湯微泡、置之新甕瓶中、久而不損。若圓者則不可留。留亦壞爛。北人以榴子作汁、加蜜為飲漿、以代杯茗。甘酸之味、亦可取焉。

【出典および参考史料】

全文『王禎』百穀譜集之八 果属・石榴

一名若榴、一名丹若。舊不著所出州土、陸機云、張騫使西域、得塗林安石榴種(一)。今人稱爲海榴、……中原河陰者最佳。榴實有二種、其子一紅如瑪瑙、一白如水晶。……然花不出於紅黃、味不出乎甘酸爾。甘者可餐、多食亦損肺、道家謂之三尸酒、……夏則花實、秋後則摘以充盤果、多則可鬻。藏榴之法。取其實之有稜角者、用熱湯微泡、置之新磁瓶中、久而不損。若圓者則不可留。留亦壞爛。……北人以榴子作汁、加蜜爲飲漿、以代盃茗、甘酸之味、亦可取焉。

(一)『太平御覽』卷九七〇 晋・陸機「與弟雲書」

張騫爲漢使外國十八年、得塗林安石榴也。

【訓読】

一名は若榴、一名は丹若なり。張騫西域に使ひし、塗林安石榴を得。今稱して海榴と爲す。河陰の者最も佳し。榴の実に二種有り、其の子一は紅にして瑪瑙の如く、一は白にして水晶の如し。花は紅黄より出でず、味は甘酸より出でざらん。甘き者は餐(く)らふ可きも、多く食らへば亦た肺を損ふ。道家は之れを三尸酒と謂ふ。夏は則ち花さきて實り、秋後を待ちて之れを摘み、以て盤果に充て、多ければ則ち鬻ぐ可し。【榴を藏するの法】其の實の稜角有る者を取り、熱湯の微泡あるを用ゐ、之れを新しき甕瓶中に置けば、久しかれども損はれず。圓の若き者は則ち留む可からず。留むるも亦た壞爛す。北人は榴子を以て汁を作り、蜜を加へて飲漿と爲し、以て杯茗に代ふ。甘酸の味、亦た取る可し。

【現代語訳】

石榴(ザクロ)は一名若榴で、一名は丹若である。張騫が西域に使いしたとき、塗林安石榴を手に入れた。今は海榴と称している。河陰県(河南)産のものが最も佳い。石榴の実には二種類あり、その種子の一は紅色で瑪瑙のようであり、一は白色で水晶のようである。花は紅黄色にほかならず、味はまさに甘酸っぱい。甘いものは食べられるが、多く食べればまた肺を損う。道家はこれを「三尸酒」(1)と謂う。夏には花が咲いて実がなり、秋が過ぎてから摘んで盛物とし、多ければ売ることができる。

【石榴を貯蔵する方法】その実稜(かど)があるものを選び、熱湯に少し漬け、これを新しい甕の中に入れておけば時間が経っても傷まない。まん丸いものは留めておけない。留めておいても腐ってしまう。北方の人は石榴の種子でジュースを作り、蜜を加えて飲料とし、お茶の代わりとする。甘酸っぱい味はなかなかのものである。

【注】

(1)「三尸」は人の体内にいる三種の虫。庚申の夜に人の悪事を天帝に告げるといふ。

⑩【木瓜】

【原文】

爾雅曰楸、葉似柰、實如小歛瓜、上黃、似着〔著〕粉。酢可食。宣城者佳種、將種謹。始實則簇紙花、泊〔薄〕其上。夜露日曝、而變紅、花〔文〕如生。故有宣州花木瓜之稱。木瓜種子及栽皆得、壓枝亦生、栽種与桃李同法。秋社前後移栽、至次年、率多結實、勝春栽者。凡食啖勿誤取【和圓子】。其色様外形直〔眞〕似木瓜、則微黃、蒂粗子小圓、味澁微酸、傷人氣、不可〔不〕辨。但木瓜皮薄、微赤黃、香甜、酸而不澁。向裏子頭尖、一面方。此物入肝、益筋興〔與〕血、病腰腎脚膝者、入菓絶有功效。以蜜漬之、亦堪〔甚〕益人。

【出典および参考史料】

全文『王禎』百穀譜集之八 果属・木瓜

爾雅曰楸、注曰、實如小瓜、酢可食。……疏義曰、楸、葉似柰、實如小瓢、瓜上黃似著粉、……宣城者佳。

宣城人種蒔最謹。始實則簇紙花薄其上、夜露日曝、漸而變紅、花文如生。本州以充土貢、故有宣城花木瓜之稱。木瓜種子及栽皆得、壓枝亦生、栽種與桃李同法(一)。秋社前後移栽、至次年、率多結實、勝春栽者。凡食啖勿誤取和圓子。其色様外形、眞似木瓜、但木瓜皮薄、微赤黃、香甘、酸而不澁、向裏子頭尖、一面方。若和圓子則微黃、蒂龕子小圓、味澁微酸、傷人氣、不可不辨。此物入肝、益筋與血、入藥絕有功、病腰腎脚膝者、服食不宜闕。以蜜漬食、亦甚益人。……

(一)『分門瑣碎錄』種植雜法 『種藝必用』同文

木瓜、種子及栽皆得、壓枝亦生。栽種與桃李同。

『重修政和經史證類備用本草』卷二三果部中品・木瓜所引『本草圖經』

……今處處有之、而宣城者爲佳。其木狀若柰。……宣州人種蒔最謹。遍滿山谷。始實成則●紙花、薄其上、夜露日暴、漸而變紅、花文如生。……

【訓読】

爾雅に楸(ボウ)と曰ふ。葉は柰に似て、實は小鞞瓜の如く、上は黄にして、粉を著するに似たり。酢きも食らふ可し。宣城の者佳き種にして、將(もつ)て種うるに謹しむ。始めて實れば則ち紙花を簇(あつ)め、其の上に薄くす。夜は露にあて日に曝し、而して紅に変ずれば、花文の生ずるが如し。故に宣州花木瓜の稱有り。木瓜は種子及び栽皆に得、壓枝するも亦た生ず。栽種は桃李と同法なり。秋社前後に移栽し、次年に至れば、率ね多く結實し、春栽の者に勝る。凡そ食啖するに、誤りて【和圓子】を取る勿れ。其の色様と外形は眞に木瓜に似たり。則ち微黄にして、蒂は粗、子は小圓、味は澁く微や酸し。人の氣を傷つくれば、辨ぜざる可からず。但だ木瓜の皮は薄く、微や赤黄にして、香り甘(うま)く、酸しかれど澁からず。向裏の子は頭尖り、一面方なり。此の物肝に入れば、筋と血に益あり、腰・腎・脚・膝を病む者、薬に入れば絶して功效有り。蜜を以て之れを漬け、亦た甚だ人に益あり。

【現代語訳】

木瓜(ぼけ)は『爾雅』では「楸」という。葉は柰に似ており、果実は小瓜のようで、表面は黄色で粉を吹いているようである。酢っぱいけれど食べられる(1)。宣州のものは良い品種で、[宣州の人が]栽培するときは慎重にする。始めて実が成ったら、紙花を集め、その上に薄く敷く。夜は露にあて、昼は陽に晒し、そうして紅色になったら、自然の花の文様のようになる。故に「宣州花木瓜」の名称がある。木瓜は実生法と株分け法(2)のどちらでもよく、取り木法でも生える。実生と株分けの方法は桃・李と同じである。秋の社日の前後に移植すると、翌年にはおおむね多くが実を結び、春に挿し木したものに勝る。

およそ食用とするとき、誤って「和圓子」という木瓜の種類を取ってきてはいけない。その色と外形は本当に木瓜に似ている。つまり、やや黄色で、蒂は粗大で、種子は小円形、味は澁くやや酸っぱい。これは人の氣を損なうので区別せねばならない。ただ木瓜の皮は薄く、やや赤黄色で、香りがよく、酸っぱいけれども澁くはない。内向き(?)の種子は先端が尖り、一方は四角い。この物が肝に入ると筋と血に益効があり、腰・腎・脚・膝を病んでいる人が薬用にするときわめて効果がある。これを蜜に漬けておくと、たいへん人に益効がある。

【注】

本条の全体にわたってよく理解できない語句があるが、繆『王氏訳注』の解釈を参考にして訳している。たとえば「似着粉」「簇紙花、泊其上」「向裏子」などである。

(1)西山・熊代『譯註』では「酢にして食べられる」とするが、繆『王氏訳注』は「味酢、可以吃」とする。これに従う。

(2)西山・熊代『譯註』は「栽」に「かぶわけ」というルビを振っている。これに従う。

⑰【銀杏】

【原文】

以其實之曰〔白〕故名。一名鴨脚、取葉之似。又名白果。其木多歷歲年〔年歲〕、其木〔大〕或至連抱、可作棟梁。其樹亦有雌雄、雌者結果、其實亦有雌雄之異、種時雖〔須〕合種之。臨池而種、照影成實。春分前後移栽、先掘深坑、水〔才+澆〕成稀泥、然後下栽子。掘取時、運土封用草要〔包〕、或麻繩纏束、則不致碎破土封。其子至秋而熟。初收時、小兒不宜食。ヒ則昏霍。惟炮煮作榧〔顆〕食為美。以澣油甚良。顆如綠李、積如腐之、惟取其核、即銀杏也。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之八 果属・銀杏

以其實之白故名。一名鴨脚、取葉之似。又名白果。其木多歷年歲、其大或至連抱、可作棟梁。其樹有雌雄、雌者結果、其實亦有雌雄之異、種時須合種之、臨池而種、照影成實(一)。春分前後移栽。先掘深坑、水攪成稀泥、然後下栽子。掘取時、運土封用草包、或麻繩纏束、則不致碎破土封。其子至秋而熟。初收時、小兒不宜食、食則昏霍。惟炮煮作顆食為美、以澣油甚良。顆如綠李、積如腐之、惟取其核、即銀杏也。

(一)『種藝必用』

銀杏樹有雌雄、雄者有三稜、雌者有二稜。合二者種之。或在池邊、能結子而茂。蓋臨池照影亦生也。

『山居四要』(後掲)卷之四 治生之要・種花果蔬菜法

銀杏、須以雌雄合種則結實(雌者二稜、雄者三稜)。

【訓読】

其の實の白きが故を以て名づく。一名は鴨脚、葉の似たるを取る。又の名は白果。其の木多く年歳を歴れば、其の大なること或いは連抱に至り、棟・梁を作る可し。其の樹雌雄有り、雌なる者は果を結び、其の實も亦た雌雄の異有り。種うるの時、須く之れを合種すべし。池に臨みて種うれば、影を照(うつ)して實を成す。春分前後に移栽す。先ず深坑を掘り、水もて攪して稀泥と成し、然る後に栽子を下す。掘り取る時、土を運びて封じ、草を用って包み、或いは麻繩もて纏束すれば、則ち土封を碎破するを致さず。其の子秋に至りて熟す。初めて收むる時、小兒は宜しく食らふべからず。食らへば則ち昏霍せん。惟だ炮煮して顆と作して食らへば美と為す。以て油を澣(あら)ふは甚だ良し。顆は緑李の如きも、積みて之れを腐らせ、惟だ其の核のみを取るが如くすれば、即ち銀杏なり。

【現代語訳】

銀杏(イチョウ)はその実が白いのでこう名付けられた。一名は鴨脚で、葉の形が似ているところを取ったのである。またの名は白果。その木は長い年月を経れば、幾抱えもの大きさになることがあり、〔家の〕棟や梁とすることができ。その樹には雌・雄があり、雌は果実をつけるが、その果実にもまた雌雄の別がある。播種するときこれらを合わせて播くべきである。池に臨むところに播くと、その影を写して果実をつける。春分前後に移植する。まず深い坑(あな)を掘り、水を入れて攪拌して薄い泥とし、その後に苗を入れる。掘り取る時は、土を運んできて封じ、草で包み、あるいは麻繩でぐるぐる巻きにすれば、封土を破ることはない。その実は秋になって熟す。初めて収穫した時、児童が食べてはいけない。食べれば急にめまいがする。ただ焙じたり、煮たりするとおいしい。それを使って油を洗浄すればたいへん効果がある。果樹は緑色の〔若い?〕李に似ているが、集めて腐らせ、その核だけを取るようにすれば、それがつまり銀杏(ギンナン)なのである。

⑱【橘】

【原文】

在處有之。樹高丈許、刺生莖間。夏初開白花、至冬、實黃。大曰柚、小曰橘。有數種、有綠橘、紅橘、黃橘、蜜

橘、金橘、而洞庭橘為勝。種子〔植〕之法、種子及栽皆可。以枳樹截接或掇栽、猶易成。但宜惟於肥地種之。冬收實後、須以火糞培壅、則明年花實俱茂。乾旱宜以米泔灌溉、則實不損落。惟皮與核堪入藥用、皮陳最良。又宜作食料。其肉味甘酸、食之多痰、不益人。以蜜煎之為煎則佳。食〔有續文〕

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之八 果属・橘

橘生南山山谷、及江浙荆襄皆有之。木高可丈許、刺出莖間。夏初生白花、至冬、實黃。禹貢……注云、大曰柚、小曰橘。……橘有數種、有綠橘、有紅橘、有蜜橘、有金橘、而洞庭橘為勝、今充土貢。種植之法、種子及栽皆可、枳樹截接或掇栽、尤易成。但宜於肥地種之。冬收實後、須以火糞培壅、則明年花實俱茂。乾旱時以米泔灌溉、則實不損落。惟皮與核堪入藥用、皮之陳者最良。又宜作食料。其肉味甘酸、食之多痰、不益人。以蜜煎之為煎則佳。食貨志云、……

【訓読】

在處に之れ有り。樹高は丈許りにして、刺莖間に生ず。夏の初め白花を開き、冬に至れば、實は黄たり。大は柚と曰ひ、小は橘と曰ふ。數種有り、綠橘、紅橘、黄橘、蜜橘、金橘有りて、洞庭の橘勝ると為す。種植の法は、種子及び栽皆に可なり。枳樹を以て截接し或いは掇栽すれば、猶ほ成り易きがごとし。但だ宜しく惟だ肥地にのみ之れを種うべし。冬實を收めし後、須く火糞を以て培壅すれば、則ち明年花・實俱に茂る。乾旱のときは宜しく米泔を以て灌溉すれば、則ち實は損落せず。惟だ皮と核のみ藥用に入るに堪へ、皮陳(ふる)ければ最も良し。又た宜しく食料と作(な)すべし。其の肉味は甘酸にして、之れを食らへば痰多く、人に益あらず。蜜を以て之を煎じ煎と為せば則ち佳し。

【現代語訳】

橘〔=キンカンのような小型の柑橘類〕は各地にある。樹高は一丈ばかりで、刺(とげ)が茎に生えている。夏の初めに白い花を開き、冬になると、実が黄色になる。大きいものは柚といい、小さいものは橘という。〔橘には〕數種類あり、綠橘、紅橘、黄橘、蜜橘、金橘などがあつて、洞庭〔=蘇州府太湖上の島〕の橘が優れているとする。繁殖法は、実生法および株分けともに可能である。枳(からたち)に接ぎ木し、あるいは掇栽〔未詳〕すれば成長しやすいようだ。ただし肥沃な畑にのみ栽培すべきである。冬に実を収穫した後、必ず火糞(1)を施せば、翌年は花・実ともに盛んになる。日照りの時は米のとき汁をかけるのがよく、そうすれば実が落ちない。ただ皮と種子のみが藥用に用いることができ、皮は古いのが最も良い。さらに食料とするのに適している。その味は甘酸っぱく、食べると痰が多くなり、人に益効がない。蜜でこれを煮て「煎」(2)にすればよくなる。

【注】

(1)「火糞」 『王禎』農桑通訣集・糞壤篇では土と草木を焼いて作る肥料であるとする。しかし『陳勇』にはその製造法が詳しく述べられており、人糞も加えることなどから、堆肥つまり発酵肥料であると考えられる(拙著『陳勇農書の研究』54頁～)。

(2)「煎」 ⑳橙の項目に「煎」の作り方が述べられている。それによれば蜜と塩で煮るといふ。

⑲【柑】

【原文】

甘也。橘之甘也。樹莖葉無異於橘、但無刺為異耳。種植與橘同法。〔生〕唐鄧間、而泥山者名乳柑。其大倍常、皮薄味珍。〔有〕海紅柑、有衢柑、雖品不同、而温台柑最良。

【出典および参考史料】

全文『王禎』百穀譜集之八 果属・橘

柑、甘也、橘之甘者也。莖葉無異於橘、但無刺爲異耳。種植與橘同法。生江漢唐鄧間、而泥山者名乳柑。地不彌一里所、其柑大倍常、皮薄味珍、……有海紅柑、有衢柑、雖品不同、而温台之柑最良、歲充土貢焉。

【訓読】

甘なり。橘の甘きものなり。樹・莖・葉は橘に異なる無く、但だ刺無きを異なると為すのみ。種植は橘と同法。唐・鄧の間に生じ、而して泥山の者は乳柑と名付く。其の大きいさ常に倍し、皮は薄く味は珍なり。海紅柑有り、衢柑有り、品同じからずと雖も、而れども温・台の柑最も良し。

【現代語訳】

柑(=ミカンのような大型の柑橘類)は甘に通じ、橘の甘きものである。樹形・莖・葉は橘と異なることなく、ただ刺がないのが異なるところとするのみである。栽培法は橘と同じ。唐・鄧州のあたりに生えていて、泥山の産は乳柑と名付ける。その大きさは普通のもの倍で、皮は薄く珍味である。海紅柑というものがあり、衢柑というものがある。品種は同じではないけれども、温・台州の柑が最も良い。

⑳【橙】

【原文】

似橘樹而有刺、葉大而形圓、大於橘、皮甚香、厚而皺(一)、其瓠味酸、不堪食。以蘄〔瓠〕洗滌去酸汁、細切小片、蜜煎亦佳(二)。以白糖煎之、曬乾即成橙釘、切絲白糖煎為橙絲。取橙皮合湯、香味殊美。栽植無異於橘、其香似橘。

【出典および参考史料】

(一)『重修經史證類備用本草』卷二三 果部橙子

又以瓠洗去酸汁、細切和鹽蜜煎成煎、食之去胃中浮風。其樹亦似橘樹而香、皮厚而皺。

(二)『王禎』百穀譜集之八 果属・橙

似橘樹而有刺、葉大而形圓、大於橘、皮甚香、厚而皺、其瓠味酸、不堪食(原注:以瓠洗去酸汁、細切、蜜鹽煎成煎、食之亦佳)。

【訓読】

橘樹に似て刺有り、葉は大にして形は圓く、橘より大。皮甚だ香り、厚くして皺あり。其の瓠の味は酸にして、食らふに堪へず。瓠を以て洗滌し酸汁を去り、小片に細切し、蜜もて煎じるも亦た佳し。白糖を以て之れを煎じ、曬乾すれば即ち橙釘と成り、絲に切りて白糖もて煎じれば橙絲と為す。橙皮を取りて湯に合すれば、香味殊に美なり。栽植は橘に異なる無く、其の香は橘に似たり。

【現代語訳】

橙は橘に似て刺があり、葉は大きく形は圓く、橘よりも大きい。皮はたいへん香りがよく、厚くて皺がある。その中の房は味がすっぱく、食べられない。房を洗い去り酸っぱい汁を除き、小片に細く切り、蜜で煮ればまたうまい。白糖で煮て、乾燥させると「橙釘(テイ)」となり、織切りにして白糖で煮れば「橙絲」となる。橙の皮を取って湯に入れば、香味は殊によい。繁殖法は橘と異なることなく、その香りは橘に似ている。

㉑【榧子】

【原文】

小梨也。爾雅曰、榧似梨而酢澁。〔榧〕榧大而黄、可進酒去痰。〔榧子〕澁、断痢。榧殊〔味〕比梨與木瓜雖為稍

劣、而以之入蜜作湯煎、則香美過之、亦可珍也。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之八 果属・榲子

梨之小者。爾雅云、榲似梨而酢澁。陶隱居注本草木瓜條乃云、……又有榲榲、大而黃、可進酒去痰。榲子澁、斷痢。……然榲味比之梨與木瓜雖爲稍劣、而以之入蜜作湯煎、則香美過之、亦可珍也。

『重修政和經史證類備用本草』卷二三果部中品・木瓜所引『本草圖經』

又有一種榲榲、木葉花實、酷類木瓜。陶云、大而黃、可進酒去痰者是也。

【訓読】

小梨なり。爾雅に曰く、榲は梨に似るも酢く澁し。榲榲は大にして黄、酒を進め痰を去る可し。榲子は澁く、痢を断つ。榲の味は梨と木瓜に比して稍や劣ると為すと雖も、而れども之を以て蜜に入れ湯・煎と作せば、則ち香り美(よ)きこと之に過ぎ、亦た珍とす可きなり。

【現代語訳】

榲子(くさぼけ・こぼけ・しどみ)は小梨である。爾雅にいう。「榲は梨に似ているが酢っぱくて渋い」と。榲榲(かりん・花梨)は大きくて黄色で、酒が進み痰を取り去ることができる。榲子は渋く、下痢を止める。榲の味は梨と木瓜に比べてやや劣るというけれども、これを蜜に入れてスープや煎にすると香りの良さはこれをしのぎ、また珍重すべきである。

【注】

「榲子」「榲榲」について、繆『王氏訳注』は次のように説明する。「榲子」はバラ科の一種で、木瓜とは同属であるが、梨とは同科異種で「小さい梨」ではない。「榲榲」はバラ科の一種で、木瓜よりも大きい。

②【竹】

【原文】

種宜高平之地、黄白軟土為良。正月二月中、斲取林外向陽者、西南引根并莖、芟去葉於園内東北角、必用兩〔雨〕下、遇火日及有西風則不可種之。令坑深二尺許、作泥於坑中、下竹栽之、覆土、厚五寸、土〔杵〕築定、勿令脚踏。竹性愛向西南、故於園東北角種之。以乾馬糞・稻麥糠糞之、不用水澆。ヒ則淹死。勿令六畜入園。三月食淡竹筍、四●●〔五月〕食苦〔竹〕筍。欲作器、研經年者。移竹多用●〔辰〕日及臘月、餘月則不活。五月十三日謂竹醉日、又云竹迷日。栽竹則茂盛。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之九 竹木・竹

種竹宜高平之地、黄白軟土爲良。正月二月中、斲取西南引根并莖、芟去葉、於園内東北角種之。令坑深二尺許、覆土厚五寸(原注:竹性愛向西南、故於園東北角種之、數歲之後、自當滿園。……)。稻麥糠糞之、不用水澆(原注:澆則淹死)、勿令六畜入園。三月食淡竹筍、四月五月食苦竹筍。其欲作器者、經年乃堪殺。移竹多用辰日、又用臘月、非此時移栽則不活。五月十三日謂竹醉日、又謂之竹迷日、栽竹則茂盛。種竹宜去梢葉、作稀泥於坑中、下竹栽、以土覆之、杵築定、勿令脚踏、土厚五寸、……月庵種竹法、深闊掘溝、以乾馬糞和細泥填高一尺、……夢溪云、種竹但林外取向陽者、向北而栽。蓋根無不向南、必用雨下、遇火日及有西風則不可、

【訓読】

種うるに高平の地に宜しく、黄白の軟土を良と為す。正月、二月中、林外の陽に向く者の西南の引根並びに莖を斲取し、葉を芟去し、園内の東北角に於いて、必ず雨下を用う。火日及び西風有るに遇へば則ち之れを種う可か

らず。坑の深さ二尺許りとせ令め、泥を坑中に作り、竹を下して之れに栽へ、土を覆ふこと厚さ五寸とす。土は杵もて築定し、脚もて踏ま令むる勿れ。竹の性は西南に向くを愛す。故に園の東北角に之れを種う。乾馬糞・稲麥糠を以て之れに糞(こや)し、水を用って澆がざれ。澆がば則ち淹死せん。六畜をして園に入ら令む勿れ。三月、淡竹筍を食らひ、四、五月、苦竹筍を食らふ。器を作らんと欲さば、經年の者を研く。竹を移すに多く辰日及び臘月を用ゐ、餘月は則ち活さず。五月十三日を竹酔日と謂ひ、又た竹迷日と云ふ。竹を栽うれば則ち茂盛す。

【現代語訳】

竹を栽培するには高平の地が適しており、黄白色の軟土を良しとする。正月、二月中、竹林の外にあって陽に向いている株の、西南に伸びた根(=地下茎)と茎を掘り取り、葉を刈り取り、竹園内の東北角で、必ず雨上がりを選ぶ。火の日(=丙・丁の日)および西風がある日に植えてはいけない。坑の深さは二尺ばかりとさせ、坑中に泥を作り、竹を下して植えこみ、覆土は厚さ五寸とする。土は杵で築き固め、脚で踏ませてはいけない。竹の性は西南に向くのを好む。それゆえ竹園の東北角に植える。乾馬糞・稲麦の糠を肥料とし、水はかけてはいけない。水をかけると枯れる。家畜を竹園に入らせてはいけない。三月に淡竹(はちく)の筍を食べ、四、五月に苦竹(まだけ)の筍を食べる。器を作りたければ、年を経たものを磨く。竹を移植するには多く辰の日および臘月を選ぶが、他の月には根付かない。五月十三日を「竹酔日」といい、また「竹迷日」という。この日に竹を植えれば繁茂する。

③【松】

【原文】

栽松。春社前帶上[土]栽培、百株百活。捨[舍]此、決不活也。斫松木、湏用五更初。便削去皮、則无白蟻。血忌日猶好。【挿杉】用驚蟄前後五日、斬新枝、斲阨入枝、下泥杵緊、相視天陰即挿、遇雨十分生。

【出典および参考史料】

全文 『玉禎』百穀譜集之九 竹木・松

栽松。春社前帶上栽培、百株百活。舍此時、決無生理也。斫松木、湏用五更初、便削去皮、則無白蟻。血忌日尤好。【挿杉】用驚蟄前後五日、斬新枝、斲阨入枝、下泥杵緊。相視天陰即挿、遇雨十分生。

【訓読】

松を栽う。春社の前に土を帯して栽培すれば、百株百活なり。此れを舍(お)けば、決して活さざるなり。松の木を斫るは、湏く五更初を用ってすべし。便ち皮を削去すれば、則ち白蟻无からん。血忌日は猶ほ好し。【杉を挿す】驚蟄前後五日を用ってし、新しい枝を斬り、阨を斲(ほ)りて枝を入れ、泥を下して杵もて緊(し)む。天陰を相視すれば即ち挿す。雨に遇わば十分生ず。

【現代語訳】

松を株分けする。春社の前に土をつけて株分けすれば、百株百活(=植えたものはすべて根付く)である。この時を逃せば決して根付かない。松の木を切る場合は、必ず五更の初めにおこなわねばならない。そのとき皮を削り取れば白蟻がつかない。血忌日(=生贄を殺さなかった日)ならばなお好い。

【杉を挿し木する】啓蟄の前後五日間におこない、新しい枝を斬り、穴を掘って枝を入れ、泥を入れて杵で固く締める。曇天を窺って挿し木する。雨に遇えば十分に根付く。

④【種松柏法】

【原文】

八、九月中、擇成熟松子、栢子、去臺收頓。至來春二分時、甜水浸、十日。治畦、下水、土[上]糞、漫撒子於畦

内、如種菜法。覆土厚二指。畦上搭短〔矮〕棚蔽日、旱則頓澆、常宜濕潤。秋後去棚。其棚〔以上二字疑衍字〕長高四、五寸、十月、夾葛楷籬、以禦北風。畦内亂撒麥糠覆樹、令稍〔梢〕上厚二、三寸。至穀雨前後、手爬去麥糠、澆之。次冬封蓋亦如此。二年後、三月中帶土移栽。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之九 竹木・松

八、九月中、擇成熟松子(原注:栢子同)、去臺收頓。至來春春分時、甜水浸子、十日、治畦、下水、上糞、漫撒子於畦内、如種菜法。或單排點種、上覆土厚二指許。畦上搭短(一)棚蔽日、旱則頓澆、常宜濕潤。秋後去棚。長高四、五寸、十月中、夾葛楷籬、以禦北風。畦内亂撒麥糠、覆樹令梢上厚二、三寸止。至穀雨前後、手爬去麥糠、澆之。次冬封蓋亦如此。二年之後、三月中帶土移栽。

(一)「短」 繆『王氏訳注』作「矮」。又於後掲【檜】種法條有「搭矮棚」。當從之。

【訓読】

松・栢を種うるの法。八、九月中、成熟せる松子・栢子を擇び、臺を去り收頓す。來春春分の時に至らば、甜水もて浸すこと十日。畦を治め、水を下し、糞を上げ、子を畦内に漫撒し、菜を種うるの法の如くす。土を覆ふこと厚さ二指。畦上に矮棚を搭して日を蔽ひ、早なれば則ち頓に澆ぎ、常に宜しく濕潤ならしむべし。秋後に棚を去る。長高なること四、五寸なれば、十月、葛楷を夾みし籬もて、以て北風を禦ぐ。畦内に麥糠を亂撒して樹を覆ひ、梢上厚さ二、三寸なら令む。穀雨前後に至らば、手もて麥糠を爬(か)き去り、之れに澆ぐ。次冬の封蓋も亦た此くの如くす。二年後、三月中土を帶して移栽す。

【現代語訳】

松・栢の繁殖法。八、九月中、成熟した松と栢の球果を選び、臺(=松ぼっくり)を取って実を収穫する。翌春の春分の時になったら、甜水(=飲料用の井戸水)に浸すこと十日、畦を治め、水を灌ぎ、肥料を入れ、実を畦内にばら撒きにし、野菜を播く方法のようにする。厚さ二本指分の土をかける。畦の上に低く小屋掛けをして日を遮り、日照りであれば何度も水をかけ、常に濕潤の状態にしておくべきである。秋が過ぎたら小屋掛けを取り去る。〔その苗が〕(1)成長して四、五寸になったら、十月に高粱の藁を挟んだ垣根で北風を禦ぐ。畦内に麦の籾殻をばら撒いて樹の苗を覆い、梢の上の厚さ二、三寸までかける。穀雨前後になったら、手で麦の籾殻を掻き取り、水をそそぐ。翌年の冬の覆いもまたこのようにする。二年後、三月中に土をつけたまま移植する。

【注】

(1)原文には「其棚」の二字があるが、『王禎』にはない。『三台万用』の撰者余象斗が文意を「棚の長さ、高さが……」と解釈し、誤って補ったものと思われる。ここでは「其苗」に改めておく。

㊦【檜】

【原文】

種法又如松法。挿枝者、二、三月檜芽孽動時、先熟斲黃土地成畦、下水飲畦〔一〕遍。滲定、再下水。候成泥漿、斫下細如小指檜枝、長一尺五寸、下削成馬耳。先以杖刺泥成孔、挿檜枝於孔中、深五、七寸以上。栽宜稠密、常澆令潤〔澤〕。上搭矮棚蔽日、至冬、換作煖廬。次年二、三月去覆。候樹高、移栽、如松栢法。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之九 竹木・松

種法又如松法。挿枝者、二、三月檜芽孽動時、先熟斲黃土地成畦、下水飲畦一遍、滲定、再下水、候成泥漿、斫下細如小指檜枝、長一尺五寸許、下削成馬耳狀、先以杖刺泥成孔、挿檜枝於孔中、深五、七寸以上、栽

宜稠密、常澆令潤澤。上搭矮棚蔽日、至冬、換作煖廕、次年二、三月後去、候樹高、移栽、如松栢法。

【訓読】

種法は又た松の法の如し。枝を挿す者は、二、三月、檜の芽孽の動く時、先ず黄土地を熟刷して畦を成し、水を下して畦に飲みしむること一遍。滲定すれば、再び水を下す。泥漿を成すを候ひ、細きこと小指の如き檜の枝を斫り下し、長さ一尺五寸とし、下を削りて馬耳と成す。先ず杖を以て泥に刺して孔を成し、檜の枝を孔中に挿し、深さ五、七寸以上とす。栽は宜しく稠密にし、常に澆ぎて潤澤なら令む。上に矮棚を搭して日を蔽ひ、冬に至らば、煖廕に換作す。次年の二、三月に覆ひを去る。樹高を候ひ、移栽するは、松・栢の法の如し。

【現代語訳】

檜の繁殖法は松の場合と同じにする。枝を挿し木する場合は、二、三月の檜の芽が動きだす時に、まず黄土の土地をよく耕して畦を作り、一度水をまいて畦に含ませる。水が浸み通ったら、再び水をまく。泥状になった時を見計らい、小指のように細い檜の枝を、長さ一尺五寸ばかり切り取り、下部を削って馬の耳状にする。先に杖を泥に刺して孔をあけ、檜の枝を孔の中に挿しこみ、深さ五、七寸以上とする。挿した枝は密度を高くし、常に水をそそいで潤澤しておくのがよい。その上に低い小屋掛けをして日を遮り、冬になったら、保温用の覆いに取り換える。翌年の二、三月に覆いを取り去る。苗木の高さを見計らって移植するが、その方法は松・栢の場合と同じにする。

②⑥【榆】

【原文】

白粉也。性扇他〔地〕、宜地〔陰〕下五穀者不植。種宜於園地北畔。秋耕令熟。至春、榆莢落時收取、漫撒、犁細疇勞之。明年正月初、附地芟殺、以草覆上、放火烧之。根上十數條、餘掐去、止留一條。一歳之中、長八、九尺、來年正、二月移栽之。初生三年、不用採葉。猶〔尤〕忌戕心。於坑塹中種者、以陳屋草布塹中、撒榆莢於草上、以土覆之。燒亦如法。

【出典および参考史料】

全文 『玉禎』百穀譜集之九 竹木・榆

白粉也。……榆性扇地、其陰下五穀不植。種者宜於園地北畔、秋耕令熟、至春、榆莢落時收取、漫撒、犁細疇勞之。明年正月初、附地芟殺、以草覆上、放火烧之(原注:根上必十數條俱生、留一條強者、餘悉掐去之)。一歳之中、長八九尺矣。後年正月、二月移栽之。初生三年不用採葉、尤忌戕心。於塹坑中種者、以陳屋草布塹中、撒榆莢於草上、以土覆之。燒亦如法。

【訓読】

白粉なり。性は地を扇(おお)へば、宜しく陰下に五穀なる者を植ゑざるべし。種うるは園地の北畔に宜し。秋耕は熟さ令む。春に至り、榆莢落ちし時に收取し、漫撒して犁もて細疇し之れを勞す。明年正月初め、地に附して芟殺し、草を以て上を覆ひ、火を放ちて之を焼く。根上の十數條は、餘は掐去するも、止だ一條を留む。一歳の中、八、九尺に長ずれば、來年正、二月之れを移栽す。初生より三年、葉を採るを用ゐず。尤も心を戕(きざつ)くを忌む。坑塹中に種うる者は、陳き屋草を以て塹中に布き、榆莢を草上に撒き、土を以て之れを覆ふ。焼くも亦た法の如し。

【現代語訳】

榆は『爾雅』にいう「白粉」である。地を覆う性(たち)なので、その陰になるところに五穀を植えるのは適當ではない。種を播くのは園地の北辺が適している。秋耕はよく土をこなす。春になって、榆の莢(み)が落ちた時に収集

し、ばら撒きして犁で細かく耕し耨をかける。明年正月初めに、地面の近くで刈り取り、草でその上を覆い、火を放って焼く。根上に生じた十数本の枝は、一本だけを留めてほかは取り去る。一年の中に、八、九尺に成長するので、翌年の正月、二月に移植する。初めて芽生えてから三年は、葉を採ってはいけない。とりわけ中心部を切るのを避けること。溝の中に撒く場合は、古い建物の屋根の草をその中に敷き、楡の莢をその上に撒き、土で覆う。〔その後〕焼く方法は同じである。

㉗【柳】

【原文】

小楊也。従木卯声。種以正月、二月中、取●〔弱〕柳枝、大如臂、長一尺半。焼下頭二、三寸、埋之令歿、常足水以澆之。一年中即高一丈。其旁生枝葉即掐去。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之九 竹木・柳

説文曰、柳、小楊也。従木卯声。種柳以正月二月中、取●柳枝、大如臂、長一尺半、焼下頭二三寸、埋之令歿、常足水以澆之、……一年中即高一丈餘。其旁生枝葉即掐去。

【訓読】

小楊なり。木に従ひ卯の声。種うるに正月、二月中を以てし、弱柳の枝の、大いさ臂の如きを取り、長さ一尺半とす。下頭二、三寸を焼き、之れを埋めて歿せ令め、常に水を足らし以て之れに澆ぐ。一年の中即ち高さ一丈なり。其の旁生の枝葉は即ち掐去す。

【現代語訳】

柳は〔『説文』に〕「小楊である。木に従い卯の声」とある。植えるのは正月、二月中とし、弱柳⁽¹⁾の枝の、臂ほどの大きさのものを取り、長さは一尺半とする。下端の二、三寸を焼き、これを埋めて土中に没するようにさせ、常に水を十分にしてこれにそそぐ。一年の中に高さ一丈となる。その旁生の枝・葉はすぐに取り去る。

【注】

(1)「弱柳」 繆『王氏訳注』によれば、これは楊柳科柳属の垂柳である。江南のある地域の通称は「楊柳」で、北方人は「垂柳」を単に「柳」と呼んだという。

㉘【漆】

【原文】

樹皮白、葉似椿、花似槐、子〔若牛李〕。處處有之。春分前後移栽。候樹高、六、七月、以剛斧斫其皮開、以蚌殼承之、汁滴即成漆。

【出典および参考史料】

全文 『王禎』百穀譜集之九 竹木・漆

漆樹皮白、葉似椿、花似槐子、今處處有之。……春分前後移栽、後樹高、六七月、以剛斧斫其皮開、以竹管承之、汁滴則成漆。

『重修政和經史證類備用本草』卷十二乾漆

圖經曰、……皮白、葉似椿、花似槐、子若牛李、木心黃、……

【訓読】

樹皮は白く、葉は椿に似、花は槐に似、子は牛李の若し。處處に之れ有り。春分前後移栽す。樹高を候ひ、六、

七月、剛斧を以て其の皮を研り開き、蚌殻を以て之れを承け、汁滴れば即ち漆を成す。

【現代語訳】

漆の樹皮は白く、葉は椿に似て、花は槐(エンジュ)に似、子は〔牛李のよう〕(1)である。至るところに生えている。春分前後に移植する。樹高を見計らって、六、七月、剛い斧でその皮を切り開き、蚌殻(どぶがいの殻)で〔汁を〕受け、汁が滴り出れば漆となる。

【注】

(1)「槐子」 繆『王氏訳注』は次のように注をつけている。『本草圖經』には「花似槐、子若牛李」とあり、これが原文だったとみられる。『王禎』の脱文であろう、と。この部分は前掲の参考史料にあるので、これに従う。

②⑨【苧麻】

【原文】

有二種、一曰紫麻、一曰白苧(一)。種法。三、四月種子者、初用沙薄地為上。斲地一、二遍、然後作畦。再斲一遍、用湿潤畦土半升、子粒一合、相和勻撒之。可搭棚、用細箔遮盖。常令潤湿、稍乾用微水澆之。待苗長三寸、作畦移栽。將做下空畦澆過、將苧麻苗、用刃器帶土掘出、轉移在內。務要頻鋤、勤澆愛護。至十月後、用驢馬生糞厚蓋(二)。間歲三刈。

【出典および参考史料】

(一)『王禎』百穀譜集之十 雜類・苧麻

有二種、一種紫麻、一種白苧。

(二)『農桑輯要』卷二播種・苧麻

【新添】栽種苧麻法。三、四月種子者、初用沙薄地為上、……先到斲地一、二遍、然後作畦、……再斲一遍、……用湿潤畦土半升、子粒一合、相和勻撒子。……畦搭二、三尺高棚、上用細箔遮盖。常令其下濕潤。……如地稍乾、用微水輕澆。約長三寸、……別作畦移栽。……亦將做下空畦澆過、將苧麻苗用刃器帶土掘出、轉移在內、……務要頻鋤、……至十月後、用牛・驢・馬生糞蓋、……

【訓読】

二種有り、一は紫麻と曰ひ、一は白苧と曰ふ。種法。三、四月子を種うる者は、初め沙薄地を用て上と為す。地を斲(たがや)すこと一、二遍、然る後畦を作る。再び斲すこと一遍、湿潤の畦土半升と子粒一合を用て、相ひ合して和勻して之れを撒く。棚を搭す可く、細箔を用て遮盖す。常に潤湿なら令め、稍や乾けば微水を用て之れに澆ぐ。苗長三寸なるを待ち、畦を作りて移栽す。做下せる空畦を將て澆過し、苧麻の苗を將て、刃器を用て土を帯びて掘り出し、轉移して内に在らしむ。務めて頻りに鋤するを要し、勤めて澆ぎて愛護す。十月後に至らば、驢馬の生糞を用て厚く蓋ふ。間歲に三刈す。

【現代語訳】

苧麻には二種有り、一は紫麻といい、一は白苧という。播種法。三、四月に種を播く場合は、初めは砂質の痩せ地がもつともよい。一、二遍畑を耕し、畦(うね)を作る。再び一遍耕し、十分湿った畦の土半升と種子一合を合わせて均等に混ぜ、これを撒く。〔二、三尺の高い〕小屋掛けをするのがよく、細かい箔〔すだれ?〕で覆う。常に湿潤にしておき、いくらか乾いたらわずかな水をそそぐ。苗の高さが三寸になるのを待ち、畦を作って移植する。準備しておいた空の畦に水をそそぎ、刃のある農具を使って苧麻の苗を土をつけたまま掘り出し、そこに移し換える。できるだけ何度も鋤をかける必要があり、勤めて水をそそいで愛護する。十月の後になったら、驢馬と馬の生の糞で厚く覆う。隔年に三度刈りとる。

⑩【木綿】

【原文】

一名吉貝〔貝〕。種時、擇兩和地、不下湿肥地。於正月深耕三遍、擇益〔二字作擺蓋調三字〕熟。然後作畦畛、背上堆積糞土。至穀雨後、揀好天氣日下種。畦畛速〔連〕澆三次、用水淘過子粒、堆於湿地上、用小〔少〕灰搓得伶俐、看稀稠撒之、將原起土覆、厚一指。六、七月苗長齊時、澆溉、鋤治常令潔淨。苗高二尺打去〔坤?〕〔衝〕天心、傍條長尺半、亦打去心。葉〔葉不空〕、開花結實。

【出典および参考史料】

全文『王禎』百穀譜集之十 雜類・木綿

一名吉貝。……種時、擇兩和地、不下湿肥地。於正月地氣透時深耕三遍、擺蓋調熟、然後作成畦畛。每畦長八步、闊一步、內半步作畦背、上堆積土。至穀雨前後、揀好天氣日下種。先一日將已成畦畛連澆三次、用水淘過子粒、堆於濕地上、用少灰搓得伶俐、看稀稠、撒於澆過畦內、將原起出覆土、覆厚一指、再勿澆、待六七月苗長齊時、旱則澆溉。鋤治常令潔淨、……苗高二尺之上、打去衝天心。傍條長尺半、亦打去心、葉葉不空、開花結實。

【訓読】

一名は吉貝なり。種うる時、兩和地の、下湿ならざる肥地を擇ぶ。正月に深耕すること三遍、擺・蓋もて調熟す。然る後に畦畛を作り、背上に糞土を堆積す。穀雨後に至らば、好天氣の日を揀びて種を下す。畦畛は連(つら)ねて澆すること三次、水を用て子粒を淘過し、湿地上に堆(つ)み、少灰を用て伶俐に搓得し、稀稠を看て之れを撒く。原起せる土を將て覆ふこと、厚さ一指。六、七月、苗長じて齊ひし時、澆溉し、鋤治して常に潔淨なら令む。苗高二尺にして衝天の心を打去し、傍條の長さ尺半なるも亦た心を打去す。葉葉空ならざれば、花を開き實を結ぶ。

【現代語訳】

木綿、一名は吉貝である。播種する時は、砂質と粘土質がほど良く混じった畑(1)で、湿っておらず肥えた畑を選ぶ。正月に三遍深耕し、擺(=耙)・蓋(=耨)で適度にこなす。その後に畦畛(うね)を作り、その背に糞土を積みあげる。穀雨の後になったら、好天の日を選んで種を播く。畦畛は続いて三度水を撒く。水を使って種子を選り分けて、湿った畑に積み、少しの灰を混ぜて手でもみ、しっかりばらばらにし(2)、密度を見ながら撒く。掘り起こしていた土でこれを覆い、指一本分の厚さとする。六、七月に、苗が成長して出揃った時、水をそそぎ、中耕、除草して常にきれいにしておく。苗の高さが二尺になったら茎の先端を折り取り、わき枝の長さが一尺半になったものも茎の先端を折り取る。このようにすべての葉を分化させて花芽を出させれば(3)、花を開き実を結ぶ。

【注】

- (1) 「兩和地」 繆『王氏訳注』(321 頁)【注釈】(8)は「就是砂・粘適中的現在農民俗称“二合土”とする。
- (2) 「搓得伶俐」「搓」は「揉む」の意で、「伶俐」は「利発ではきはきしている」といった意味であり、適当な訳語が見つからない。これを繆『王氏訳注』(322 頁)は「用手搓使離散開來」と訳している。とりあえずこれに従う。
- (3) 「葉葉不空」これが『王禎』(『輯要』も)の原文であるが、『三台万用』は誤解して「葉不空」の三字を脱落させてしまったと思われる。その意味については繆『輯要校釋』[一二](139 頁)に解説されている。「這句是說每一葉部都分化出花芽。……」という。

⑪【茶】

【原文】

茶經云、一曰茶、早採是。二曰檟、次採。三曰葢、又其次。四曰茗、晚採。五曰荈、則老葉矣。為詩云、誰謂茶苦、其甘如薺。以其苦而甘也。在處有之、惟建溪北苑、所產為勝。四時類要云、茶熟時、收取子、和濕土拌勻、筐籠盛之、穰草蓋覆。不即凍死不生。至二月中、出種之。樹下北陰之地開坎、圓三尺、深一尺。熟斲著糞土、每坑中種六、七十顆●〔子？〕。蓋厚一寸強、任生草、不芸得。三〔二〕年外方芸。早時以米泔澆之、以火糞薄壅之。多則傷根。宜峻坡、平地則溝以洩水。水浸則死。種之三年、則收其利。採時、清明・穀雨前後、新芽一發、便長寸餘、其細如針、斯為上品。如雀舌麥顆、特次耳。以甌微蒸、生熟得所。

【出典および参考史料】

「～則收其利」『王禎』百穀譜集之十 雜類・茶

茶經云、一曰茶、二曰檟、三曰葢、四曰茗、五曰荈(一)。早採曰茶、次曰檟、又其次曰葢、晚曰茗、至荈、則老葉矣。蓋以早為貴也。……詩云、誰謂茶苦、其甘如薺(二)、以其苦而甘味也。閩浙蜀荆江湖淮南皆有之、惟建溪北苑所產為勝。四時類要云、茶熟時、收取子、和濕土拌勻、筐籠盛之。穰草蓋覆、不即凍死不生。至二月中、出種之樹下、或北陰之地。開坎、圓三尺、深一尺、熟斲、著糞土、每坑中種六、七十顆、**明本**蓋土、厚一寸強、任生草、不得芸、相去二尺種一方、早時以米泔澆之、此物畏日、宜桑下竹陰地種之。二年外方可芸治。微以火糞薄壅之、多則傷根。峻坡為宜、平地則兩畔深溝以洩水、水浸即死(三)。種之三年、即收其利。此種蓺之法。……故採之宜早、率以清明・穀雨前者為佳。過此不及。……新芽一發、便長寸餘、其細如針、斯為上品。如雀舌麥顆、特次材耳。採訖、以甌微蒸、生熟得所。

(一)『茶經』卷上・一之源 同文

(二)『詩經』國風・邶風 同文

(三)『輯要』卷六 藥草

四時類用。熟時收取子、和濕沙土拌、筐籠盛之。穰草蓋、不爾、即凍不生。至二月中、出種之。於樹下或北陰之地開坎、圓三尺、深一尺、熟斲、著糞和土、每坑中種六七十顆子、蓋土厚一寸強。任生草、不得耘。相去二尺種一方。早時以米泔澆。此物畏日、桑下竹陰地種之皆可。二年外、方可耘治。……大概宜山中帶坡峻。若於平地、即於兩畔深開溝壙洩水。水浸根、必死。

「栽時、～」『農政全書』卷之三九種植・茶

玄扈先生曰、……故採之宜早、率以清明・穀雨前者為佳、……新芽一發、便長寸餘、其細如針、斯為上品。如雀舌麥顆、特次材耳。採訖以甌微蒸、生熟得所。……

【訓読】

茶經に云く、一に茶と曰ひ、早採是れなり。二に檟と曰ひ、次採なり。三に葢と曰ひ、又た其の次なり。四に茗と曰ひ、晚採なり。五に荈と曰ひ、則ち老葉なり。詩を為りて云く、誰か茶を苦しと謂ふや、其の甘きこと薺の如し、と。其の苦くして甘きを以てなり。在處に之れ有り、惟だ建溪・北苑、産する所勝ると為す。四時類要に云く、茶熟する時、子を收取し、濕土に和して拌勻し、筐・籠もて之れを盛り、穰草もて蓋覆す。しからざれば即ち凍死して生えず。二月中に至らば、出して之れを種う。樹下・北陰の地に坎を開き、圓は三尺、深さ一尺とす。熟斲して糞土を著し、坑中毎に六、七十顆〔子？〕を種う。蓋ふこと厚さ一寸強とし、草を生ずるに任せ、芸し得ず。二年外、方めて芸す。早りの時は米泔を以て之れに澆ぎ、火糞を以て薄く之れに壅ふ。多ければ則ち根を傷つく。峻坡に宜しく、平地なれば則ち溝もて以て水を洩す。水浸せば則ち死す。之れを種うること三年、則ち其の利を收む。採時は、清明・穀雨前後にして、新芽一たび發し、便ち長さ寸餘り、其の細きこと針の如く、斯れを上品と為す。雀舌・麥顆の如きは、特だ次なるのみ。甌を以て微(すこ)しく蒸し、生・熟所を得べし。

【現代語訳】

『茶経』にいう。一に「茶」といい、早摘みのものがこれである。二に「檟」といい、次に摘む。三に「葢」といい、さらにその次に摘む。四に「茗」といい、晩(おそ)摘みである。五に「荈」といい、老葉である。詩を作っている。誰か茶を苦しと謂ふや、その甘きこと薺(なずな)の如し、と。その苦くて甘味が出るのである。各地に茶はあり、ただ建溪・北苑に産出するものが勝っているとする。

『四時類要』にいう。茶が成熟した時、種子を収集し、湿った土と均等に混ぜて、筐や籠に盛り、藁で覆う。そうしないと凍え死んで生えてこない。二月中になったら、取り出して播く。樹の下や北向きの陰になっている土地に穴を掘り、直径三尺で、深さ一尺とする。よく耕して糞土を入れ、ひとつの坑中に六、七十粒を播く。厚さ一寸強の土で覆い、草が生えるに任せ、除草してはいけない。二年過ぎたら、はじめて除草する。日照りの時は米のときぎ汁をそそぎ、少しの火糞を施す。多ければ根を傷つける。険しい傾斜地に適しており、平地であれば溝を作って水を抜く。水に浸くと枯れる。種を播いてから三年で収穫する。摘む時期は清明・穀雨の前後で、新芽が出始めて長さ一寸あまりになり、針のように細い状態を上等とする。雀舌・麥顆といった状態はその次である。甌で少しく蒸し、火の通り具合を調整する。

③【栽種花法】

【原文】

牡丹宜寒不耐熱、宜燥惡湿。喜根得新土、則旺。惡〔烈〕風炎日、宜向陽栽植。

【参考史料】(凡例に書いたように、これ以下の「参考史料」は性格が異なっているので注意されたい)

『遵生八箋』所収「燕閑清賞箋」下・花竹五譜・牡丹花譜

牡丹宜寒惡熱、宜燥惡濕。根窠喜得新土則旺、懼烈風炎日。栽宜寬敞向陽之地、為牡丹所宜。

【訓読】

牡丹は寒に宜しく熱に耐へず。燥に宜しく湿を悪む。根は新土を得れば喜び、則ち旺んなり。烈風と炎日を悪む。宜しく向陽に栽植すべし。

【現代語訳】

牡丹は寒さに強いが熱さには耐えられず、乾燥に強いが湿気を嫌う。根は新しい土を与えられれば喜んで繁茂する。烈風と炎天を嫌う。南向きの地に栽培するのがよい。

③【栽法】

【原文】

〔宜〕八月初間、或秋分前後三兩日。如天氣尚熱、或遇陰雨、社後亦可。將根下宿土少留、勿掘斷根鬚。先寬掘土、漸漸至近。土砧欲小、則根得新土尤茂。每一本、先用白斂細末一斤、拌土勻停後、坐於花壇內、不可太〔太〕低〔太高〕。以土覆之、與花砧本土平、不得築緊。亦不可腳踏實。隨以井水或河水灌之、滿壇。待第二日土微乾、畧添細土覆蓋。每〔本〕約離七、八尺、不可大密。密則花枝長高、互相摩擦、多致損傷花芽也。

【参考史料】

『遵生八箋』花竹五譜・牡丹花譜

栽宜八月社前、或秋分後三兩日。若天氣尚熱、遲遲亦可。將根下宿土、緩緩掘開、勿傷細根、以漸至近。每本用白斂細末一斤、一云硫黃腳末二兩、豬脂六七兩拌土、壅入根窠、填平、不可太高、亦不可築實腳踏。填土完、以雨水或河水澆之、滿台方止。次日土低凹、又澆一次、填補細泥一層。若初種不可太密、恐花時風鼓、互相抵觸、損花之榮、此為種花之法也。其種子落地、直至春芽發葉長、是子活矣。六月須備箔遮、夜

則受露、二年八月、移栽別地則茂。此護子法也。

『二如亭群芳譜』貞部・花譜卷二 牡丹・移植

移牡丹、宜秋分後、如天氣尚熱、或遇陰雨、九月亦可。須全根寬掘、以漸至近。勿損細根、將宿土洗淨、再用酒洗、每窠用熟糞土一斗、白藪末一斤拌勻、再下小麥數十粒于窠底、然後植于窠中、以細土覆滿。將牡丹提與地平、使其根直易生、土須與幹上舊根平、不可太低太高、勿築實、勿腳踏。隨以河水或雨水澆之、窠滿即止、待土微乾、畧添細土覆蓋、過三、四日再澆、封培根土、宜成小堆、……每本約離三尺、使葉相接、而枝不相擦、風通氣透、而日色不入乃佳。不可大密、防枝相磨、致損花芽。

【訓読】

栽法。八月初間、或いは秋分の前後三兩日に宜し。如し天氣尚ほ熱く、或いは陰雨に遇はば、社後も亦た可なり。根下の宿土を將て少しく留め、掘りて根鬚を断つ勿れ。先づ寛く土を掘り、漸漸に近きに至る。土砧の小なるを欲するは、則ち根は新土を得て尤も茂ればなり。一本毎に先づ白藪の細末一斤を用て土に拌ぜ勻停せる後、花壇内に坐し、太(はなは)だ低く、太(はなは)だ高かる可からず。土を以て之を覆ひ、花砧の本土と平らにし、築緊するを得ず、亦た脚も踏實す可からず。随ひて井水或いは河水を以て之に灌ぎ、壇を満たす。第二日を待ち、土微や乾けば、畧(すこ)しく細土を添へて覆蓋す。每本約そ七、八尺を離し、大いに密なる可からず。密なれば則ち花枝長じて高く、互相に摩擦し、多く花芽を損傷するを致すなり。

【現代語訳】

牡丹の移植法。八月の初旬、あるいは秋分前後の三兩日がよい。もし天氣がまだ暑く、あるいは雨に遇ったら、社の後でもまた可能である。根元のもとの土を少し留めておき、掘ったときに鬚根を切らないようにする。まず広い範囲で土を掘り、次第に根元に近づく。〔株に付いている〕土塊は小さいのが望ましいが、それは根が新しい土を与えられるととりわけ茂るからである。一株ごとにまず白藪〔=葡萄科の植物である白藪の根を乾燥させたもの〕の粉末一斤を土に混ぜて調整した後、花の基壇〔=植穴〕内に入れ、低くなり過ぎ〔たり高くなりすぎ〕てはいけぬ。土でこれを覆い、牡丹の根元の土と平らになるようにし、築き固めてはいけぬし、また脚で踏み固めてもいけぬ。次いで井戸水あるいは河水をそそぎ、根元を満たす。二日目になって、土がいくらか乾いたら、少しばかりの細かい土を添えて覆う。各株はおよそ七、八尺離し、密になってはいけぬ。密になれば花枝が高く成長したとき、たがいに擦れ合い、多くの花芽を損傷することになる。

③【種法】

【原文】

則於六月子黒微開時收取、置向風處、曝一日。以瓦盆拌湿土盛之、至八月中取出、以水試其沉者、成畦種之。三冬以草覆之、待來年春萌芽長葉。至六月以葦箔遮盖、莫令曝晒。遇夜則露之。至第二年八月終、移過栽之。

【参考史料】

『二如亭群芳譜』貞部・花譜卷二 牡丹・種花

種花：六月中、看枝間角微開露見黒子收、置向風處、晒一日、以濕土拌收瓦器中、至秋分前後三五日、擇善地、調畦土、要極細、畦中滿澆水、候乾以水試子、擇其沉者、用細土拌白藪末、種之、隔五寸一枚下子、畢上加細土一寸、冬時蓋以落葉、來春二月内、用水澆常令潤濕、三月生苗最宜愛護、六月中以箔遮日、勿致晒損。夜則露之、至次年八月移栽。若待角乾收子、出者甚少、即出亦不旺、以子乾而津脉少耳。

【訓読】

種法 則ち六月の子黒く微や開きし時に收取し、向風の處に置き、曝すこと一日。瓦盆を以て湿土を拌せて之れ

を盛る。八月中に至らば取り出だし、水を以て其の沈む者を試し、畦を成して之れを種う。三冬、草を以て之れを覆ひ、來年春芽を萌し葉を長ずるを待つ。六月に至らば葦箔を以て遮盖し、曝晒せ令むる莫かれ。夜に遇へば則ち之れを露す。第二年の八月終りに至らば移過して之れを栽う。

【現代語訳】

牡丹の播種法 六月に種子が黒くなって少し開いたときに収穫し、風通しのよい所に置き、一日陽にさらす。瓦盆〔=素焼きの鉢〕に種子と湿った土を混ぜてこれを盛る。八月中になったら取り出し、水に漬けて沈むかどうかを試し、〔沈んだものを〕畦(うね)を作って播種する。冬中、草で覆い、翌年の春に芽を出し葉を伸ばすのを待つ。六月になったら葦の簾で覆い遮り、陽にさらしてはいけない。夜になったら簾をはずして露にあてる。二年目の八月の終りになったら、移植して株分けする。

㊥【分花法】

【原文】

揀長成大幹枝多者、八、九月全根掘出、視其可分者、用手擘開。須每枝看有根者。則易活。臨栽時、用小麥數十粒、置於根底、仍照前法栽之。待明年春三月、即看花也。

【参考史料】

『遵生八箋』花竹五譜・牡丹花譜

揀大墩茂盛花本、八九月時、全墩掘起、視可分處剖開、兩邊俱要有根易活。用小麥一握、拌土栽之、花茂。此分花法也。

【訓読】

長成せし大幹の枝多き者を揀び、八、九月に全根を掘り出だし、其の分かつ可き者を視(しら)べ、手を用て擘開す。須く枝毎に根有る者を看るべし。則ち活き易し。栽に臨むの時、小麥数十粒を用て、根底に置き、仍ほ前法に照らして之れを栽う。明年春三月を待てば、即ち花を看るなり。

【現代語訳】

牡丹の株分け法。成長した大株⁽¹⁾で、枝が茂ったものを選び、八、九月に株全体を掘り出し、分割できる株を調べて手で裂く。必ず枝〔=莖を指すか?〕ごとに根があるものを見ておくべきである。根がつきやすい。株分けに臨んだら、小麦数十粒を根の底に置き、やはり前法のようにして栽培する。明年の春三月を待てば、花が見られる。

【注】

(1)「幹」 原文のままでは意味が通らない。「幹」の誤りであろうか。『遵生八箋』の「墩」であれば、植物の叢を数える量詞なので数本の塊、つまり株を表す。ここではその意味で「大株」とした。

【原文】

○栽菊花。蜀人多種。苗可入茶、花可入菓。然野菊大能瀉人、惟真菊延年。花乃黄中之〔色〕、氣味和正。花葉根實、皆長生菓。其性介烈、不與百花同盛衰、是以通仙靈也。

【参考史料】

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

菊花、蜀人多種、苗可入茶、花可入菓。然野菊大能瀉人、惟真菊延年、花乃黄中之色、氣味和正。花葉根實、皆長生菓。其性介烈、不與百花同盛衰、是以通仙靈也。

『輯要』卷六、菓草・菊花所引『博聞録』

菊、蜀人多種之。苗可入茶、花・子可入葉。然野菊大能瀉人。惟真菊延年、花乃黃中之色、氣味和正。花葉根實、皆長生藥。其性介烈、不與百花同盛衰、是以通仙靈也。

【訓読】

菊花を栽う。蜀人多く種う。苗は茶に入る可く、花は葉に入る可し。然れども野菊は大いに能く人に瀉せしめ、惟だ真菊のみ年を延ぶ。花は乃ち黄中の色にして、氣味は和正なり。花・葉・根・實、皆な長生藥なり。其の性は介烈にして、百花と共に盛衰せざれば、是れを以て仙靈に通ずるなり。

【現代語訳】

菊の花を栽培する。蜀の人が多く栽培している。苗〔=茎や葉であろう〕は茶に入れることができ、花は葉にすることができる。けれども野菊は人に腹を下させ、ただ真菊のみが寿命を延ばす。花は〔五行の〕「黄」つまり「中」の属性(1)をもち、味と匂いは穏和で純正である。花・葉・根・実はみな長生薬である。その性は剛直で品性高く、諸種の花と同じような盛衰をたどらないので、これは仙靈に通ずるとするのである。

【注】

(1)「黄中」『易経』坤「君子黄中通理、正位居體」。「君子は黄(黄は中央の色。従って中の意を寓する)の徳をそなえている」と解釈されている(高田真治・後藤基巳訳、岩波文庫)。

【原文】

○分〔盆〕蘭法、未分時前期月餘、取合用沙、去礫〔礫〕揚莖、使糞夾和、曬乾儲之。至寒露後、擊破瓦盆輕手介〔解〕折〔垢〕、去舊蘆頭、存三年之穎。俗謂之筥。或三穎四穎作一盆。舊穎内新穎外、太高則年久〔湯?〕溢、太低則根局不舒。下沙欲疎之則通、而積雨不能漬〔漬〕、上沙欲其細則潤、而酷日不能燥。晴籠宿露。肥瘦適宜則活。

【参考史料】

『増補山林經濟』「攷事新書」卷十一

盆蘭法○前期月餘、取沙去礫、使糞草和、晒乾儲之。至寒露後、擊破元盆、經手解垢、去舊蘆頭、存三年之穎、或三穎作一盆、下沙、欲其疎則通、而積雨不能漬、上破、欲其細則潤、而酷日不能燥、晴籠宿露、肥瘦適宜則活。

【訓読】

盆蘭法。未だ分かつたざる時、期に前(さき)んずること月餘、合に用ふべきの沙を取り、礫を去り莖を揚げ、糞をして夾和せしめ、曬乾して之れを儲(たくわ)ふ。寒露後に至らば、瓦盆を撃破し、輕手もて介垢し、舊蘆頭を去り、三年の穎を存す。俗に之れを筥と謂ふ。或いは三穎・四穎もて一盆を作る。舊穎は内に新穎は外にし、太だ高ければ則ち年久しくして〔湯?〕溢し、太だ低ければ則ち根局舒(の)びず。下沙は其の疎なるを欲すれば、則ち通じて積雨も漬(ひた)す能はず。上沙は其の細なるを欲すれば、則ち潤ひて酷日も燥く能はず。晴籠、宿露あり。肥瘦適宜なれば則ち活く。

【現代語訳】

鉢植え蘭の栽培法。まだ株分けをしていないとき、適期の一か月余り前に、〔鉢のなかに〕用いる土砂を取り、礫を取り去り、莖を持ち上げておく。肥料を混ぜ合わせ、陽にさらして乾かし、貯えておく。寒露後になったら、〔元の〕瓦盆〔=素焼きの鉢〕を打ちこわし、手でそつと解体し、古い蘆頭〔=古い莖か?〕を取り去り、三年目の穎〔=穂先〕を残す。俗にこれを「筥」という。三本か四本の穎で一つの鉢植えを作ることもある。古い穎は内側に入れ、新しい穎は外側にする。〔穎の〕丈が高すぎれば年を経て盆から溢れ出し、低すぎれば根が伸び広がらない。鉢の下方

の土砂は疎らなのがよいが、それは水を通すので長雨でも水に浸からないからである。上方の土砂は細かいのがよいが、それは潤っていれば酷い日ざしでも乾燥しないからである。〔牡丹のような〕「晴籠」、「宿露」(1)となる。土の肥沃度が適宜であれば根付く。

【注】

(1)唐・舒元興(791—835年)「牡丹賦」の句「晴籠は昼に熏り、宿露は宵に裊(うるほ)す」を踏まえている。

【原文】

○種蓮子。八、九月、取堅黒子、瓦上磨尖直、令皮薄。取堽土、作塾〔熟〕泥封。如三指大長、使蒂頭兼〔平〕重、令磨湏〔處〕尖。臨欲種時、擲至池中、重頭向下、自然周正。薄皮上易生、數日即出。不磨者不生。

【出典および参考史料】

『要術』卷六養魚

種蓮子法、八月、九月中、收蓮子堅黒者、於瓦上磨蓮子頭、令皮薄。取堽土、作熟泥封之。如三指大、長二寸、使蒂頭平重、令磨處尖鋭。泥乾時、擲於池中、重頭沈下、自然周正。皮薄易生、少時即出。其不磨者、皮既堅厚、倉卒不能生也。

『分門瑣碎録』種花

種蓮子法、八月取堅黒子、瓦上磨尖直、令皮薄、取堽土、作熟泥封、如三指大長、使蒂頭平重、令磨處尖、臨欲種時、擲至池中、重頭向下、自然周正。皮薄易生、數日即出。不磨者、卒不能復生。

【訓読】

蓮子を種う。八、九月、堅く黒い子を取り、瓦上にて尖を磨き直ならしめ、皮をして薄からしむ。堽土を取り、熟泥を作りて封ず。三指大の如く長くし、蒂頭をして平らにして重からしめ、磨きし處をして尖ならしむ。種ふんと欲するの時に臨み、擲して池中に至らば重き頭は下に向き、自然に周正す。薄皮は上なれば生え易く、數日にして即ち出づ。磨かざる者は生えず。

【現代語訳】

蓮の種子を播く。八、九月、堅くて黒い種子をとり、瓦の表面で先端を磨いて平らにし、皮を薄くする。壁塗り用の土で、よくこねた泥を作り、その中に封じこめる。指三本ほどの長さにし、蒂の方を平らにして重くし、必ず種子の磨いたところを尖らせる。播種する時に、池の中に投げ込めば重い方の先端が下に向き、自然に〔方向を〕修正する。薄皮の部分が上になると芽を出しやすく、数日で芽を出す。磨かなかつたものは芽を出しにくい(1)。

【注】

(1)「不磨者不生」 『要術』の原文は「倉卒不能生也」なので、「すぐには芽を出せない」つまり「遅れて芽を出す」の意味である。しかし『分門瑣碎録』が「卒不能復生」と「倉」の字を落としたため、「ついに芽を出せなくなった」と逆の意味になった。これを継承した『三台万用』は句をさらに簡略にした。訳文では元の意味に戻している。

【原文】

○又蓮花湏以牛糞壤地、於立夏前二〔三〕兩日、掘藕根、取節頭、着泥中種之、當年便着花。又法、五月二十日移深種。蓮柄長者、以竹枝子扶〔挾〕之、無有不活。

【参考史料】

『分門瑣碎録』種花

種蓮、湏先羊糞壤地、於立夏前二兩日種、當年便著花。又法、五月二十日移、深種蓮柄、長者以竹枝子扶之、

無有不活。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

蓮花、須以牛糞壤地、於立夏前三兩日、掘藕根、取節頭、着泥中種之、當年即便着花。

『種樹書』花

種蓮、須以羊糞壤地、於立夏前兩三日種、當年便着花。又法、五月二十日、移深種、蓮柄長者、以竹枝挾之、無不活者。

【訓読】

又た蓮の花は須く牛糞の壤地を以(もち)うべし。立夏前の三兩日に、藕の根を掘り、節頭を取りて、泥中に着して之れを種うれば、當年便ち花を着く。又た法。五月二十日に移して深く種う。蓮の柄の長き者もて、竹枝子を以て之れを挾めば、活きざること有る無し。

【現代語訳】

また蓮の花の栽培法。必ず牛糞を施した耕地を用いるべきである。立夏の二、三日前に、藕(はす)の根を掘り、節の先端を取り、泥の中に入れれば、その年のうちに花を着ける。別の法。五月二十日に移植して深く植える。蓮の柄の長いものを竹の枝で挟んで植えれば、根付かないことがない。

【原文】

○瑞香花、惟廬山者最勝、花紫、葉青、厚如橘葉者最香。種法、不可露根、惡湿畏日。

【参考史料】

『分門瑣碎録』花・花卉總説

瑞香生江南諸山、廬山者最勝、有數種、唯紫花葉青色、而厚似橘葉者最香。……、不可露根、則不榮。……

『新編群書類要事林廣記』庚集卷之三

瑞香花、廬山者最勝、花紫葉青、厚似橘葉者最香。種法、不可露根、惡湿畏日。……

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

瑞香花、唯廬山者最勝、花紫葉青、厚如橘葉者最香。種法、不可露根、惡湿畏日。……

『便民圖纂』卷五 樹藝類上

其花數種、惟紫花葉青、而厚者最香。惡湿、畏日。

『居家必用事類全集』戊集 山居録・花草類

種瑞香 廬山者最勝、唯紫花葉青、而厚似橘葉者最香。種法、不可露根、惡湿畏日。……

『山居四要』

瑞香:種不可露根、惡濕畏日、用洗衣灰澆去蚯蚓滓、及退雞鵝汁、燻豬湯澆之、則茂盛。

【訓読】

瑞香花は惟だ廬山の者最も勝る。花は紫にして葉は青く、厚きこと橘の葉の如き者最も香る。種法、根を露す可からず。湿を惡み日を畏る。

【現代語訳】

瑞香花(じんちょうげ)は、廬山のものがとりわけ勝れている。花は紫色で、葉は青く、その厚さが橘の葉のようなものが最も香りがよい。栽培法。根を土から出してはいけない。湿気を嫌い、日光を畏れる。

【原文】

○鷄冠花、如立撒子、則高株方開花。若坐撒子、則小株低矮、以扇或婦人裙撒子、亦如之。以手撒子、花細如指。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』種花

種鷄冠花、如立撒子、則高株方開花。若坐撒子、則小株低矮開花。如以扇或婦人裙撒子、則花大亦如之、如以手撒子、則花如手指。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

鷄冠花、如立撒子、則株高方開花。坐撒子、則株低矮、以扇或婦人裙撒子、花亦如之。以手撒子、花細如指。

『種藝必用』

種鷄冠花、如立撒子、則高株方開花。若坐撒子、則小株低矮。開花如似扇、或婦人裙撒子、則花大亦如之、如以手撒子、則花細如手指。

『便民圖纂』卷五 樹藝類上

坐種、則矮。立種、則與人齊。手種、則花成穗。用簸箕扇子種、則成片可觀。清明時宜種。

『五車拔錦』

鷄冠。坐種則矮。立種、則與人齊之。月則花成穗。用簸箕扇子種、成片可觀。清明時宜種。

【訓読】

鷄冠花、如し立ちて子を撒けば、則ち高き株にして方めて花を開く。若し坐して子を撒けば、則ち小株にして低矮なり。扇或いは婦人の裙を以て子を撒けば、亦た之くの如し。手を以て子を撒けば、花は細きこと指の如し。

【現代語訳】

鷄冠花(けいとう(1))は、もし立って種子を撒けば、株が高くなってはじめて花を開く。もし坐って種子を撒けば、株は小さく丈が低い。扇子あるいは婦人の裙を使って種子を撒けば、またそのようになる。手で種子を撒けば、花は指のように細くなる。

【注】

(1)似た表現の「鷄頭」は「オニバス」の実の意。

【原文】

○罌粟種〔當有「重」一字或「九月」二字〕九日種。又云、中秋夜種則罌大子滿。種訖、以竹箒掃之、花乃千葉。兩手重疊撒種、則重臺花。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』種花

種罌粟花、九月九日以竹箒掃或苕箒撒、結罌必大、子必滿。又云、中秋夜種則子滿罌。

同前

種罌粟花、以兩手重疊撒種、即開重臺花。

同 雜説

單葉罌粟子、於中秋夜種訖、用竹箒勻掃、則成千葉。

『種樹書』花

九月九日及中秋夜種之、花必大、子必滿。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

罌粟、當書？重九日種。又云、中秋夜種則罌大子滿。種訖、以竹箒掃之、花乃千葉。兩手重疊撒種、則重臺花。

『輯要』卷六、藥草・罌粟所引『博聞錄』

重九日種。又中秋夜種、則罌大子滿。種訖、以竹箒掃之。

『便民圖纂』卷五 樹藝類上

九月九日及中秋夜種之、花必大、子必滿。

『種藝必用』

種罌粟花、以兩手重疊撒種、則開重臺也。單葉罌粟子、於中秋夜種訖、用竹箒掃勻、則成千葉者。

同前

種罌粟花、九月九日以竹箒掃或芒箒掃撒、結罌必大、子必滿。又云、中秋夜種則、子滿罌。

【訓読】

罌粟の種は重九の日に種う。又た云く、中秋の夜種うれば則ち罌大にして子滿つ。種ふ訖りて、竹箒を以て之れを掃けば、花は乃ち千葉なり。兩手もて重疊に種を撒けば則ち重臺花なり、と。

【現代語訳】

罌粟(けし)の種子は九月九日に播く。またいう。中秋の夜に播けば〔罌粟の〕花は大きく、種子が充実する。播きおわってから、竹箒で掃除すると、花は八重咲きになる。両手を重ねて種子を撒けば、重臺花(1)になる、と。

【注】

(1)「重臺花」 未詳であるが、花の萼が二重になっている花であろうか。

【原文】

○水仙、收時用小便浸一宿、晒乾懸當風處、候種時取出、無不發花者。種法、溷天〔沃〕壤、日以水澆則花盛、地瘦則無花、不可缺水。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』種花

水仙、收時、用小便浸一宿、取出晒乾、懸之當火處、候種時取出、無不發花者。

同前

種水遷花、須是沃壤、日以水澆則花盛、地瘦則無花、其名水遷、不可缺水。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

水仙、收時用小便浸一宿、晒乾、懸當風處、種之、無不發花者。亦須肥壤、地瘦則無花、不可缺水。

『種藝必用』

水仙收時、用小便浸一宿、取出晒乾、懸之當火處、候種時取出、無不發花者。

『便民圖纂』卷五 樹藝類上

收時、用小便浸一宿、晒乾、懸於當火處、種之無不發者。亦須肥地、瘦則無花、不可闕水、故名水仙。

『居家必用事類全集』戊集卷之九

種水仙、收時、用小便浸一宿、晒乾、懸當火處、種之無不發花者。亦須肥壤地、瘦則無花、不可闕水。故名水仙。五月初浸、九月初栽。

【訓読】

水仙は、收むる時、小便を用て浸すこと一宿、晒乾し當風の處に懸け、種時を候ちて取り出だせば、花を發せざ

る者無し。種法、沃壤を漬(もち)ひ、日々水を以て澆げば則ち花盛んなり。地瘦せれば則ち花無し。水を飲く可からず。

【現代語訳】

水仙は、収穫する時に小便に一晚浸し、陽にさらして乾かし、風通しの良いところに懸けておく。植え時を待つて取り出せば、花を開かないものはない。栽培法。肥沃な土壌を用い、日々水をそそげば花は盛んになる。土地が痩せていれば花はつかない。水を欠かしてはいけない。

【原文】

○石菖蒲初種圓石上、再移好石上則葉細。

【参考史料】

『分門瑣碎録』種植雜法

菖蒲初種園、在石之上、一再移好石之上、乃細而不蘧。

『種藝必用』

菖蒲、初種在圓石上、一再移好石之上、乃細而不蘧。

『群芳譜』貞部・卉譜一 菖蒲

養石上蒲法：…菖蒲、梅雨種石上則盛、而細用土則蘧、

『證類本草』卷二八 菜部中品 香薷

圖經曰…壽春及新安有。彼間又有一種、石上生者、莖葉更細、而辛香彌甚、用之尤佳、彼人謂之石香薷。

【訓読】

石菖蒲は初め圓石上に種ゑ、再び好石上に移せば則ち葉は細し。

【現代語訳】

石菖蒲(せきしょう)は、初めは円い石の上に植え、さらに好い石の上に移せば葉は細くなる。

㊦【接花法】

【原文】

凡接牡丹、亦在秋社前後、將種成小牡丹五年以上如指大者、斜削去一半、去地留一〔二〕一〔三〕寸。却將千葉牡丹好新旺條、利刀截落斜削去一半、上留二、三股〔眼〕、貼先削牡丹上、合如一株。以麻縛定。然後用泥調拌、塗於合縫麻縛處、用兩瓦合之、內換細潤土、待來春驚蟄後、去其瓦、以草〔覆?〕〔圍〕之、茂者當年即著花。又接頭根下截取者、用新簍潤土內藏、放十餘日、行數百●〔里〕接、亦可活也。

【参考史料】

『二如亭群芳譜』貞部・花譜二 牡丹

接花：花不接不佳。接花須秋社後重陽前、過此不宜。將單葉花本如指大者、離地二、三寸許、斜削一半、取千葉牡丹新嫩旺條、亦用利刀斜削一半、上留二、三眼、貼于小牡丹削處、合如一株、麻紕緊札、泥封嚴密、兩瓦合之、壅以軟土、單以莖葉。勿令見風日、向南留一小戶、以達氣。至來春驚蟄後、去瓦土、隨以草薦圍之。仍樹棘數枝以禦霜。茂者當年有花、是謂貼接、或將小牡丹新苗旺盛者、離地二、三寸、用利刀截斷、以尖刀劃一小口、取上品牡丹枝上有一、二芽者、截二、三寸長一段、兩邊斜削、插于劃處、比量吻合、麻紕緊、細濕上壅高一尺、瓦盆蓋頂、待二七開、視茂者、其芽紅白鮮麗、長及一寸、此極旺者。若未發、再培之、三七開、看活者即發、否則腐斃、活者仍用土培盆合、至春分去土、恐有烈風。仍用盆蓋、時常檢點至三月

中方放開、全見風日、又恐茂者長高、被風吹折。仍以草罩罩之。接頭枝如及時截取者、藏新簞潤土十餘日、行數百里、亦可接活。立春若是子日茄根上接之。不出一月、花即爛熳、二三月間、取芍藥根大如蘿蔔者、削尖如馬耳、將牡丹枝劈開如燕尾插下縛緊、以肥泥培之。即活。當年有花、一、二年、牡丹生根、割去芍藥根、成真牡丹矣。又椿樹接者、高丈餘、可於樓上賞玩。唐人所謂樓子牡丹也。牡丹一接便活者、逐年有花。若初接不活、削去再接、只當年有花。

【訓読】

凡そ牡丹を接ぐも亦た秋社前後に在り。種成せる小牡丹の五年以上にして指の如き大なる者を將て、斜めに一半を削り去り、地を去ること二、三寸を留む。却(ま)た千葉牡丹の好く新旺なる條を將て、利刀もて截落し、斜めに一半を削り去り、上に二、三眼を留め、先に削りし牡丹の上に貼り、合して一株の如くし、麻を以て縛定し、然る後に泥を用て調拌し、合縫して麻もて縛りし處に塗り、兩瓦を用て之れを合す。内は細潤土に換へ、來春の驚蟄後を待ち、其の瓦を去り、草を以て之れを圍めば、茂りし者は當年即ち花を著く。又た接頭の根下を截り取る者は、新簞なる潤土を用て内に藏し、放つこと十餘日なれば、數百里を行きて接ぐも、亦た活く可きなり。

【現代語訳】

牡丹を接ぎ木する方法

およそ牡丹を接ぎ木するのもまた秋社〔=立秋から五番目の戌の日〕の前後である。栽培して五年以上になる小牡丹の、指のような太さの枝を、斜に半分を削り取り、地面から二、三寸のところを留めておく。その後で八重咲牡丹の新しくてよく繁った枝を、鋭利な刃物で切り落とし、斜に半分を削り取り、上に二、三個の芽を留めた状態で、先に削っておいた牡丹の上に貼りつけ、合体して一株のようにし、麻で縛りつける。その後で泥を混ぜて調整し、それを接合して麻で縛ったところに塗り、二枚の瓦でこれを合わせる。その中は細かい潤った土にとり換える。翌春の啓蟄の後を待ち、瓦を取り去り、草で囲んでおけば、茂ったものはその年に花をつける。また接ぎ穂用に根元から截り取った枝は、新しい籠に潤った土を入れてその中に収蔵し、十余日放置すれば、數百里行ったところで接ぎ木しても活着させられる。

【原文】

○又将牡丹於芍藥根上再●〔接〕、易發無過。一、二年、牡丹自生本根、則旋〔割〕去芍藥根。成真牡丹矣。

【参考史料】

『二如亭群芳譜』前掲後半部

『分門瑣碎錄』接花法

牡丹於芍藥根上接、易發無過。一、二年、牡丹自生本根、則旋割去芍藥根、成真牡丹矣。

『種藝必用』

牡丹於芍藥根上接、易發無失。一、二年、牡丹自生本根、則旋割去芍藥根、成真牡丹矣。

『便民圖纂』卷五 樹藝類上

牡丹一接便活者、……於芍藥根上接則易發。一、二年、牡丹自生本根、則旋割去芍藥根、成真牡丹矣。

【訓読】

又た牡丹を將て芍藥の根上に再び接(つ)げば、發し易く過ち無し。一、二年、牡丹自ら本根を生ずれば、則ち旋ちに芍藥根を割去す。眞の牡丹と成る。

【現代語訳】

また牡丹を芍藥の根の上に再度接ぎ木すれば、着きやすくて失敗がない。一、二年して、牡丹自ら本根を出し

たら、すぐに芍薬の根を取り去る。〔そうすれば〕真の牡丹と成る。

【原文】

○立春如是壬〔子〕●〔日〕、於筮〔茄〕根上接牡丹花。不出一月、即爛熳。

【参考史料】

『二如亭群芳譜』前掲後半部

『種樹書』花

立春若是子日、於茄根上接牡丹花、不出一月、即爛熳。

【訓読】

立春、如し是れ子の日なれば、茄の根上に牡丹花を接ぐ。一月を出でず、即ち爛熳たり。

【現代語訳】

立春が子の日に当たっていれば、茄(ナス)の根の上に牡丹の花を接ぐ。一か月经たないうちに色鮮やかになる。

【原文】

○黄白二菊、各披去一邊〔皮〕、用麻皮托〔扎=紮〕合。開花半黄半白。

【出典および参考史料】

『分門瑣碎録』接花法

黄白二菊、各披去一邊皮、用麻皮扎合。其開花、半黄半白。

『種樹書』花

黄白二菊、各披去一邊皮、用麻皮扎合。其花半黄白。

『便民圖纂』卷五

黄白二菊、各披去一邊皮、用麻皮紮合。其花開、半黄半白。

【訓読】

黄・白二菊、各々一邊の皮を披去し、麻の皮を用て紮合す。花を開くに半ばは黄、半ばは白なり。

【現代語訳】

黄・白二種の菊の、それぞれの一辺の皮を裂き取り、麻の皮で括り合わせる。〔そうすれば〕、花が咲いたときに半ばは黄色に、半ばは白色になる。

【原文】

○苦練〔棟〕樹上接梅花、則花如墨梅。

【参考史料】

『分門瑣碎録』接花法

苦練樹上接梅花、則花如墨梅。

『種樹書』花

苦棟樹上接梅花、則花如墨梅。

『便民圖纂』卷五 樹藝類上

苦練樹接梅、則花如墨。

【訓読】

苦楝樹上に梅花を接げば、則ち花は墨梅の如し。

【現代語訳】

苦楝(おうち、センダン)の樹に梅の花を接げば、その花は墨絵の梅のようになる。

【原文】

○本〔木〕年〔樺〕接榴、開花必紅。

【参考史料】

『分門瑣碎録』接花法

木樺接石榴、開花必紅。

【訓読】

木樺もて榴に接げば、開花は必ず紅し。

【現代語訳】

木樺(モクセイ)を石榴(ザクロ)に接げば、咲く花は必ず紅い。

【原文】

○花木接者、或欲移種、湏令接頭在土外。

【参考史料】

『分門瑣碎録』接花法

花木接者、或欲移種、湏令接頭在土外。

『種樹書』花

花木接者、或欲移種、湏令接頭在土外。

【訓読】

花木の接ぎし者、或いは移種せんと欲すれば、湏く接頭をして土外に在ら令むべし。

【現代語訳】

花木の接ぎ木したもので、移植したいものがあれば、必ず接ぎ穂を土の外に出しておかねばならない。

【原文】

○凡接花樹、雖已接活、内中脂力未全、包生滿〔疑衍字〕接頭處、切宜愛護。勿令梅雨得以侵其皮。必不活。

【参考史料】

『分門瑣碎録』接花法

凡接花樹、雖以接活、内有脂力未全、包生接頭處、切要愛護。勿令梅雨得以浸其皮、必不活。

『種樹書』花

凡接花木、雖已接活、内有脂力未全、包生接頭處、切要愛護。如梅雨侵其皮、必不活。

【訓読】

凡そ花樹を接ぐに、已に接ぎて活くと雖も、内中の脂力未だ全からざれば、生の接頭の處を包み、切に宜く愛護すべし。梅雨をして以て其の皮を侵すを得令むる勿かれ。必ず活きず。

【現代語訳】

およそ花樹を接ぎ木したとき、活着していても内部の脂力がまだ完全ではないので、接ぎ穂の所を包み、しつ

かりと愛護すべきである。梅雨時の雨がその皮に浸みこまないようにさせよ。〔雨が浸みこむと〕必ず活着しない。

⑳【澆花法】

【原文】

牡丹以清曉或初更時、地涼可澆。八月九月、五日七日一澆、十月十一月三、四日一澆。地凍不可澆。至正月二月五日一澆、春分後便不可澆。直至穀雨花放時、尤不可澆。ヒ則花開不齊。如有雨任之、亦不宜聚水於壇內。至六月暑中忌澆尤甚。澆則損其鬚、來春花不茂。北方土厚、不宜以糞水澆之。當用塘水溪水。亦不宜井水潮水。尤不可濕。徐ヒ續澆。

【参考史料】

『二如亭群芳譜』貞部・花譜二 牡丹・澆花

尋常澆灌、或日未出、或夜既靜、最要有常、正月一次、須天氣和暖、如凍未解、切不可澆。二月三次、三月五次、四月花開不必澆。澆則花開不齊、如有雨任之、亦不宜聚水于根旁、花卸後宜養花、一日一次、十餘日後暫止、視該澆方澆、六月暑中、忌澆、恐損其根鬚、來春花不茂。雖旱亦不澆、七月後、七、八日一澆、八月剪枯枝並葉、上炕土、五、六日一澆。九月三、五日一澆、澆頻、恐發秋葉、來春不茂。如天氣寒、則澆更宜稀。此時枝上橐芽漸出、可見澆灌之功也。十月十一月、一次或二次、須天氣和暖日上時方澆、適可即止勿傷。水或以宰猪湯連餘垢、候冷透、澆一、二次、則肥壯宜花。十二月地凍不可澆、春間開凍時、去炕土澆、時緩緩為妙、不可濕、其餘雨水河水為上、甜水次之、鹹水不宜、最忌犬糞。

【訓読】

牡丹は清曉或いは初更時、地涼しきを以て澆ぐ可し。八月、九月は、五日、七日に一たび澆ぎ、十月、十一月は三、四日に一たび澆ぐ。地凍らば澆ぐ可からず。正月、二月に至らば五日に一たび澆ぎ、春分後は便ち澆ぐ可からず。直に穀雨の花放(ひらく)の時に至りては、尤も澆ぐ可からず。澆げば則ち花開くも齊はず。如し雨有らば之れに任すも、亦た宜しく水を壇内に聚むべからず。六月暑中に至らば澆ぐを忌むこと尤も甚し。澆げば則ち其の鬚を損なひ、來春、花茂らず。北方、土厚ければ、宜く糞水を以て之れに澆ぐべからず。當に塘水・溪水を用ふべし。亦た井水・潮水に宜しからず。尤も湿らす可からず。徐徐に續きて澆ぐ。

【現代語訳】

牡丹は清らかな朝あるいは初更の時、土地が冷ややかであれば水を注ぐのがよい。八月、九月は、五日、七日ごとに一度注ぎ、十月、十一月は三、四日ごとに一度注ぐ。土地が凍ったら注いではいけない。正月、二月になったら五日ごとに一度注ぎ、春分後には注いではいけない。そうして穀雨の花が開く時になったら、とりわけ注いではいけない。注げば花が開いても揃わない。もし雨が降ったらそのままにしておくが、ただ水を花壇の内に集めてはいけない。六月の暑中になったら、とりわけ水を注ぐことを禁じる。注げばその鬚根(ひげね)を損ない、翌春、花が茂らない。北方は土壌が厚いので、糞水を注いではいけない。ため池の水・谷川の水を用いるべきである。また井戸水・潮水もよくない。とりわけ湿らせ過ぎてはいけない。徐々に間断なく注ぐ。

【原文】

○海棠花、冬天〔至〕日早、以糟水澆根、其花鮮甚。花謝結子、剪去。來年花盛無葉。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』雜説

海棠、候花謝結子、即剪去、來年花盛而無葉。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

海棠花、冬至日早、以糟水澆根、其花鮮盛、花謝結子、剪去、來年花盛無葉。……

『種樹書』花

海棠花、欲其花鮮而盛、冬至日早、以糖水澆根下。

同前

海棠、候花謝結子剪去、來年花盛無葉。

【訓読】

海棠花、冬至の日早、糟水を以て根に澆がば、其の花の鮮かなること甚し。花謝(しば)み子を結べば、剪去す。來年花盛んにして葉無し。

【現代語訳】

海棠(カイドウ)の花、冬至の朝、酒粕水を根に注ぐとその花がとても鮮かになる。花がしばみ種子ができれば切りとる。翌年、花が盛んになり、葉は出ない。

【原文】

○瑞香、不得頻以水澆。宜用小便、可殺蚯蚓。或從花脚澆之則葉緑、又用梳頭垢膩根上。有日色、即覆之。又宜用擣猪湯洗衣服灰水。盖瑞香根甜、得灰汁、則蚯蚓不食。衣服垢膩(則又自肥也)。

【参考史料】

『分門瑣碎録』澆花法

瑞香花、惡湿、畏日。不得頻沃以水、宜用小便、可殺蚯蚓。或從花脚澆之、則葉緑。又用梳頭垢膩、於根上、有日色、即覆之。又以濯洗布衣灰汁澆瑞香、能去蚯蚓且肥花。蓋瑞香根甜、得灰水、則蚯蚓不食。而衣服垢膩、又自肥也。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

瑞香用擣猪湯澆。

『種藝必用』

瑞香花、惡湿、畏日。不得頻沃水、宜用小便、可殺蚯蚓。或從花脚澆之、則葉緑。又用梳頭垢膩於根上、有日則覆之。

同前

洗布衣灰汁澆瑞香、能去蚯蚓、又肥花。蓋瑞香根甜、得灰水則蚯蚓不食、而衣服垢膩、又自肥也。

『種樹書』花

瑞香花惡濕日、不得頻沃以水、宜用小便、可殺蚯蚓。或從花脚澆之則葉緑。又用梳頭垢膩根上、有日色、即覆之。

同前

濯洗布灰汁、澆瑞香、必能去蚯蚓、且肥花。以瑞香根甜、灰汁則蚯蚓不食。而衣垢又自肥也。

『新編群書類要事林廣記』庚集卷之三

瑞香花、廬山者最勝、花紫葉青、厚似橘葉者最香。種法、不可露根、惡湿、畏日。……

【訓読】

瑞香は、頻りに水を以て澆ぐを得ず。宜く小便を用うれば、蚯蚓を殺す可し。或いは花脚従り之れを澆げば則ち葉は緑たり。又た梳頭の垢膩を根上に用う。日色有れば、即ち之れを覆ふ。又た宜く猪を擣(むし)りし湯、衣服を

洗ひし灰水を用ふべし。蓋し瑞香の根甜く、灰汁を得れば、則ち蚯蚓食らはず。衣服・垢膩は又た自ら肥ゆるなり。

【現代語訳】

瑞香(じんちょうげ)は、何度も水を注いではいけない。小便を用いれば、蚯蚓(ミミズ)を殺すことができる。あるいは花の脚部よりこれを注げば葉が緑になる。また頭髪を梳いたときの頭垢(フケ)を根にかける。日光があたれば、すぐにこれを覆う。また宜く猪の毛をむした湯、衣服を洗った灰水を用いるのがよい。思うに瑞香の根は甘い、灰汁をかければ蚯蚓が食わない。衣服を洗った水と頭垢を施すと自然に太る(1)。

【注】

(1)「蚯蚓不食。衣服垢膩」 原文はここで切れている。そのまま読むと「蚯蚓が衣服・垢膩を食わない」となり、意味が通らない。ここでは【参考史料】によって四文字を補い、意味が通るようにした。

【原文】

○葡萄用米泔水和黒豆皮〔同澆〕。

【参考史料】

後掲の『三台萬用』月桂の項

葡萄用米泔水和黒豆皮同澆。

『分門瑣碎録』澆花法

灌溉花木、各自不同。……葡萄當用米泔水和黒豆皮。

『種樹書』花

灌溉花木、各自不同。……葡萄當用米泔水、肉汁尤妙。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

葡萄用米泔澆。

【訓読】

葡萄、米の泔水と黒豆の皮を用って同に澆ぐ。

【現代語訳】

葡萄には米のとぎ汁と黒豆の皮をいっしょに灌ぐ(1)。

【注】

(1)後掲『三台萬用』月桂の項の最後の二字を補って訳した方が理解しやすい。

【原文】

○茱〔茱〕茱〔茱〕用鶏糞壅之則盛、用擣猪湯澆則肥。

【参考史料】

『種樹書』花

鶏糞壅茱茱則盛。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

茱茱以雞糞壅之則盛。

【訓読】

茱茱は鶏糞を用て之れを壅へば則ち盛んにして、猪を擣りし湯を用て澆げば則ち肥ゆ。

【現代語訳】

茉莉(マツリカ)は鶏糞を施肥すれば繁茂し、猪の毛をむしった湯を注げば太る。

【原文】

○月桂花以魚腥水澆、則葉不生蟲。葡萄用米泔水和黑豆皮同澆。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』澆花法

月桂花葉、常苦蟲食、以魚腥水澆之、乃止。

『種樹書』花

月桂花葉常若蟲食者、以魚腥水澆、乃止。

【訓読】

月桂花は魚腥水を以て澆げば、則ち葉に蟲を生ぜず。葡萄は米泔水と黑豆の皮を用て同に澆ぐ。

【現代語訳】

月桂花(ゲッケイジュ)は魚腥水(=魚をさばいたときに洗った水)を注げば葉に虫がつかない。葡萄は米のとぎ汁と黑豆の皮をいっしょに注ぐ。

【原文】

○盤榴、冬間霜下、放歸南[竹+居?] 簷下。土乾、特(?)〔疑衍字〕就日色中、略用水澆潤。春煖、放露地磚●〔石〕上。●〔如〕長●〔嫩〕苗、剪去、勿令高夫〔大〕。夏〔夏〕間〔間〕置烈日中、或屋上晒、尤加〔佳〕。免近地氣長根及有蚯蚓。兼猛日晒、則易着花。每日早、用水一盆或米泔、浸花斛。浸約半時久〔許〕、取出、日晒。如乾土〔疑土乾〕、又浸。或一兩日一浸。日中不必浸。又不必添肥上〔土〕。間用灌〔溝〕泥水澆之。無亦不妨。只要浸晒、別無他法。

【参考史料】

『種藝必用』

種盆榴法、冬間霜下、可收歸南簷下、如土乾、就日色中略用水澆潤。春煖、放露磚石上。如長嫩苗、随意剪去、勿令高大。夏間、置烈日中、或屋上晒、尤佳。免近地氣長根及有蟻蚓。兼猛日晒、則易着花。又須每日侵晨、用水一盆、或米泔沒花斛、浸約半時許、取出、日中晒。如覺土乾、又浸。或一兩日一浸。日中不可浸。又不必添肥土。間用溝泥水澆之。無亦不妨。只要浸晒、別無他術。

【訓読】

盤榴、冬間霜下れば、南簷の下に放歸す。土乾けば、就ち日色中に、略ぼ水を用て澆ぎ潤ほす。春煖なれば、露地の磚石上に放(お)く。長き嫩苗の如きは剪り去り、高大なら令む勿れ。夏間は烈日中に置き、或いは屋上に晒せば、尤も佳し。地氣に近づき根を長(い)だし、及び蚯蚓有るを免る。兼ねて猛日晒せば、則ち花を着け易し。日早毎に、水一盆或いは米泔を用て、花斛を浸す。浸すこと約そ半時許り、取り出だし、日に晒す。如し土乾けば、又た浸す。或いは一兩日に一たび浸す。日中は必ずしも浸さず。又た必ずしも肥土を添へず。間々溝の泥水を用て之れに澆ぐも、無きも亦た妨げず。只だ浸と晒を要し、別に他法無し。

【現代語訳】

盆栽の柘榴は、冬の間には霜が下りるので、南側の軒の下に置く。土が乾いたら、日が当たっているときに、少しばかり水を注いで潤す。春の暖かさになれば、露地の磚石の上に置く。長くなった若葉の枝は剪り取り、高く大きくならせてはいけない。夏の間は烈日の中に置き、あるいは屋根の上に晒しておくのがとりわけ佳い。地氣に近づ

いて根を伸ばし、また蚯蚓が出てくるのを免れる。そのうえ猛烈な日にさらすと花を着けやすい。毎朝、水を盆一杯あるいは米のとぎ汁に花斛(1)を浸す。およそ半時ばかり浸したら取り出して、日に晒す。もし土が乾いたら、さらに浸す。あるいは一兩日に一度浸す。日中は必ずしも浸さない。また必ずしも肥えた土を加えない。時には溝の泥水を注ぐが、無くてもかまわない。ただ浸すことと晒すことが必要で、その他の方法はない。

【注】

(1)「斛」は四角の升の意。升形の容器を盆栽に用いたのであろう。宋・周密撰『武林舊時』挑菜に「二日、宮中排辦挑菜御宴。先是内苑預備朱綠花斛、下以羅帛作小卷、書品目於上。繫以紅絲、上植生菜薺花諸品。」とある。

【原文】

○石菖蒲喜洗根、頻洗則葉細。而秀極怕煙。人家多置之神佛供養、纔被香煙澆(遶)者、無不爛死。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』種植雜法

石菖蒲喜洗根、頻洗則葉細、而秀極怕煙、人家多置之神佛供養、才被香煙遶者、無不爛死。

『種藝必用』

石菖蒲喜洗根、頻洗則葉細、而極秀發。不可近煙、煙薰則爛死。

【訓読】

石菖蒲は根を洗ふを喜ぶ。頻りに洗へば則ち葉細し。而して秀(ほい)づれば極めて煙を怕る。人家多く之れを神佛に置きて供養するも、纔かに香煙の遶るを被むれば、爛死せざる無し。

【現代語訳】

石菖蒲は根を洗われるのを好む。何度も洗えば、葉は細くなる。穂が出たらきわめて煙を恐れる。人家の多くはこれを神・佛に供えて供養するけれども、少しでも香の煙がまつわりつくと、みな腐って枯れてしまう。

【原文】

○又石菖蒲、用石泉及夫〔天〕雨水、不可用井水河水。若無油膩塵垢、不必易水。夜移露天、見起旦〔三字當作旦起見〕日即收之、則可久也。或云、〔置〕缸貯雨水、三、五日一次、用杓爬過別●〔缸〕、去其滓涕。如是三、五次、其水清、方可頻比換浸。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』種植雜法

石菖蒲、須石泉及天水・雨水、不可用井水・河水。若無油膩塵垢、不必頻易。夜移置露天、旦起見日即收入則可久也。或云、須用缸貯雨水、三、五日一次、用杓爬過別缸、去其滓涕。如是三、五次、其水清、方可頻換浸、井水・山泉皆不如也。

『種藝必用』

石菖蒲、須用石泉及天雨水、不可用河井水。若無油膩塵垢、不必頻易。夜移置露天、旦起見日收入、則可久也。或云、須用缸貯雨水、三、五日一次、用杓爬過別缸、去其滓涕、如是三、五次、其水清、方可頻頻換浸。井水・山泉皆不如。

【訓読】

又た石菖蒲は、石泉及び天雨水を用ふべく、井水・河水を用ふ可からず。若し油膩の塵垢無ければ、必ずしも水を易へず。夜は露天に移し、旦に起きて日を見て即ち之れを収むれば、則ち久しかる可し。或いは云く、缸を

置き雨水を貯め、三、五日に一次、杓を用ひて別缸に爬過し、其の滓涕を去る。是くの如く三、五次、其の水清かれれば、方めて頻頻と換へて浸す可し。

【現代語訳】

また石菖蒲には、岩の間から流れ出る泉水および雨水を用い、井戸水や河の水を用いてはいけない。もし油性の汚れがなければ、必ずしも水を取り替えない。夜は露天に移し、朝に起きて日光を見たらすぐに取りこめば長持ちする。ある人がいう、缸を置いて雨水を貯め、三～五日に一度、杓を使って別の缸に移し入れ、その汚れを取り去る。三～五度、このようにするとその水は清くなるので、そこではじめて〔石菖蒲の水を〕何度も取り換えて浸すのがよい。

③【催花法】

【原文】

用馬糞浸水澆之。三、四日内開者、次日盡開。

【参考史料】

『分門瑣碎録』澆花法

催花法 用馬糞浸水、前一日澆之、三、四日方開者、次日盡開。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

催花法、用馬糞浸水澆之、三、四日内開者、次日尽開。

『種樹書』

催花法 用馬糞浸水、前一日澆之、三、四日方開者、次日盡開。

『便民圖纂』卷五 樹藝類上

催花法 用馬糞浸水澆之、當三、四日開者、次日盡開。

『居家必用事類全集』戊集卷之十

催花法 凡花用馬糞浸水澆之、三、四日開者、次日盡開。

【訓読】

花を催(うなが)す法

馬糞もて浸せし水を用ひ之れに澆ぐ。三、四日内に開けば、次日盡く開く。

【現代語訳】

牡丹の開花をうながす方法

馬糞を浸した水を用意してこれに注ぐ。三、四日以内に開けば、翌日すべて開花する。

○菊花蕊未開、每蕊以龍眼殼罩〔罩〕之。至欲開時、以硫黄水。次早去罩〔罩〕即開。

【参考史料】

『分門瑣碎録』雜説

菊花大蕊未開、每蕊以龍眼殼罩之、至欲開時、隔夜以硫黄水灌之、次早去其罩、即大開。

【訓読】

菊の花蕊未だ開かざるに、蕊毎に龍眼の殻を以て之れを罩ふ。開かんと欲する時に至れば、硫黄水を以(もち)ふ。次早、罩ひを去れば即ち開く。

【現代語訳】

菊の花蕊(つぼみ)がまだ開かないとき、花蕊ごとに龍眼の殻で覆う。開こうとする時になったら、硫黄水を注ぐ。翌朝、覆いを取り去ればすぐに開く。

○蓮花未開、將竹針十家〔字〕針〔疑衍字〕筓〔捲〕之。白汁出、然後插瓶中便開。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』雜說

蓮花未開者、將竹針十字捲之、白汁出、然後插瓶中、便開。

『種藝必用』

蓮花未開者、先將針十字捲之、白汁出、然後插瓶中、便開。

【訓読】

蓮の花未だ開かざるに、竹針を將て十字に之れを捲す。白汁出づれば、然る後に瓶中に挿せば便ち開く。

【現代語訳】

蓮の花がまだ開かないとき、竹の針で十字に傷つけめくる(1)。白い汁が出るので、その後に瓶の中に挿せば花が開く。

【注】

(1)原文の「筓」は魚を取る道具の意。「捲」は「巻く、治める」の意。どちらも合わないので、意を以て解す。

③【養花法】

牡丹芍薬挿餅中、先焼枝、断處令焦、鎔蠟封之。乃以水浸、可数日不萎。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』雜說

牡丹・芍薬挿瓶中、先焼枝、断處令焦、鎔蠟封之、乃以水浸、数日不萎。

『種樹書』花

芍薬・牡丹摘下、焼其枝挿瓶中、後入其柄、以蠟封之、尤妙。

『便民圖纂』卷五 樹藝類上

牡丹・芍薬挿瓶中、先焼枝断處、鎔蠟封之、水浸、可数日不萎。

【訓読】

花を養ふ法

牡丹・芍薬を餅中に挿すに、先づ枝を焼き、断ちし處を焦(こが)さ令め、蠟を鎔きて之れを封ず。乃ち水を以て浸せば、数日可(ばかり)萎(しぼ)まず。

【現代語訳】

花を長持ちさせる方法

牡丹・芍薬を瓶に挿すとき、まず枝を焼き、切り取ったところを焦がし、蠟を溶いて封をする。そうして水に浸せば、数日ばかりは萎まない。

○蜀葵挿餅中即萎。亦焼根、以白〔百〕沸湯浸之、復活。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』雜說

蜀葵挿瓶中即萎、以百沸湯浸之、復甦、亦焼根。

【訓読】

蜀葵は餅中に挿せば即ち萎む。亦た根を焼き、百沸湯を以て之れを浸せば、復た活く。

【現代語訳】

蜀葵(タチアオイ)は瓶に挿せばすぐに萎む。やはり根を焼き、長く沸かした湯に浸せば、復活する。

○餅中牡丹芍薬花蔕者、剪去下截爛處、用竹篾〔篋〕架於缸上、盡浸枝梗、一夕色鮮如故。

【参考史料】

『分門瑣碎録』雑説

餅中牡丹・芍薬花蔕者、剪去下截爛處、用水竄、架於缸上、盡浸枝梗、一夕色鮮如故。

『種藝必用』

餅中牡丹・芍薬花蔕者、剪去下節爛處、用竹篋架於缸上、盡浸枝梗、一夕色鮮而故。

【訓読】

餅中の牡丹・芍薬の花の蔕(しお)れし者は、下截の爛りし處を剪り去り、竹篋を用て缸上に架け、盡く枝梗を浸せば、一夕にして色鮮かなること故の如し。

【現代語訳】

瓶中の牡丹・芍薬の花の萎れたものは、下部の腐ったところを切り取り、竹篋(=しっぺい)を缸の上に架けわたして、枝や茎をすべて〔水に〕浸せば、一晩で元のように色鮮かになる。

○餅養荷花、先将花倒之、灌水令滿〔滿〕、急挿餅中、則久而不蔕。或先以花入餅、然後注水、其花亦開。

【参考史料】

『分門瑣碎録』雑説 『種藝必用』同文

餅内養荷花、先將花倒之、灌水令滿、急挿瓶中、則久而不蔕。或先以花入瓶、然後注水、其花亦開。

【訓読】

餅もて荷の花を養ふは、先づ花を將て之れを倒し、水を灌ぎて満たさ令め、急ぎ餅中に挿せば、則ち久しくして蔕れず。或いは先づ花を以て餅に入れ、然る後に水を注がば、其の花も亦た開く。

【現代語訳】

瓶で蓮の花を養うには、まず花をさかさまにしておき、瓶に水を注いでいっぱいにし、急いでその中に挿せば、長持ちして萎れない。あるいはまず花を瓶に入れ、その後に水を注ぐと、その花もまた開く。

○冬間、花餅多凍破。以壚灰置餅底下則不凍。用硫黄置餅内亦得。

【参考史料】

『分門瑣碎録』雑説

冬間、蘭花瓶多凍破、以壚灰置底下則不凍。或用硫黄置瓶内、亦得。

『種藝必用』

冬間、花瓶多凍破、以壚灰置底下則不凍。或用硫黄置瓶内、亦得。

『纂圖增新群書類用事林広記』乙集卷上、竹木類・栽種花法

花餅、冬間多凍破、以炉灰或硫黄置餅底則不凍。

【訓読】

冬間、花餅多く凍破す。壚灰を以て餅の底下に置けば則ち凍らず。硫黄を用て餅内に置くも亦た得。

【現代語訳】

冬の間、花瓶が凍って割れることが多い。壚の灰を瓶の底に置けば凍らない。硫黄を瓶内に置くのもまたよい。
(上層完)

下層末尾

附遺

④【培養花法】

【原文】

牡丹亦於八九月時、隔二年一次、用土培壅其根。約高一、二寸、至穀雨時、花正放、必用高幕遮日、則花耐久不落。纔落則剪其枝、勿令結子。如結子、至來春必不茂。剪花枝不可太長。恐損花芽。夏月伏中、晝宜葦箔遮日、則不晒損花芽。冬至靠北豎立高架、縛草薦以避〔風寒〕。此培養花之法也。

【参考史料】

『二如亭群芳譜』養花

培養常在八九月時、隔二年一次、取角屑硫黄、碾如麵、拌細土粉、挑動花根、壅入土一寸外、用土培、約高二、三寸。……開時必用高幕遮日、則耐久。花纔落便剪其蒂、恐結子則奪來春之氣。剪勿太長、恐損花芽。伏中仍要遮護花芽、勿令晒損。……冬至北面豎草薦、以障風寒。

【訓読】

花を培養する法

牡丹は亦た八、九月時に於いて、二年を隔てて一次、土を用て其の根を培壅す。約そ高さ一、二寸にして、穀雨の時に至り、花正に放(ひら)かんとすれば、必ず高き幕を用て日を遮れば、則ち花は久しきに耐へて落ちず。纔かに落ちむとすれば則ち其の枝を剪り、子を結ば令むる勿れ。如し子を結ばば、來春に至りて必ず茂らず。花枝を剪りて太だ長くす可からず。花芽を損ふを恐るればなり。夏月の伏中、晝は宜く葦箔もて日を遮ぎらば、則ち花芽を晒損せず。冬至らば、北に靠(よ)りて高架を豎立し、草薦を縛りて以て風寒を避く。此れ花を培養するの法なり。

【現代語訳】

牡丹の花の培養法

牡丹は八、九月の時期に、二年おきに一度の割合でその根に土寄せして成育する。その高さがおよそ一、二寸になり、穀雨の時になって花が開こうとしたら、必ず高い幕を張って日光を遮れば、花は長持ちして落ちない。花が落ちそうになったらすぐにその枝を切り、実を結ばせてはいけない。もし実を結ばせると、翌春になってきつと繁茂しない。花枝を切って長くなり過ぎないようにすべきである。花芽を損うのを恐れるからである。夏の伏中、昼に葦簀(よしず)で日光を遮れば、日焼けで損傷することはない。冬になったら、北側に高い木枠を立て、蓆(むしろ)を縛りつけて冷風と寒さを避ける。これが牡丹の花を培養する方法である。

④【療花法】

【原文】

○牡丹、冬至日、以鍾乳粉和硫黄少許、置根下土中、不茂者即茂盛(一)。牡丹根甜、多引土蚁蟻等虫、食之。但於初栽時、用白斂末拌土置根下、虫皆不食。又有一種小蜂、能蛀枝梗。至秋冬亦藏枝梗中。又有蛀虫紅色、能蛀木心。將所蠹蛀之穴、用硫黄末填之。然後用杉木釘訂〔釘〕之、而虫斃矣。又法、於秋冬落葉時、尋其蜂

聚處、湏捫捉盡其蜂、亦是良法也(二)。

【参考史料】

(一)『二如亭群芳譜』養花

冬至日、研鍾乳粉、和硫黃少許、置根下土中、不茂者亦茂。

(二) 同上 衛花

牡丹根甜、多引蟲食。栽時置白藪末于根下、虫不敢近。……又有一種小蜂、能蛀枝梗。秋冬即藏枝梗中。又有紅色蠹虫、能蛀木心、尋其穴、填硫黃末、或杉木釘釘之。……又法、于秋冬葉落時、看有穴、枯枝拆開、捉盡其虫亦妙。

【訓読】

花を療す法

牡丹は、冬至の日、鍾乳粉と硫黄少し許りを以て、根下の土中に置けば、茂らざる者即ち茂盛す。牡丹の根甜ければ、多く土蚁・蟻等の虫を引き、之れを食ふ。但だ初めて栽ゑし時に、白藪末を用て土を拌して根下に置けば、虫は皆な食らはず。又た一種の小蜂有りて、能く枝梗を蛀(むしば)む。秋冬に至れば亦た枝梗中に藏(かく)る。又た蛀虫の紅色なる有りて、能く木心を蛀み、蠹む所の蛀の穴を將て、硫黄末を用て之れを填む。然る後に杉の木釘を用て之れを釘(くぎ)てば虫は斃る。又た法に、秋・冬の落葉の時に、其の蜂の聚る處を尋ね、湏く捫(さぐ)りて其の蜂を捉へ盡くすも亦た是れ良法なり。

【現代語訳】

花の治療法

牡丹は、冬至の日に、鍾乳石の粉と硫黄少しばかりを根の下の土中に入れれば、茂っていないものはすぐに繁茂する。牡丹の根は甘いので、土蟻・根切り虫など多くの虫を引きつけ、食われてしまう。しかし初めて栽培する時に、白藪の根の粉末を土とかき混ぜて根の下に入れれば、どの虫も食わない。また一種の小蜂がいて枝・茎を蝕み、秋・冬になるとまた枝・茎の中に隠れる。また紅色の蛀虫(=木食い虫)がおり木の芯を蝕む。蝕んだ蛀虫の穴に硫黄の粉末を埋め、その後に杉の木の木釘を打てば虫は死ぬ。別法、秋・冬の落葉の時に、その小蜂が集まっている所を探し、しっかり探し出してその蜂を取り尽くすのもまた良法である。

④【花木宜忌】

【原文】

凡種好花木、其傍湏種葱薤之類、庶〔避〕群麝之觸也。菜園中間、更宜種牡丹芍薬。尤盛。

【参考史料】

『分門瑣碎録』種花

凡種好花木、其傍湏種葱・薤之類。庶避麝香之觸也。

『種藝必用』

凡種好花木、其傍湏種葱・薤之類。庶辟麝香之觸也。

『種樹書』

凡種好花木、其傍湏種葱・薤之類。免麝香觸也。

【訓読】

花木宜く忌むべし。

凡そ好き花木を種うるに、其の傍に湏く葱・薤の類を種ゑ、群麝の觸るるを避くるを庶ふ。菜園中間、更に宜く牡

丹・芍薬を種うべし。尤も盛んならん。

【現代語訳】

花木の栽培で避けるべきこと。

およそ良い花木を栽培するには、その傍に必ず葱(ネギ)・薤(ラッキョウ)の類を植え、麝香鹿が触れるのを避けるよう配慮する。菜園の間には、加えて牡丹・芍薬を植えるのがよい。とりわけ繁茂するだろう。

【原文】

○牡丹忌麝香・桐油・生漆〔漆〕氣。忌慎用熱〔熱〕手摩擦拭之。久〔疑衍字〕勿令草長、侵奪土之膏澤。花壇四畔、不可踏實。地氣不升。

【参考史料】

『二如亭群芳譜』衛花

又最忌麝香・桐油・生漆、一着其氣味、即時萎落。……忌用熱手摩撫搖撼。……忌栽木斛、不耐久。花旁勿令長草、奪土脈。不可踏實、地氣不升。

【訓読】

牡丹は麝香・桐油・生漆の氣を忌む。慎んで熱手を用て摩擦し之れを拭ふを忌む。草を令て長ぜしむる勿れ。土の膏澤を侵奪せん。花壇の四畔は、踏實す可からず。地氣升らざればなり。

【現代語訳】

牡丹は麝香・桐油・生漆(きうるし)の氣を嫌う。くれぐれも熱い手で摩擦し、拭ってはいけない。雑草を成長させてはいけない。土の膏澤(=めぐみ)を奪い取るであろう。花壇の四方は踏みしめてはいけない。地氣が升ってこないからである。

【原文】

○牡丹・芍薬不宜置木斛中。不耐久。更宜避風處。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』花木忌

芍薬・牡丹不可置木斛中。不耐久。仍須要避風處。

『種樹書』

牡丹・芍薬不可置木斛中。不耐久。須要避風處。

『二如亭群芳譜』衛花

忌栽木斛、不耐久。

【訓読】

牡丹・芍薬は宜く木斛中に置くべからず。久しきに耐へず。更に宜く風處を避くべし。

【現代語訳】

牡丹・芍薬は木斛(モッコク)〔製の器あるいは木の斛〕の中に置いてはいけない。長持ちしないからである。更に風当たりの良いところを避けるのがよい。

【原文】

○花中最忌麝香、瓜尤忌〔之〕。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』花木忌

花中忌麝、瓜尤忌之。

『居家必用事類全集』戊集卷之十

凡花藥最忌麝香、瓜尤忌之。

【訓読】

花中は最も麝香を忌み、瓜は尤も之を忌む。

【現代語訳】

牡丹が咲いているときは最も麝香鹿を嫌うが、瓜はとりわけこれを嫌う。

【原文】

○種蘭蕙、忌用水酒。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』花木忌

種蘭蕙、忌用水酒。

【訓読】

蘭蕙を種うるに、水酒を用うるを忌む。

【現代語訳】

蘭蕙〔=蘭の一種〕を栽培するとき、水酒〔=もち米・もちあわで造った酒?〕を用いてはいけない。

【原文】

○以烏賊魚骨鍼花樹、花即壞。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』花木忌

以烏賊魚骨鍼花樹、花輒死。

『二如亭群芳譜』衛花

桂及烏賊魚骨刺入花梗、必死。

【訓読】

烏賊魚の骨を以て花樹に鍼うつと、花は即ちに壊す。

【現代語訳】

烏賊魚(イカ)の骨で花の樹に鍼をうつと、花はすぐに枯れる。

【原文】

○蓮花、以手搯去荷葉〔中間心〕、以桐油滴。桐油數點入其中、滿池俱死。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』種花

荷蓮極恐桐油。就池、以手搯去荷葉中間心、滴數點桐油、入其中。雖頃、荷蓮亦死。

『種藝』

蓮荷極畏桐油。就池、以手搯去葉中間心、滴數點桐油、入其中。雖頃、蓮荷亦死。

【訓読】

蓮花。手を以て荷の葉の中間心を搯去し、桐油を以て滴らす。桐油数點其の中に入れば、滿池俱に死す。

【現代語訳】

蓮の花。手で荷(ハス)の葉の中間の芯を摘まみ取り、桐油を滴らす。桐油数滴がその中に入ると、池全体の蓮が枯れる。

【原文】

○菊花根最惡水、不宜以水澆之。於根則置水一盞、剪紙條一根、濕之。半纏根莖上、半在盞中、自然引上也。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』雜說

菊花根倒置、水一盞、剪紙條一枚、濕之、半纏根上、半在盞中、自然引上。蓋菊根惡水也。

『種藝必用』

菊花根倒置、水一盞、剪木條一枚、濕之、半纏根上、半在盞中、自然引上。蓋菊根惡水也。

【訓読】

菊花の根は最も水を悪めば、宜しく水を以て之れに澆ぐべからず。根の則に水一盞を置き、紙條一根を剪り、之れを湿らす。半ばは根莖上に纏し、半ばは盞中に在らしめば、自然引上す。

【現代語訳】

菊花の根は最も水を嫌うので、水を注ぐのはよくない。根の傍に盃一杯分の水を置き、細長い紙を一本剪り取り、これを湿らせる。その半分は根・莖に巻き付け、半分は盃の中に入れておけば、自然と水を吸い上げる。

【原文】

○花忌孝子・孕婦折摘。則數年不着花。

【参考史料】

『分門瑣碎錄』果木忌

果木樹如曾經孝子及孕婦手折、則數年不着花、或不甚結實。

『種樹書』果

果木樹如曾經孝子及孕婦手折、則數年不着花、或不甚結子。

【訓読】

花は孝子・孕婦の折摘するを忌む。則ち數年花を着けず。

【現代語訳】

花⁽¹⁾は孝子・妊婦が手折るのを嫌う。[そのようにすると]數年は花を着けない。

【注】

(1)原文の「花」は出典類をみるとすべて「果木樹」となっている。原文の誤りかもしれない。

④【染花法】

【原文】

芙蓉、隔夜以靛水調紙、蘸花莖上、以紙裹。來日開成碧色花。五色者皆可染。

【参考史料】

『種藝必用』

芙蓉、隔夜以靛水調紙、蘸花蕊上、以紙裹、來日開成碧色花。五色花皆可染。

『種樹書』

芙蓉未開、隔夜以靛水調紙、蘸花蕊上、以紙裹蕊口、花開成碧色。花五色、皆可染。

【訓読】

芙蓉は、隔夜靛(テン)水を以て紙に調(うつ)し、花蕊(ズイ)上に蘸(ひた)し、紙を以て裹む。來日碧色の花を開成す。五色の者は皆な染む可し。

【現代語訳】

芙蓉は、一晚靛水(=藍染の液)を紙に浸みこませ、花蕊(=つぼみ)に浸して、紙で包む。後日、碧色の花を開く。五色の花はみな染めることができる。

世八巻終